
異郷の空は青く

mackey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異郷の空は青く

【Nコード】

N03640

【作者名】

m a c k e y

【あらすじ】

平和に日常を過ごしていた青年は、ある日、事件に巻き込まれてしまう。凶弾に倒れた青年が次に目を覚ましたのは、『NARUTO』の世界だった。状況に戸惑いながらも、この世界での自分の存在意義を見出し、大切な人達を護るために成長していく。「未来を変える」、その先に待つものは……

* 注意*

この作品はNARUTOのファンフィクション作品です。処女作、

オリ主、オリキャラ、独自解釈といったことを理解した上で、ご覧頂ければ幸いです。苦手な方はご遠慮ください。また、表現が稚拙な点があります。指摘していただければすぐ対処したいと思います。尚、辛辣なものでも構いません、感想・評価をしていただくと、作者は裸踊りをして、喜ぶみたいです。

01 続く記憶と新たな命（前書き）

この小説はNARUTOのファンフィクションです。

オリ主視点で進み、努力型・非最強となる予定です。でもまあ、それなりには強くなると思う。それは主人公補正ということ。

また、オリキャラ多数が予測されます。

苦手な方は『戻る』をクリック。

2010・10・25 改稿（縦書きPDF対策）

2010・12・05 若干修正

01 続く記憶と新たな命

どのくらい気を失っていたんだろう……視線の先には、四角いタイル張りの天井が映っている。

最後の記憶は……そう、確かあの時、お金を卸すために入った銀行に強盗が押し掛けて来たんだ。

平和だと思っていたこの国であんなことが起きるなんて、流石に吃驚したな。

強盗は三人組。その三人ともが黒のライダースーツに身を覆い、フルフェイスメットを被って顔を隠すという出で立ち。強盗というイメージをそのまんま体現したかのような姿は、もし強盗というものを説明する資料を作るなら、この写真を撮って貼り付けてやりたい。

しかし、姿がそうでも、強盗たちの行動を見るには、お世辞にも計画的とはいえないお粗末なものだった。確認する術は無いが、衝動的な動機であり、十分な策を練らずに実行に移したのかもしれない。

そんな強盗ではあったが、残念なことに銀行内は次第に制圧されていくこととなった。何故なら、どこで手に入れたのか、彼らの手にはそれぞれ一丁ずつの拳銃が握られていたからだ。

拳銃にに対抗する手段の無い俺達は、誰も抵抗することなく床へ座り込んで、唯唯強盗たちの行動を窺うことしか出来なかった。

粗方の制圧を終えた強盗三人の内の一人は、窓口の銀行員に対し

て銃口を向け、現金を要求。残りの二人は互いに背中を合わせる様な恰好で、座り込んでいる人質となった俺達に対して、銃で威嚇していた。

銀行員や客を一カ所に纏めたりといったことは行われず、そういった所からも、この計画の稚拙さが窺い知れた。

そして強盗たちが慣れない犯行にもたついていている間に、状況は一変する。サイレンの音が近づいて来たのだ。通報を受けた警察の機動隊が到着したらしく、建物を包囲し、彼らに向かって投降を呼びかける声が聞こえ始めて……その時だっただろうか？

平時ならば、漸く賑わい始める時間帯である田舎の街だが、その時は野次馬や報道陣が大勢居て、それらの喧騒が溢れ返り、銀行内にまで届く程だった。

現実味の無い、ドラマで見たことしか無い光景。どこか他人事のように、銀行の窓の向こう側のそんな様子を眺めていると、突如、その街の喧騒を吹き飛ばす程の音が響き渡ったんだ。耳をつんざぐかのような乾いた音。

それは銃声だった。

一瞬、辺りが音を奪われたかのように静まり返り、そのまた次の瞬間には、先程よりも一際大きくなった喧騒が津波となって押し寄せた。俺の周りからは、悲鳴が聞こえていたような気がする……。思ったように作業が進まずに苛立ち、更には警察によって逃亡もままならない状況に追い込まれた強盗の一人が、拳銃を撃ち放ったらしい。

銃声が響いた瞬間、俺は自分の状況を理解出来なかった。胸に焼けつくような痛みを感じ、口に溢れてきた血、それに呼吸が出来ない苦しさ。

何が起きたのか？

自分が今し方受けた衝撃が何なのか？

何故拳銃の銃口が此方を向いて、硝煙を昇らせているのか？

……そう、撃たれたのは俺だったんだ。今になって言えば、座っていた位置的に、強盗の一人の一番近くに居たことが運の尽きだったな。

俺を撃った強盗は、蹲った俺のすぐ横にいた客を人質に捕り、機動隊の本隊がいるであろう正面入口へと向かっていったことを覚えている。

恐らく警察に、自分たちの要求を突き付けるためだったんだろうと思う。俺が撃たれたことによって、既に只の脅しではないことは証明されていたし……。

滲む視界で、俺はそれを見送ることしかできなかった。

そして、その時にやっと、自分が撃たれたことを理解した。……同時に、もう助からないであろうことも。

理解した時にはもう、痛さや苦しさといったものが遠のき始めていて、ゆっくりと視界が闇に落ちていった。

そこで記憶は途切れている。

そうだよ、俺は銃で撃たれたんだ！

あの時は死んだと思ったけど……今はこうして意識がある。

ということは、あの怪我にも関わらず、奇跡的に助かったのか？とすると、ここは病院だろうか？

体中を感じる、まるで自分の身体ではない様な違和感は、怪我のせい？

犯人は捕まったんだろうか？

相次いで湧き上がる疑問が頭の中を駆け巡る。そしてその答えを求め、周囲を確認するために身体を動かそうとした。

「うう」

……身体が重い。動かそうとした身体は、寝返りすら俚ならず、僅かに横にずれるだけだ。

背中から伝わる感触で辛うじて、ベットに寝ているんだということが分かる。

身体を動かそうとした際に、うめき声を漏らしてしまったが、喉でも痛めたかな？

自分の声とは思えぬ、妙に高い声色で不思議に思う。

「ふえ！？」

おおっ！？ 吃驚した！

突然、左側から女性の空気の抜けたような声が聞こえた。

「え、嘘っ、生き返った！？」

くりつとした大きな瞳の女性が、こちらを覗きこむように確認したあと、

「せんせー！ せんせー！ わっ！ ぎゃっ！」

叫びながら物凄い勢いで走り去り、その先で人の転ぶ痛々しい音がするが、すぐにまた走る音に変わり、遠退いていった。

うわぁ、痛そう……というより、一体何だったんだろう？

そう思いつつ、状況の確認を再開する。

違和感を感じるものの、手はなんとか動かせるようだ。

そして、その手を目の前に持って来た瞬間に、俺は目を疑う。

「ああう？ あああ？」

は？ 何これ？

目に映ったのは小さな小さな手。不意に出した言葉は言葉として発音できず、やはり声色は随分と高い。

俺は一度、目を瞑る。きっと何かの見間違いだろう……。ああ、

疲れてるのかなあ。

そして目を開き、再び手を見た。そこにあつたのは……やはり小さな小さな手。

「……うーう、あう？ あーうあ？ ヴー？」

……これじゃまるで赤ん坊じゃないか！ え？ これっ？ なんなん？ どういうことなん！？

意味が解らない！

今の今まで結構冷静に考えることが出来ていた頭の中は、一気に恐慌状態に陥る。

落ち着け、取り敢えず落ち着け、とにかく落ち着け！

混乱しつつも頭と心を落ち着かせようと一旦思考を打ち切る。

数分は経っただろう、少し冷静さを取り戻し、状況の確認から整理へと移行する。

俺は拳銃で撃たれ、死んだと思えるほどの怪我を負った筈。そして気が付けば、若干古めかしい造りではあるが、恐らくは病院と思われる場所に寝ていて、何故か、俺は赤ん坊の姿である。

これらのことを踏まえて考えられること？

……解らない。こんなことがあるのだろうか？ いや、もしかしたら……

『転生』という言葉が頭の中に浮かんた。無宗教な俺は、生まれ変わりが本当にあるなんて考えたこともなかった。

だけど……俄かには信じがたいが、今現在、赤ん坊の姿でここにいることの理由を考えると、他に考え付かない。

もし、そうだとしたら……だ、

何故記憶を持ったままなのか？

ここはどここの病院何だろうか？

生まれ変わったというのなら、親は？

新たな疑問がまた湧き上がる。

そうやって、誰も答えることの無い疑問を頭に廻らせている内に、先程女性が駆けて行った方向から、今度は複数人の人間が走る音が近づいて来る。俺は首を何とか動かし、その方向を確認した。

白衣のようなものを着た壮年の男性を先頭に、先程の女性も含んだ数人がこちらに走ってくる。

間もなくベットの横にその一団が到着し、俺を見るなり口々に、

「信じられない！」

「ありえない！」

「奇跡だ！」

などと、驚嘆の様相で声をあげている。

そして、訳も分からずに、すぐに部屋を移され、検査のようなものを受けた。

ちよっ、いきなり何なんだよ。

訳も分からず、身体を触られることに抵抗を示そうと足掻いたが、力はやはり赤ん坊のものであり、大人達の手を振り払うには至らない。

その検査は身体の部分部分に手を翳すだけのもので、それによって何が分かるのか全く理解できなかったが、手を翳された部分から暖かい何かが流れてくるように感じた。

それはそれで不思議な感じだったけれど、俺の頭の中はもう、そんなことはどうでもいい。俺はここで、またもや衝撃を受けることとなったのだから。

検査のため、羽織っていた白装束を脱がされた時に見えた俺の身体。

そこには、男子であるならば在るべきであろうものが無かったのだ。

えっと、えーと、んん？ どういうことだ？

混乱と動揺を通り越し、茫然自失としている内に、いつの間にか検査を終えた俺は、哺乳瓶のミルクを本能的に飲み干し、気付けば病室らしい場所に移動させられていた。

病室の奥の四角に切り取られた窓へ目を向けると、そこからはポツカリと、澄んだ青い空が見え、暖かそうな日差しが差し込んでいる。日差しの角度から予想するに、昼過ぎといったところか。もう、疲れたよ、一体どうなってるんだよ……誰か、説明してくれ。

いい加減、いろいろと考えることに疲れた俺は、思考を止めた。

……いや、正確に言えば、次第に眠気に襲われ、その本能に身を任せただった。

02 前世の占いと今世の理由(前書き)

| | |
|------------|--------------|
| 2010・10・25 | 改稿(縦書きPDF対策) |
| 2010・12・05 | 若干修正 |

02 前世の占いと今世の理由

次に目を覚ましたのは、窓の外が朱に染まり始めた頃だった。

俺は、一眠りしたことで気を持ち直すことに成功した。未だ理解出来ないことは多いけど、それでも少しずつ現実を受け入れ始めていた。……我ながら切り替えが早いなと思う。だけど、無理にでも納得していかないと、これから先のことを考えることは出来ないだろう。

深く考えることを辞めて、赤ん坊の身体で辺りを見回す。もう、多少のことでは驚かない自信がある。

周りには三人の人間が、ベットを取り囲むように立っている。

右側には、見覚えのある顔。この第二の人生での、記念すべき一人目となった女性がいた。浅葱色の半袖ジャケットを着込み、下は黒のサバイバルパンツという出で立ち。

濃い茶色の瞳はクリッと大きく、愛嬌ある顔のつくりだ。癖っ毛の金髪ショートカットが相まって、どこか猫の様な雰囲気醸し出している。

茶色の瞳は落ち着きなく、キョロキョロ動く。成程、これはドジっ子だ。

初めて目覚めた際の慌てた反応も含めて、会ったばかりの人間なんだが、勝手に彼女をそう評価した。……おそらく間違っではないと思う。

足元には、これまた見覚えのある壮年の男を確認できた。俺を検査した、医者だと思われる人物だ。

黒い髪の毛は短いがボサボサ、顔には無精髭が生えており、少したれ気味な目元に、濃い隅が出来ている。

とてもじゃないけど、その様子からは清潔感を感じることが出来ないし、疲れの隠せない表情は健康的とも言い難く、赤十字の紋が入った白衣を纏っていなければ誰も彼を医者だとは思わないだろうな。

最後に左側に立つ人物へと視線を向けた……と同時に、俺は泣き出してしまった。

あれ？ 泣くつもりなんて毛頭無かつただけど、どうもこの身体は時々、思ったようにコントロールが利かないことがあるみたいだ。

自分の意識と赤ん坊としての意識が別々に存在しているかのような、そんな感覚。泣いたのは、赤ん坊としての本能だろうか？

ともかく、最後に向けた視線の先には、白の長着に黒の羽織といったシンプルな和装の人物がいた。

背中の真ん中辺りまで伸ばしたオールバックの長い髪に、精悍な顔立ちだ。そして何よりも特徴的なのが、異常なまでに威圧感を放つ白い瞳の双眸。

怖い……そりゃ、そんな瞳で見つめられたりや誰だって泣き出すわ。見るからに「その筋の人」という雰囲気纏っている。

こんな目の人、初めて見た。でも、気のせいかな、どこかでこの人を見たことがあるような気がするんだが……。

だけど、もし前世で出会っていたのならこんな特徴的な人間を忘れるはずもないし、はて……？

「起きてしまったな、ミナちゃん、ミルクを」

俺の思考を余所に、医者男が言う。

「は、はいっ！」

泣いている俺の頭を撫でながら「怖くないよー」と、小さな声で宥めくれていた、ミナと呼ばれた猫毛の女性は、ミルクを作るため

に部屋を出ていく。

遠くで誰かが転んだ音がした。

「ククツ、顔が怖いとさ」

ミナに替わり、泣く俺をあやしつつ、医者の方は笑いを堪えている。

一方の、言われた側の男を見ると、彼は威厳のある顔を少し歪めながらも口を開いた。

「……この子があいつの？」

「ああ、枕クウヤの娘だよ。まだ生まれて三ヶ月だと言うのに、可哀相に……。」

「《木ノ葉の亡霊》と言われたあいつも、九尾の狐の前には為す術も無かったか」

「今回の九尾事件では枕家の他にも四代目を始め、多くの優秀な忍者を失った。……大戦の傷跡も癒えきっていないというのに、木ノ葉は大丈夫なのか？」

「おそらく諸外国にはすでに情報は知れ渡っているだろうが、いずれも動きはない。大戦の被害はやつらとて同じだ。今は他国にかまけている場合ではないということだろう」

白い瞳の男がそう答えると、医者の方は安堵の息を吐く。

「ふう。ま、何にせよ、これ以上患者が増えないことを祈るよ。…

…じゃないと俺が死ぬ」

俺は二人の会話を一字一句逃さぬように聞いていた。その中には『九尾』『木ノ葉』『忍者』『四代目』……と、どこかで聞いたことのある単語が並ぶ。

そう、どれもこれも、前世で読んでいた『NARUTO』という漫画に出てくる言葉だ。

そして、とあることを思い出した。

前世で死んだ日の前日のことを……。

俺は六つ歳の離れた従妹と地元の祭りに来ていた。俺は人混みが嫌で、渋っていたんだが、従妹に押し切られる形で、仕方なく付き添うことにしたのだった。

「そんなんだから、いつまでも独り身なんじゃない？」

「関係無いだろ。それに、人のこと言えない癖に」

「私はまだ若いからいいんだって」

何気ない会話をしながら屋台を一通り見て回り、唐揚げや焼きそばで腹も一杯になって来たので、そろそろ帰ろうということになった。

「じゃあ、最後にあれやっていこうよ」

従妹が指差した先には『占い』の垂れ幕を掛けた台が、連なる屋台の端にポツンとあり、初老一步手前程の男が、台の向こう側に座っているのが見える。

一回千円か……占いなんて、こういう機会でもなきやらないしな、まあいいか。

そう思い、従妹に連れ立って占い屋の前へ歩いていった。

「まずは、私から」

そう言って従妹は俺の財布から千円を抜き取り、店主に渡した。

今日は何故か俺の奢りということになっている。……社会人と学生ということもあり、これは仕方が無いのだと、俺は涙を呑む。

「では占わせて貰います。私が占うのは近い未来。見るのは目です。ちよつと失礼」

店主は、じいつと従妹の目を見る。従妹は少し身構えた様子だったけど、すぐに落ち着いた。

胡散臭いなあと感じつつ、その様子を静かに見守る。

「……これは。ううん。ええと、うん。……近い内に悲しみを伴う出来事があります。しかし、あなたを救いだす人もいます。周囲の

人たちの話に耳を傾けると良いでしょう。信頼できる人に相談するのも良いでしょう。強い心の持ち主のあなたはその反面、一度落ち込むと気を持ち直すまで、時間がかかるかもしれません。重要なのは一人で抱え込まないということです。時には人を頼ることも必要なのです。さすれば必ずや立ち直ることが出来ましょう。他は、そうですね、学業はまずまず。金運は思いがけぬ収入が在ることでしょう 以上です」

従妹は少し引き攣った表情をしている。……微妙な結果だったかな、仕方がないだろう。

そしてその表情のまま「ありがとう」と言い、おとなしく引き下がった。

「まあ、占いなんだし、あんまり気にすんなよ。じゃあ次は俺が」さっきまで従妹のいた位置に歩を進める が、

「申し訳ありませんが、今日の占いはここまでとさせていただきます」

店主は店を片付け始めたのだ。

「え、そんな。まだ日も暮れてないのに」

俺がそう言つと、店主は目を伏せ何か考えるような表情をしている。

「……ふむ、これも何かの縁か。一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

「え？ ああ、いいけど」

思いもよらない言葉に、訝しく思いつつ、続きを促した。従妹を見ると、同じく不思議そうな表情を浮かべている。

「うむ、では。……もし、生まれ変わるとしたならば、どんな世界に生まれたいと思いますか？」

何故いきなりそんなことを聞くのか、訳が分からずに困惑したが、少し考えた後、答える。

「漫画の『NARUTO』みたいな世界かなあ、忍術とか使ってみたいし」

「そうか、ありがとう。お礼にこのお守りを譲りましょう。きっとあなたの役に立ってくれるでしょう。……では失礼」

店主は小さな水晶の付いたキーホルダーを俺に手渡し、手慣れた手つきで店を片付け、さっさと歩いて行った。

「何だっただんだ？」

従妹と顔を見合わせ、問う。

「さあ？」

だけど、従妹の、心底わからないといった返事が返ってくるだけだった。

「それにしても、いい年して『NARUTO』の世界なんて、恥ずかしい？」

帰り道の途中、従妹が聞いてくる。

確かに子供染みていたかもしれないけど、他に思いつかなかったんだし、仕方が無い。

「いいじゃん、面白そうだし」

「私だったら、平和な世界って答えるけどなあ」

「どうせ叶うことなんて無いんだから、そんな真面目に答えても仕方ないじゃん」

「まあ、それもそっか」

真面目に答えるべきだったのかもしれない。

点と点が線へ、線と線が面へ。俺の中で一つの答えが生まれた。

あの占い師が何者かは、もはや分からない。魔法使い？ はたまた神か？ 悪魔か？ いずれにせよ、俺の様な一般人には理解できぬ力があつたのだろう。

まず、俺が次の日に死ぬことを知っていたのは間違いない。従妹の占い結果の『悲しい出来事』が俺の死のことだろう。あいつとは

それなりに仲が良かったから……。

そしてここは『NARUTO』の世界だと思われる。恐らく前世で死んだ時に、前日貰ったあの水晶の力か何かで、この世界に来てしまったと考えるべきか……。

先程の、医者と白い瞳の男の会話からすると、俺は『枕クウヤ』という人物の娘で、その『枕クウヤ』は九尾の襲撃で死亡。

この調子なら母親も亡くなってるのだろう。どうやら天涯孤独というやつらしい。

そして現在は、どういう訳か、既に生後三カ月らしい。俺にその三ヶ月間の記憶は無いし、ミナという女性が一番最初に言った言葉が「生き返った」ということから察するに、『転生』ではなく『憑依』に近いのかもしれない。

つまり、前世で死んだ俺は、『NARUTO』の世界の瀕死だった赤ん坊に『憑依』しました。……しかも女に。

ということらしい。信じられないけど、信じるしかないのだ。

……これはもしかしくなくても、拙い状況なのでは？

『NARUTO』の世界……不意にその言葉に対し、身の危険を感じた。

この世界では平気で人がバタバタ死んでいく。漫画を読んだだけでも、死亡する可能性のある出来事は数多ある。

あの時、従妹のように、平和な世界を望んでおけばよかったと後悔するも、既に時遅し。覆水盆に返らずである。

ならば……だ、原作の出来事に関わらず、平穏無事に生きていくことが一番生存確率が高い筈だ。

今にも恐慌状態に陥りそうな頭で思考を巡らせているうちに、ミナがパタパタと部屋に戻って来た。

手にはミルクを持って、指には部屋を出て行く前までは貼られて

いなかった絆創膏が貼られている。そしてそのまま俺の元へ駆け寄ってきて、俺は抱きかかえられた。

若い女性にこうして抱きかかえられる経験など、今まであっただろうか？ いや、ある筈が無い。

今はこんな体でもその精神はれっきとした男だったものだ。かなり気恥ずかしくなり、声を上げる。

「あうあう」

分かつてはいたけど、それは意味の伝わらぬ言葉にしかならなかった。

「はいはい、今あげますからねー」

ミナには俺の声が、催促しているように聞こえたらしく、そう返して来た。

あ、あの、頬に柔らかいものが当たってるんですが……。

赤ん坊らしい行動は、赤ん坊の本能が働くらしいというのを、少しずつ学習し始めている俺は、考えることを辞めて、本能に身を任せることにした。

03 今後の方針とお風呂事件（前書き）

| | |
|------------|--------------|
| 2010・10・25 | 改稿（縦書きPDF対策） |
| 2010・12・05 | 若干修正 |

03 今後の方針とお風呂事件

俺がミルクを飲み終わると、ミナはベットに俺を戻した。

周りには相変わらず、白い瞳の男と、不健康そうな医者、さつきまで俺にミルクを与えていたミナという女性が立っている。

白い瞳の男。初めて会ったにも係わらず、どこかで見たことがあると思ったのも、今ならばその理由が分かる。

『NARUTO』の登場人物の一人だからだ。彼は血継限界と呼ばれる、特異な能力を秘めた【白眼】を持つ日向の宗家『日向ヒアシ』その人である。

その日向ヒアシに対し、医者の男が話しかけ、再び会話が始まる。

「それで、本当にいいのか？」

「クウヤのやつとは昔からの付き合いだ。あいつが命懸けで守ったものを無碍にするほど、私は腐ってはいない」

「ま、こつちとしちゃ、孤児院に渡すよりは遥かにマシなんだがな。けど、お前は良くても、家の者は何という？ あの御堅い日向の敷居の内に日向家以外の者を入れるんだ。反発があってもおかしくない」

その言葉にヒアシがフツと表情を崩したのがわかる。

「心配しているのか？」

と言つて、一拍置いた後、再び毅然とした表情に戻し、話を続ける。

「日向家以外といえば、使用人としてそうだろう。別に、白眼を持たぬ者に日向の名を語らせるわけではない。あくまで後見人として引き取るだけだ。言いたいやつらには言わせておけばいい。もうすぐ我が日向にも嫡子が生まれる。そやつらにはこの子がその『世話役』だと言いつつ通せばいいだけのことだ。……それとも何だ？ 貴様がこ

の娘を引き取るというのなら話は別だが？」

それに対し、医者の方は忌々しそうに答える。

「俺はあんたの心配じゃなくて、この子の心配をしてるだけだよ！それに、どうせ俺にやそんな甲斐性はないよ！」

「そんなことは知っている」

医者の男はチツと舌打ちをしたが、ヒアシは全く気にするそぶりは無い。

「はあ……じゃあ、書類は通しとくからな」

「明日の朝、ここに使いを寄こす。今日はもう日が暮れる。私は火影様に呼び出されているしな、そろそろお暇させてもらおうか」

「わかったよ。ミナちゃん、後頼んだよ」

「は、はいい！」

今まで蚊帳の外で俺の頭を撫でていたミナは、いきなり話しかけられて驚いたらしく、声を裏返しながら返事していた。

俺は今の会話の流れから、自分の置かれている立場を理解した。

「あああああ、うああああい」

ちよつと待てよ、こういうのは本人の了解が大事なんではないだろうか？ 勝手に決めるなって！

そう言いたかった抗議の声は、喚き声になるだけだった。

……これは、拙い流れになったな。ミルクで腹を満たされた後に襲ってきた眠気に耐えながら、会話の内容を反芻するように確認する。

どうやら俺の……いや、この身体の父親、枕クウヤという人物と日向ヒアシは古い知り合いであり、その伝で、九尾事件によって孤児となった俺を、日向家で引き取るということらしい。漫画にはもちろんこんな流れは無かったはずだ。

原作に関係の無いところで平和に生きて行こうと、ほんの少し前に考えていたこの世界での指針は、何もせぬ内に打ち砕かれたというのか。

不可抗力で原作へと係わってしまうことになるのか、ちょっと勘弁して欲しいんだけど……。

いや、よくよく考えると、逆にこれはチャンスと捉えるべきかもしれない。

元々『チャクラ』や『忍術』は、この世界で命を守るためには学ばなければならぬだろう。それをあの日向で学べるのなら、それに越したことは無いのでは？

この世界、何処に行こうと危険が付き纏うんだ。なら、名門と呼ばれる日向の庇護の下、忍者としての力をつけることで命の危険は減らせるかもしれないじゃないか。

原作に多少なりとも影響を与えるのはやはり不安だけど、立ち位置的にはまだ、脇役の脇役に過ぎないだろう。後は目立たぬようにすればいいだけのこと。そして原作に出てきたような強い奴らは全部、主人公たちに任せればいいんだ。

うん、それがいい。

取り敢えず、当面の間は、早く体力をつけることとチャクラのコントロールかな。

そう考えつつ、とうとう眠気が限界を向かえ、目を閉じた。

翌日、開けられた窓の外が活気づき始めた頃に、日向の使いが訪れ、俺は今、ベビーカーに乗せられて日向の屋敷へと向かっている。使いといっても、やって来たのは十四、五歳程の『日向コウ』と名乗る少年だった。コウが先導する形で、引き継ぎのために一緒に行くミナが、ベビーカーを押してくれている。

日向コウが原作に登場していたかどうかは、俺は覚えていなかったため、「日向家の証である白眼以外はこれと言って特徴の無い少年」ぐらいの感想しか持たなかった。

ただ、日向コウが迎えに来た時に、「お迎えにあがりました、ミ

ソラ様」と言われたことで、この世界での自分の名前を未だ知らなかったことに気付かされた。

どうやら俺は『枕ミソラ』というらしい。これからの人生で名乗ることになるであろう名前。なかなか響きがよくて、結構気に入ったかも。

ベビーカーに揺られながら辺りを見回す。漫画として紙に描かれたものではなく、実際の存在する物として目に入るその風景に、昨日の不安は一気に吹き飛び、ただただ興奮していた。

木の葉隠れの里は、土壁、木屋根の建物が中心で、前世での一般的な住居と比べると、何百年も前のものに感じる。かと思えば、それなりの大きさの建物はコンクリートで造られていたり、近代的な造りや、不可思議な造形の物もちらほらと見受けられる。それらが所狭しと軒を連ね、里を形成している。

配管や電線が迷路のように張り巡らされており、少し心配していた、上下水や電気が無いといった問題は無さそうだ。まあ、カップラーメンだってある世界だし、見た目よりも文化レベルは結構高いのかもしれないな。

遠くには漫画でお馴染み、歴代火影の顔が彫られた岸壁が、聳え立つように里を見下ろしている。実物を見ると、かなり迫力があるもんだ。

色々と時代をごちゃ混ぜにしたようなその里の様相に、元男としての好奇心や冒険心が掻き立てられる。

あの建物は何だろう？ あそこには何があるんだろう？ そんな考えが引つ切り無しに頭に浮かぶ。移動中は特に会話も無かったから、俺はひたすら里を眺めていた。

そうしている内にも、コウ達の歩は進み、日向宗家の屋敷の門前に辿り着いていた。さすがは名門と言われる日向の宗家の屋敷でかい。百五十メートル四方はあるつかという堀。門から覗くのは木造の純日本風の武家屋敷。

コウはミナに少し待つように言って、屋敷の中へ入って行く。数秒後、戻ってきて、俺達は屋敷の中へと案内された。

玄関で迎えてくれたのは、幾人かの女中と、一際存在感のある女性。

腰まである光沢のある瑠璃色の髪、整った顔立ちにはやはり白眼があり、凜とした佇まいで優しい笑みを浮かべている。彼女のお腹は膨らんでおり、その身に新しい命が宿っていることが見て取れた。このことから、彼女がヒアシの妻であり、そのお腹の子がヒナタであろうことが予想される。漫画では見たことが無かったが、綺麗な人だと、素直にそう思った。

「ミナさん、それにコウ、お疲れさまでした」

その彼女がミナ達へと労いの言葉を掛けた。

「い、いえ！こちらこそっつー！」

対してミナは、よくわからない返事をした。……場の雰囲気完全に吞まれているようだ。

一方のコウは、

「お役目です」

と慣れた様子で頭を下げている。

続いて、彼女は俺に向かって歩を進め、腰を折って顔を近づけてきた。

美人の顔が至近距離になり、狼狽するも、彼女の柔らかな雰囲気、すぐに落ち着きを取り戻す事が出来た。

いい匂いがする。俺は顔が赤くなっていないだろうか？ いや、なっていたとしても、今は赤ちゃんなんだ。しかも女。何も気にすることは無い。少し役得感を覚え、彼女に微笑んでみる。

「ふふ、貴女がミソラちゃんね。本当、あの人から聞いた通り、可愛い子。これからよろしくお願いね。それと、この子とも仲良くしてくれると嬉しいわ」

彼女は俺に微笑み返し、自分のお腹を撫でながら囁く様に語りかけてきた。そして背を伸ばし、

「さ、お客様に立ち話もなんですし、どうぞお上がりになつて？」

「お氣遣い、有難うございます！」

少し落ち着いたらしいミナが答え、俺達は屋敷に上がった。

俺はミナとは別の部屋へ連れて来られ、何人かの女中に甲斐甲斐しく世話をされている。

……いや、世話をされているというよりも、おもちゃの様な扱いを受けていると言つべきか？ 手を握られたり、頭を触られたり、頬を突かれたり……。彼女達は「うふふ」「あはは」と楽しそうだから、悪い顔も出来ないし、笑顔で答えるしか無いじゃないか……。彼女達の会話から、ヒナタの母の名前が『ヒヨリ』ということや、コウはここで妊婦であるヒヨリの護衛としてしていること。ヒアシが九尾事件の事後処理で忙しく、家を空けていること。別室ではミルクの量や時間などの、俺の引き継ぎの話をしていることなどを聞くことが出来た。

暫くして、ミナが病院に戻るからと、ヒヨリと共にやつて来た。

「短い間だったけど、じゃあね。いつでも会いに来てね！」

俺に対してそう言ったミナに、ヒヨリが口を挟む。

「ふふふ、病院に会いに行く用事はあまり無い方がいいんじゃないかしら？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、お約束な突っ込みを入れて来た。「や、やっぱり、来ちゃだめっ！！ いい！？」

ミナは「ハッ！」と目を見開いて顔を青くし、慌てて訂正する。

ヒヨリは終始笑っていた。優しそうな顔に似合わず、彼女って意外とSなのだろうか……？

ミナの百面相は俺も見てて面白いが……。

そんなやり取りを終え、ミナは病院へ戻っていった。

数時間後、夜の帳も下りた頃、俺は今、だだっ広いお風呂にいる。一糸纏わぬヒヨリに抱えられて。

どうしてこうなった!?

ミナが病院へ帰ってからが、大変だった。ヒヨリは穏やかな雰囲気ながら、その実、かなり積極的な性格のようだ。

ミルクを飲まされるのはまだ良い。おしめの交換も、かなり動揺したが、ミナで大分慣れていたので良しとしよう。

なんと、ヒヨリはあろうことが、一緒にお風呂に入ると言い出したのだ。

病院ではベビースに入られていたので、自分が裸になること以外は、問題無かったのだが、相手も裸となると話は別だろうよ。

女中達は妊婦であるヒヨリを心配して止めたんだけど、「何事も経験よ」とヒヨリは押し切り、先程の状況となるのである。

さすがに手伝いとして、女中が控えてはいるんだけど。

前世では、俺にも彼女と呼ばれるものがいた時期もあったから、女性の身体に触れる機会が無かった訳ではないんだけど、やっぱり気まずいものは気まずい。

まあ、ヒヨリはこの身体の中の魂が元男だなんて知らないのだろうけど……。

俺は、頬に彼女の形の良い膨らみが当たろうと、何も考えないよう、必死に頭の中を空っぽにした。

そう、要は今までと同じだ。赤ん坊の本能に身を任せればいいんだ！ 理性を飛ばせ！

そして俺は、本能に身を任せたのだった。なんだか今回は卑猥な響きに聞こえるが……いや、気にするな！ 気にしたら負けだ！

あ、それ口に含んじやだめええ！

「あらあら、うふふ」

04 日向の日常と義妹の誕生（前書き）

| | |
|------------|--------------|
| 2010・12・05 | 改稿（縦書きPDF対策） |
| 2010・12・05 | 若干修正 |

04 日向の日常と義妹の誕生

日向家に来てから、俺はチャクラをコントロールするための訓練に没頭していた。

まず、チャクラがどういったものか知らなければならない。

覚えている限りでは、チャクラとは『身体エネルギー』と『精神エネルギー』を体内で練り込むことで得られるもの……だったかな？ 身体エネルギーと精神エネルギーという概念がまず分からないんだけど……。

取り敢えず、物は試した。

チャクラを練ろうと、目を閉じ、意識を集中させた。体の中に、身体と精神のエネルギーの塊があることを想像し、徐々にそれを練り合わすようなイメージをする。すると、チャクラは意外にもあっさり感じとることができた。

成程、どこぞの格闘家も言っていた。「考えるな、感じる」と。感覚的には血の様なもの。漠然とではあるが、それが臍より少し下くらい位置から湧き出て、身体中に巡らされた管を通じて循環していることが分かる。これが『経絡』か。

俺は今、すごく嬉しい。

前世の俺にも少年時代というものがあり、その頃見ていた漫画の登場人物にはよく憧れたものだ。

物語の中の登場人物には様々な力が備わっており、手を指鉄砲の形にして構え、指先に意識を集中させることで靈力を撃ち出したり、気を爆発させることで髪の毛が黄金に輝く超人になったり。

あの頃は、「もしかしたら自分にも出来るんじゃないだろうか」なんて、幼く純粋な希望を持って、精神統一や、気合いを溜めようと力んでみたりしたもんだ。結局、何にも起きずに落胆するわけだ

けど……。

その時とは違い、今は確かに感じるのだ。自分の中にある力をあの頃、懂れてやまなかった力を！ 歡喜と興奮に小躍りでもしそうな気分だ！

前世の世界ならば、この力を経た俺は特別な存在であり、ヒーローにもなれただろう。例外的に、俺が転生する原因にもなった《占い師》の様な存在もいるが、それ以外の人間はこんな力は持たないのだから。

しかし、浮かれてばかりはいられない。何といっても、今居るのは『NARUTO』の世界である。前世の世界とは違う。漫画が現実となった世界に居て、しかもここは木の葉隠れの里。忍者の集うここではチャクラが使えて当たり前であって、俺はスタートラインに立ったに過ぎないのだから。

未知の力へ対する憧れの感情は、前世の世界だったからこそ許されたものであつて。今いるこの世界に持ち込んでいいものではない。冷静になった頭で考えてみれば、この力は『手段』に過ぎないのだと考える。他者を傷つけるための『手段』。身を守るための『手段』。生き延びるための『手段』。要は、見えない凶器であり、盾を持つていることと同じだ。凶器と例えるならば、前世で俺を撃つた銃と何ら違いはない。使い方を間違えれば、容易く人を殺められる暴力の『手段』の一つなのだ。

もし、それが自分に向けられたら

ふとそんな考えが頭に浮かび、背筋がゾツとする感覚に襲われる。この世界で生きる限り、必ずそういつた状況に置かれることになるであろうことは想像に易い。その最たるが大蛇丸の『木の葉崩し』や、ペインの『九尾捕縛』だろう。

そうならない為、そうなった場合の対抗手段としても、この力を使いこなせるようにならねばならない。

取り敢えず、チャクラを練ることに成功したんだ。後はそれを

忍術として使用すればいいんだけど、如何せん赤ん坊の身体では印を結ぶことすら出来ないし、印というものがどんなものなのかすら知らないで、それはまだ先の話だ。

今はチャクラのコントロールを完璧にしよう。

さて、そういった訓練も朝から晩までというわけにはいかない。ましてや、赤ん坊である俺は睡眠欲もあるし、起きている時はヒヨリや女中達が、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのだから。訓練は、そんな日常生活の一部でしかない。

日向での暮らしはとても快適だった。訓練はもっとやりたいという気持ちはあったけど、世話を焼いてくれる分には此方も嬉しいので、そこは割り切ることにした。

割り切るといえば、お風呂のことが頭に浮かんでしまう。当初、張り切っていたヒヨリだが、やはり妊婦ということもあり、ヒアシに、

「お前が良くても、その子にもしものことがあればどうする？ 身重のお前がすぐに対処できるのか？」

と窘められ、自分が一緒に入るとは諦めたらしいと、女中達が言っていた。

それを聞いた時は、心の中でホツと胸を撫で下ろしたものだけど、代わりに女中と入ることになり、結果としては殆ど変わらなかったことに落胆したのだった。そう、これも割り切るしかなかったのだ。俺は、最初に犯した失態を繰り返さぬ為、毎晩訪れる試練に耐えなければならなかった。そのおかげで、「意識を保ちながら意識を飛ばす」という、矛盾しているし、他のことに役立つのが良く分からないスキルを身につけることが出来た。

ヒアシはというと、九尾事件から一週間ほど帰りが遅い日が続き、その後も、人手不足を埋めるため任務に出突っ張りだ。時折、無言

で俺の部屋にやって来て、任務で出向いた街で買ったのだろう玩具を置いて、頭を一撫でした後、すぐに出て行く。その時に微笑んで見せると、彼もほんの少し相手を崩すのだ。

威厳ある顔から一瞬垣間見せるその表情を見るのが、最近の俺のマイブームだったりする。

俺が観察したところに因ると、彼は不器用を地で行く様な人間であり、この表情はレアである。

そんな日々が二カ月ほど続き、今日という日を迎えることとなった。

今、ヒアシと共に木の葉病院にいる。俺はベビーカーの上で女中にあやされており、ヒアシは廊下の脇のベンチに座り、扉を睨んでいる。……背筋をピンと立て、腕を組んで微動だにせずに一点を睨むその姿は、正直怖い。

止めてほしいと、俺は「ううー！」と、うめき声で抗議するが、もちろん伝わるはずもなく、廊下を歩いて行く人たちはその物々しい雰囲気、顔を引き攣らせ、ヒアシを中心に半円を描く様にして遠巻きに歩いて行く。

何故、俺達が木の葉病院に居るのかというと、ヒヨリが産気付いたからである。

今日、俺は義兄、もとい義姉になるのだ。正確には俺は養子ではないし、名字も違うんだけど、日向家で二カ月過ごした俺は、すっかり日向家の一員になった気分だった。

俺は無事に産まれてくることは分かっているし、その赤ん坊が女の子で、付けられる名前まで知っているので、何も不安は無い。

だけど、親となる者としては、やはり無事に生まれてきてくれるか心配なのだろう。

再度ヒアシを目を向けてみると、普段通りに振る舞っているつも

りだろうけど、集中し過ぎた目は無意識に白眼を発動させてしまっていて、さつきよりも更に迫力が増している。

これには俺も、俺に付き添っている女中も顔を青くし、震えるしかなかった。

そんな殺伐と雰囲気、「早く生まれてきてくれー！」と必死に願っている、その願いが通じたかのように扉が開かれた。

ヒアシはゆっくり立ち上がり、扉から出てきた看護師の女性に歩いて近づいていく。

「ヒッ!？」

という声が女性の口から洩れたのは気のせいじゃないだろう。

冷や汗を流し、若干後ずさった看護師の女性は、それでも目的を果たさんと気を取り直し、引き攣った笑みを浮かべる。

「お、おめでとうございます、元気な女の子です」

そう言う、ヒアシを扉の中に案内する。俺も女中にベビーカーを押されて後続く。中ではヒヨリがベットに横になっていた。その横の小さなベットには生まれたばかりの小さな赤ちゃんがいるはずだが、ベビーカーからの視線では確認することが出来ない。

ヒアシはヒヨリの許へ行き、

「ご苦労だった。ゆっくり休め」

と、先程までの物々しい雰囲気を跡形なく霧散させ、優しくヒヨリを労う。それから横の小さなベットへ向かい、顔を綻ばせた。

俺はその表情に驚いた。この人も、こんなに幸せそうな表情が出来るのかと思うのと同時に、その表情を未だ自分に向けられたことが無いことに少し悔しく思った。笑顔を向けてくれることはあるが、ここまでのものはなかったのだから。

そう考えていると、ヒアシは赤ちゃんを抱きかかえ、近付けてきた。

「お前の妹になる、ヒナタだ。今日から私達の家族の一員だ」

名前は初めから決めていたらしい。

……小さい。本当に小さい命が目の前にある。寝ているのか起き

ているのか分からない、半分微睡んだ表情をしている。そんなヒナタの手に触れてみると、ヒナタは俺の手を握り返し、生きていることを主張してきた。なんだか嬉しくなり自然と笑顔になる。

ヒアシはそんな俺達の様子に満足したようで、ヒナタをそっとベツトへ戻した。

ヒヨリは体力を消耗しているし、長居するわけにもいけないので、俺達は名残惜しさを感じながらも病室を後にした。そしてもう一つの用事へと向かう。

もう一つの用事とは、俺の検査である。仮にもこの身体は一度死んだと思われた身である。これは初めてではなく、先月にも一度検査を受けている。

ヒアシは「話があるから」と女中を診察室の外に待機させた。

俺の担当医は、この世界で目を覚ました時の医者で、出会った当初よりかなり血色がいい。あの時は九尾事件の被害者で忙しかったのだろう。

ぼさぼさな髪は相変わらずだが、それが反って野性的な魅力となっている。こうして見ると結構いい男なのだ。ただ、やはり医者には見えないが……。

彼の名前は『渡里イクモ』という。今は任務に出ているらしくここにはいないミナが、この前の検査の時に言っていた。彼は昔、ヒアシ、クウヤとマンセルを組んでいたらしい。憎まれ口を叩き合う仲、というわけだ。

「ふむ、特に異常は無いな。この様子なら大丈夫だろう」

それに対し、ヒアシは「聞きたいことがある」と言い、イクモはそれを促す。

「先日、この子がチャクラを練っているのを見たのだが……」

「！？この赤ん坊がか？」

マズったかな……。だけでもう遅い。隠れて訓練していたつもりだったけど、どうやら見られていたらしい。さすが白眼だ。こんな

赤ん坊がそんなことしてれば驚くのは当然だろうな。

「ああ、私もそれを見た時は驚いたが、問題はそこではない」

イクモは驚いた顔のまま、聞き入っている。

「まず、生まれたばかりの赤子にしてはチャクラが異常に多い。それだけならまだいいが……。チャクラの質、これを白眼で見たところ、この子にはそれが三種類あるのだ。それが絡み合うように一つのチャクラになっている。こんなものは見たことが無い」

それは俺も初めて知ったが、何となく心当たりがあった。チャクラを練った時の違和感、それは訓練していた時に確かに感じていたのだ。だが、こんなものなのだろうと無視していたのだけど……。

「……複数のチャクラか、俺もそんなことは初めて聞いたよ。

いや、唯一似たようなものを知っているが、それは……」

「人柱力」

「ああ、だが九尾は四代目の息子の中だ。まず有り得ない。……幸い、チャクラを練つても暴走はないようだし、現状、ただの特異体質だと考える外は無いだろう」

その話を聞いて、俺は少しこのチャクラの正体がわかったような気がした。

『人柱力』は『尾獣』という、莫大なチャクラを秘めた『尾をもつ獣』を封印する、その器となった人間のこと。

今の会話の通り、人柱力にはその人本来のチャクラの他、封印された獣のチャクラも潜在している。もし、自分という存在を人柱力と同じように考えるならば、この魂は、この身体に封印された『尾獣』と同じようなものなのだろうか？

とするならば、この身体にはもう一つの『本来の魂』なるものがいるのかもしれない。

だけど、ヒアシは「三種類」と言った。ならば残りの一種類は何なのだろうか……？

「まあ、忍者としては恵まれていると考えた方がいいな。本来ならチャクラの質で忍術の性質が決まる。上忍でも扱える性質は三つ程

度だ。しかしチャクラの質が三種類もあるとなれば、もしかしたら

」

「全ての性質を……か。だが、得体の知れない力には変わらない。このことは内密に頼む」

「火影にもか？」

「いや、火影様には私が話しておく。あの人ならばこの子を利用することも考えぬだろう」

「あいよ、わかったよ。全く、クウヤのやつ、最後にとんでもない物を残していきやがったな」

「どうも俺は特殊らしい。元々、この世界にやって来たこと自体が特殊なんだけど……」。

「まだ、解らないことは多いが、現状ではこれ以上の情報は期待できなさそうだな。」

俺は思考を打ち切った。

05 魂の変化と誕生日（前書き）

| | |
|--------------|------|
| 2010 | 2010 |
| ・10 | ・10 |
| ・25 | ・25 |
| 改稿（縦書きPDF対策） | |
| 若干修正 | |

05 魂の変化と誕生日

俺、もとい私が生まれてから三年が経った。正確にはこの世界に来てから二年と九カ月なんだけど。

一人称が『俺』から『私』に変わったのには、ちゃんとした理由がある。それは、ある程度呂律が回り始めた頃の出来事である。

ようやく喋ることが出来るようになってきた私は、それが楽しくて色々言葉を発していたのだが、どうやら喋る言葉が良家で育つ女子としては汚なすぎたらしい。それを危惧したヒヨリ様によって、徹底した言語教育を受けさせられたという訳だ……。

まあ、今に思えば、一家の主のことを「ヒアシ」と呼び捨てにしたり、自分のことを「おれ」と言ったりしていたため、当然といえば当然なのかもしれない。「ヒアシ」と呼んだ時にはヒアシ様は顔を引き攣り、自分のことを「おれ」と呼んだ時にはヒヨリ様は「何処でこんな言葉遣いを！」と嘆いていた。

何故かその度に、私とヒナタの護衛兼付き人をしていたコウが一緒に叱られ、肩を落としていたので、少し申し訳なく思い、コウのことを「コウにい」と呼んでみると、花が咲いたように喜んで、頭を撫でてくれた。

扱いやすい奴。腹の中で少し黒いことを考えていたことは秘密だ。

ともかく、ヒヨリ様による教育により、『俺』は女らしく『私』へ、『ヒアシ』と『ヒヨリ』は『ヒアシ様』と『ヒヨリ様』と呼ぶことになった。『父上』『母上』ではないのは、私が他家の子であるため、仕方がない。

ヒヨリ様は、呼び方を変えさせることには成功したが、未だに私の女性らしくない言葉遣いに頭を悩ませているらしく、ヒヨリ様の前で言葉遣いを間違えれば睨まれる。白眼で睨まれるのはなかなか恐ろしく、勘弁願いたい。

私は前世で男として二十数年生きていたのだ、それが三年で変わることは難しく、これは諦めてもらう外は無い。

この世界での三年近くの生活で、気付いたことがある。

体に精神が引つ張られるというのは、よく耳にする話なんだけど、こういった『転生』だとか『憑依』でもその話は適用されるのだろうか？

この三年の内で、私は本当の父と母の様に、ヒアシ様とヒヨリ様に慕うようになっていたし。女の子としての感性も芽生え始めているようだ。ヒアシ様に貰ったぬいぐるみは『可愛い』と思うし、ケーキなどの甘い物も『美味しい』と思えた。

前世ならば考えられない。ぬいぐるみなど見向きもしなかったし、甘い物も特に好きというわけではなかったのだから。だからといって、男らしい欲求も失ってはいないらしく、様々なものに興味を抱いたり、身体を動かすことも好きだった。

そんな、複雑な精神が影響したためか、私は少し変わった子に育ってしまったという自覚がある。

何かを『可愛い』と思っても男だった時のプライドが邪魔をして、恥ずかしくてそれを口に出すことが出来なかったり。甘い物をもつと食べたいと思っても「いらない」と言ってみたり。

自分自身、自覚があるのだが、すっかり性格として定着してしまい、これがなかなか治すことが難しい。

今日はそんな私の誕生日なのだ。

ヒアシ様は私の性格をよくわかっているようで、今年のプレゼントは私と同じ身長ほどある、デフォルメされたトラのぬいぐるみだった。一昨年はネズミ、去年はウシだったことから、どうやら十支に掛けているらしい。……もしかしたら、九年先まで私の誕生日プレゼントは決まっているのかもしれない。

「ありがとうございます、ヒアシ様」

礼を言い、その場はぬいぐるみをギュツと一度抱きしめるに留める。後で自分の部屋に戻った時にゆっくり愛でてやるのだ。名前は何かいいだろうか……。そんな事を考えていると、

「おめでとうございます、ねえさまー！」

と、ヒナタがヒヨリ様に作って貰ったケーキをのせた皿を私に渡してきた。

「ありがとう、ヒナタ」

皿を受け取って、ヒナタの頭を撫でてやると、ヒナタはくすぐったそうに笑顔を浮かべた。

ヒナタは私のことを「ねえさま。ねえさま」と金魚のフンのように付き従い、とても懐いてくれている。愛い奴め。ヒナタは、控え目な性格は原作通りで可愛いし、とても賢い。この子の義姉になれたことは本当に良かったと思う。

原作の話の流れに介入することは極力避けたいという考えは変わらないけど、この子のことは全力で守りたいと思う。まずは、もうすぐ訪れるだろう『日向ヒナタ誘拐事件』だ。そのために毎日の鍛練は怠っていない。

私がケーキに夢中になっていると、その皿にもう一つケーキが乗せられた。乗せたのはヒヨリ様だ。

「え、えっと……」

「いいのよ、食べなさい」

「別に　ありがとうございます」

ヒヨリ様の目付きが変わりかけたのを確認した私は、素直に貰うことにする。もっとも食べたかったのは確かだし。

最近思うのだが、ヒヨリ様はヒアシ様より怖いと思う。言語教育の時にはそれを痛感した。優しいが躰には厳しい《教育ママ》なのである。日向の子を育てるという責任を負っていることは分かるんだけど、私は日向の子じゃないのに……。

逆に、ヒアシ様はというと、無愛想だし、鍛練の時には容赦無いが、結構、子煩悩な性格をしていたりする。

ケーキを食べ終わると、私の控え目な誕生日は終わりを告げた。ヒナタの誕生日には日向の親戚中からプレゼントが届くが、日向ではない私の誕生日は質素なものだ。まあ、余計な挨拶をしなくていいから、私としてはこの方がいい。

食事を終えた私とヒナタは、就寝の為に部屋へと戻る。私はぬいぐるみに両手を回して抱きかかえ、ご機嫌である。赤ん坊のころから一緒に育ったヒナタの前では、私は性格を偽ること無く、ありのままの姿でいられるのだ。

私とヒナタは共同部屋で、ちらほらと私のぬいぐるみや可愛い系の小物があるが、至って質素な部屋だった。「忍者の家系に贅沢は禁物」というのが日向の方針だと教えられている。

でかい屋敷に住んでいて説得力が無いが、この屋敷は日向の威信を保つためという意味もあるらしい。……お偉いさんの世界は難しい。とはいえ、私もヒナタもこの生活には不満は無い。というより、ヒヨリ様の教育でそういう風に育てられた。教育ママ恐るべし。

私は今日貰ったぬいぐるみと共に、既に敷いてあった布団に入る。ヒナタも布団に入ったようだ。

「おやすみ、ヒナタ」

「おやすみなさい、ねえさま」

こうして私の三歳の誕生日は終わった。

ふと、「前世の私が、今の私を見れば何と言っただろうか？」と布団の中で考えた。

恐らく「キモい」の一言で一蹴されるだろうな……。

06 目先の目標と父の形見（前書き）

| | | | |
|------|-----|-----|---------------------|
| 2010 | ・10 | ・25 | 改稿（縦書きPDF対策） |
| 2010 | ・12 | ・05 | 修正、加筆（『印』についての記述捏造） |

06 目先の目標と父の形見

さて、私には、この世界に来てからの、予てからの疑問がある。それは「ヒアシ様の性格が原作と違うんじゃないか？」ということだ。

確かに厳格な人間だし、少し前から始めた鍛錬もかなり厳しいと思う。だけど、それ以上に子に対する確かな愛情があることが分かるのだ。私に対しても、ヒナタに対しても、若干不器用ではあるけれど……。

そんなヒアシ様が何故、原作ではヒナタを見放すような冷酷な性格に描かれていたのか。

全てはヒナタが三歳の時に起きた、誘拐事件のせいじゃないのだろうか？

事件のあらましとしては、ヒナタが三歳になって間もないころ、血継限界である【白眼】を狙った何者かに誘拐される。

事を知ったヒアシ様はすぐさま搜索に出て、犯人と思しき黒い覆面をした忍者を見つけて、殺害。ヒナタを救出した。しかし、事件はそのまま終結とはいかず、その後こそ、悲劇を生んだ。

ヒアシ様が殺害した忍者が、同盟を結んだばかりである雲隠れの里の忍頭だったためである。

雲隠れの里は、先に手を出してきたにも拘らず「自国の忍を殺された、同盟違反だ」と主張し、その賠償としてヒアシ様の遺体を要求するのだ。事の発端はともかく、殺害は事実であるために、有無を言えなかった木の葉は、この火種が戦争にまで発展することを恐れ、決断を下した。

要求に対して、宗家を護るために、ヒアシ様の双子の弟、分家であつたヒザシ様を身代わりとして雲隠れに引き渡したのだ。

そしてこの事件は宗家と分家の間に確執を生み、ヒザ様の息子のネジは、宗家を恨み、生きることとなる。

そして、当然、このことはヒアシ様にも深い影を落とした。

と考えるべきでは？ というのが私の見解だ。でないと、今のヒアシ様から、あの性格への変化が説明できない。

ヒアシ様とて、失ったのは実の弟だ。確かに、後継ぎ云々の問題で恨み、恨まれという関係だったかもしれないけど、それでも血を分けた唯一無二の存在なんだ。心中穏やかじゃ無いだろう。

その弟の犠牲を無駄にしない為にも、ヒナタには宗家の嫡子として、跡取りとして、日向の名に恥じぬようにと……。そんな風に思いつめたヒアシ様は、ヒナタに対して厳しく当たり、思うようにいかない現実性格が歪んでいったのかもしれない。

日向始まって以来の天才と呼ばれる、ヒザ様の息子、ネジの才能がそれに拍車をかけたのは間違いない。

私は可愛い義妹、そして日向家のため、この事件を何とかしたいと考えている。

ヒナタの誘拐の阻止、それが出来ないなら、ヒナタの救出と犯人である雲の忍頭の死亡阻止が目標だ。三歳児である私にそれが出来るのかは分からないけど、義妹の危機を知っていて何もしないなんてことは義姉として、有り得ない話だ。

その目標のために、今日も今日とて、鍛錬に励んでいる。
印を一つ一つ確かめる様に結び、チャクラを整えていく。

この世界の忍術学の本で学んだことだが、『印を結ぶ』というのは、チャクラを忍術として使う過程での、チャクラの質を整えるという工程である。術に対するチャクラの最適化とも言うべきか。上位の術を使う時ほど印が長いのは、それだけ洗練されたチャクラを要求されるからである。

その作業はあくまで術者の意思によって成されるのであって、厳密に言えば印とは、その補助道具に近い。

チャクラが『木材』と例えるならば、印とは『彫刻刀』であり、印の種類はそのまま、彫刻刀の種類といった具合かな。術者の意思の下、術という『形』にするための道具なのだ。

同じ術を使い続け、熟練した忍者ともなればその『形』へ仕上げるコツを掴み、印を短く省略する事が出来たり、『木材』自体が『粘土』のように柔らかくなり、意思のみで初めからある程度の形が作れ、力技ではあるんだけど、印無しで術が使える様になるらしい。ただ、やはり時間を掛けた方が良い『形』になり、チャクラの無駄も少なくなるという。

そうなるには、やはり長い年月が必要であり、今の私には到底真似出来ない話であるため、しっかりと印を結ぶ。

今、私がやっているのは気配を消す術の訓練。しかし【隠れ蓑の術】とは違う術だ。

以前、ヒアシ様に、私の本当の父親『枕クウヤ』について聞いてみたことがある。ヒアシ様はまだ子供の私にどうしたものかと一瞬逡巡したようだけど、話してくれた。その話によると、クウヤは気配を消す達人だったという。それはヒアシ様に、

「そこに居るのに、居ない。まるで存在感無いという不思議な感覚だった。視界にあるのに気付かないなんてこともあった」

と言わしめるほどだ。白眼持ちのヒアシ様にそう言わせるくらいなのだから、それは相当なものだったのだろうと想像する。

マンセルを組んでいた頃は、ヒアシ様達が正面の攻撃と囷を担当し、クウヤは背後から気配を消して止めを刺していくという戦法で戦っていたらしい。

正面に気を取られている内に、いつの間にか背後に忍び寄り、氣付いた瞬間にはもう遅い。その戦い方が、敵には亡霊が一人一人憑り殺していく様に見えたらしく、クウヤは《木の葉の亡霊》と言われ、畏れられたらしい。

術の特異性から、暗部に執拗に誘われていたらしいが、「俺は守るために戦うのだ」と、暗殺や奇襲が主な任務である暗部には入らなかったという。

「極めつけはあいつと諜報任務に出た時だ。あろうことか、あいつは堂々と歩いて敵のキャンプへと入って行ったのだ。普通ならばすぐに見つかり、殺されるだろう。しかし連中はあいつの姿を全く気に留めることは無かった……あの時は私も目を疑ったものだ」

そんな話を懐かしそうにした後、ヒアシ様は自分の部屋の奥より何かを取り出して、私に渡してきた。

「これはクウヤの残した形見だ。この話をした時に渡すと決めていた。この中には枕家の秘伝忍術を記したものが入っている。使い手を失った秘伝忍術の類は破壊されるか回収される事が決まりだが、枕家はお前が残っていたからな、火影様が私にこれを託したのだ。お前は賢い、しかもクウヤの娘であるお前ならば、必ずその術を扱うことが出来るだろう」

その話に少し疑問を感じた。

「あの、なんで日向家はこれを自分のものにしないのですか？」

託されたというのは日向家が自由にして良いということ。ならばなぜヒアシ様はそれを利用せずに私に渡すのか……

「我々は既に【白眼】という力を得ている。それに、日向はその白眼を使い【柔拳】を極めることが本懐であり伝統でもある。他の術に目を向ける時間があるならば本来の力を極めよ、ということだ。ただでさえ秘伝忍術というものは才能に左右されやすい物だ。一族以外の者が扱うことは難しいとされている」

「そうですか……では、いただきます」

そう言って、差し出されていた桐箱を受け取った。

「それは、必ずやお前の力になるだろう。大切にすることがいい」
「はい、ありがとうございます」

これは、私の考えすぎで自意識過剰なのかもしれないが、ヒアシ様がこれを日向のものにしまった理由は私のためなのではないのかと思う。

一族以外の人間が扱うことは難しいということだが、逆を言えば、難しくとも習得できるということだ。もちろんヒアシ様の言ったことも事実だろうが、忍者たる者、役立つ力を身につけることは決して損ということは無い。しかし、日向家がこの力を得れば、私の立つ瀬が無いのだ。

ヒアシ様は、この秘伝忍術が、私『枕ミソラ』固有の能力として使われることを望んだのではないかと思う。それは、いつか独り立ちしなければならぬ私の将来のためであり、その活躍に期待をかけられたということでもある。

私の勝手な思い込みなのかもしれないし、確認する術も無い。しかし、私の知るヒアシ様はそういう人だ。

自分の部屋に戻り、桐箱の蓋を開けてみる。中に入っていたのはやはり、気配消しの秘伝忍術を記した巻物だった。

術の名は【空漠の術】

極限まで己の存在を無とすることで、相対するものの感知能力から外れるという術。それは、相手の察知や追尾から逃れるということであり。此方の動きを読ませず、あらゆる攻撃が不意打ちとなる。逆に、相手の攻撃はこちらには当てにくい。通常、攻撃しようとするならば、攻撃対象を認識した上で攻撃を命中させることが当然であるが、認識が曖昧な存在に攻撃を命中させることは難しいということである。

所謂、補助忍術に分類されるものではあるが、他の忍術、体術、幻術と組み合わせることで、その効果は計り知れない。

私にとってそれは願ってもない術だった。相手に気付かれにくく

なるということとは、限りなく生存確率を高めてくれるだろう。

私は机の上の写真立てを見て、「ありがと、父さん」と呟いた。

写真には私と同じである白髪と透き通りそうな碧眼で、快闊そうな笑顔の男と、椅子に座った黒髪黒眼の美人な女性が写っている。女性の腕には赤ちゃんが抱えられていた。

私はその日から、通常の体術、忍術と共に、秘伝忍術の特訓をしている。

すっかりお姉ちゃん子に育ってしまったヒナタも、私と一緒に居たいために、秘伝忍術以外は、一緒に特訓している。原作と違い、ヒナタは私と行う特訓を楽しんでいるためか、上達が早い。

日向では三歳を迎えると組手の鍛練を始めるのが通例であり、私は最近、コウやヒアシ様にも稽古をつけてもらっている。しかし、白眼の無い私が、相手の経絡系を見切る必要のある柔拳を習うわけにもいかず、教えてもらった基礎の動き以外は自己流に近いものだ。私の格闘スタイルは、接近戦において無類の強さを誇る日向流に相対する内に、自然と距離を取りやすい足技が主となっていた。とはいっても、私とヒアシ様ではリーチが違いすぎるため、現状、効果は薄いんだけど……。

言いたくは無いが、私は五カ月後に生まれたヒナタよりも身長が低い。今後に期待したいと思う。

ともかく、私は大人の経験と理解力に加え、子供のスポンジのような吸収力の良い頭脳を兼ね備えているようで、着実に実力をつけていることを実感していた。元々、前世では要領のいい方だったし、実践色の強いこの世界の鍛錬において、自分が強くなっていくことが楽しいと思えた。

今まで考えたこともなかったが、前世ならば案外と自衛隊とかの職業に向いていたのかもしれないな。

気付けば、女中達は私を『天才』だと囁し立て、ヒアシ様は褒めてくれ、ヒナタは尊敬の眼差しを深めていた。

私はそれに対して複雑な心境になる。この世界で目立つつもりは無いのだ。余計な評価は無用な争い事を招きかねない。だからと言って、鍛錬を辞める訳にはいかない、大切な人達を守るために。

今はヒナタの誕生日の後に起こり得る事件のことだけを考えよう。
「ねえさま！」

そう言ってヒナタは、鍛錬を終えた私に暖かい濡れタオルを渡しに走って来た。ヒヨリ様の気遣いだろう。

最近冷たくなり始めた空気で冷やされた私の頬に、温もりが燈った。

07 日向の事情と日向の天才（前書き）

2010・10・26 改稿（縦書きPDF対策）
2010・12・05 若干修正

07 日向の事情と日向の天才

師走を迎え、現在、日向宗家嫡子、日向ヒナタのお披露目が進行中である。

屋敷には日向縁の者達が続々と挨拶に訪れていて、私はコウと共に少し離れた位置にある鍛錬場の屋根の上から、その様子を観察していた。

「コウはあの中に混ざらなくていいんだ？」

「私はヒアシ様よりミソラ様の警護を仰せついていますので」

「そう。……今日は雷の国との同盟条約の式典もあるってのに、皆来るもんなんだね」

「日向での三歳というのは重要な意味を持ちますからね」

ヒヨリ様が客の対応に忙しく、傍にいないので私の口調は軽い。それに対してコウはいつも通りの敬語で応対してくる。

以前ヒヨリ様に、

「貴方も見ているなら注意なさい！」

と怒られたためか、一度だけコウは私の言葉遣いを注意したことがある。

「コウは私の味方だと思ってたのに……。コウなんて嫌いだ！」

私がそうやって外方を向く仕草を見ると、

「ま、まあ、言葉遣いも個性の一つですからね！ お、奥様にも、いつか分かってもらえますよ！」

と、すぐに手の平を返し、それからは言葉遣いに関して何も言うてこなくなった。

逆に私はコウに、敬語を止めるように言ったが、

「ミソラ様はヒアシ様の御子も同然ですから」

と全く取り合ってもらえなかったが。

そんなことを思い出しながら、ぼうつと客人を見ていると、ふとある人物が目に残り、思わず声を漏らす。

「あ、ネジだ」

「よくご存じですね」

「あ、うん。ヒザシ様と一緒にいたから、きっとそうだろうと思っただけ」

ヒザシ様は何度か屋敷に来ている時に見掛けたことはあったが、ネジは私が屋敷に来てから、一度も訪れたことは無かったので、コウは不思議そうな顔で感心している。まさか漫画で見たたからなんて言えないし、適当に誤魔化すことにした。

ヒザシ様一行は、出迎えたヒアシ様とヒナタに挨拶を交わした後、ヒザシ様とネジを分けて屋敷に案内されている。それを見ていたコウの顔に一瞬、影が差したように見えた。

……コウの表情の変化は大体の察しがつく。恐らく、今からネジに刻まれることになる呪印の事を考えたのだろう。

コウの言っていた通り、日向での……いや、この世界での風潮なのだが、三歳という区切りは特別な意味があるみたいだ。それは、三歳になることで、ようやく家の世継ぎとしての資格を得るという理由がある。

これは特に決められているという訳ではないが、戦時中からの慣習のように今に続いている。

今でこそ戦争が終結し、子供達は何の心配も無い生活をしているが、戦時中はそれはもう酷いものだったらしい。一度街が襲撃を受ければ、老若男女問わず蹂躪されることも少なくはなかった。

また、戦争で疲弊した国々では生活環境が悪化し、飢餓、難民の浮浪者化による治安悪化が起こり、更には医療機関の不足による疫病の蔓延などで多くの死者が出た。免疫力の低い子供はその影響を

もろに受け、当時の乳児の死亡率は高かった。

そういった理由から、ある程度免疫力が出来上がり、自立し、自分で考える力の付き始めた三歳という年齢は一つの成長の区切りとして考えられてきた。世継ぎが重宝されるある程度の良家などでは、三歳まで生きて、尚且つ健康体でいることが後継者たる第一条件とされるようになった

最近読んだ『戦と民』という歴史書には、そう書かれていた。とても子供が読む様な内容の本ではなかったが、私がこの世界に来て学問として学べるようなことは『忍術学』や『歴史学』ぐらいのものであったのだから、仕方がない。他の学問はどれも前の世界の方が進んでいたのだから。

日向でもその例に漏れず、その慣習が続いている。数年前まで戦争をしていたのだから、これが廃れるのはまだまだ先の話になるだろう。そして今日この日まで、日向直系の血を引いた四歳の健康体であり、唯一の後継ぎ候補であったネジはその立場から降ろされる……ヒナタという存在によって。

ヒナタが三歳の誕生日を迎え、後継ぎとしての資格を得た今、ネジはその可能性が無くなり、分家として生きて行くしか選択肢が無いのだ。その身分の差を明らかにするために刻まれるものが呪印である。

この、日向独自の呪印は、分家が宗家に「忠誠を誓う証」として表向き扱われているが、実のところはかなり悪質なものだった。

呪印を発動させれば対象者を死に至らしめることも可能であり、死の際には白眼の力を封印する。つまり、分家の命は宗家に握られているということ。「裏切りを許さず、白眼の秘密を守るため」と言えば聞こえはいいが、やっていることは分家の隷属化に過ぎない。実に気分の悪い話ではあるが、これは日向家の問題であり、実の子の様に扱われているとはいえ、他家の私が異を唱えることは出来ないし、聞き入れてくれる訳もない。紆余曲折して私まで呪印を刻

まれかねない。

「コウは今の日向は好きなのか？」

言った後に、ちよつと漠然とし過ぎたかな？　と思つたが、少し逡巡したものの、コウは私の意図を理解したようだ。

「今の日向……ですか。ヒアシ様やヒヨリ様は分家の私にも良くして下さりますし、私が不満を陳べるのは痴がましい事です。ただ、日向全体を見ますと、宗家への権利集中などへ不満を持つ者は少なからずいるでしょうね」

それはヒアシ様とヒヨリ様は好きだけど、日向の体制には不満がある。ということだろうか？

この人はいつも、幾層にもオブラートに包んだ喋り方をする。私が子供であり、刺激の少ない言葉で選んでいるのは解るのだが、もう少し簡潔に話せるようになって欲しいもんだ。ここ三年程の付き合いで、私が一般的な三歳児とは一線を画していることを理解しているくせに、そこはずつと変わらないな。

「金持ちの家つて、面倒臭いね」

ヒアシ様やヒヨリ様への感謝を忘れたことは無いけど、不意に口をついてそんな言葉が漏れてしまう。

それを聞いてしまったコウは、苦笑いをしていた。

「あれは、誰？」

私は気にせずに、今来た客の一人を指差した。

日向の門の前に、こちら辺ではあまり見ない格好の人間がいたのだ、コウに聞いてみた。

「えっと、すみませんが私も存じませんね。……見てみますか？」

「いいのか？」

「バレなければ」

口元に人差し指を立ててコウはニヤリと笑う。コウは私やヒナタには随分と甘い。……彼つてば、ロリコンなんだろうか？

次の瞬間、コウの眼に力が宿り、その周囲に血管の様な筋が浮き上がる。

「雲の額当てを持っていますね。雲隠れの使者でしょうか。意外と律儀なところがあるんですね」

雲だつて!?

その言葉を聞いてすぐさま私は立ち上がる……が、また屋根に腰を下ろす。

「どうなさいました?ミソラ様」

「……いや、何でもない」

恐らくは偵察だろう。だが今、私があそこへ行つたところで、何も出来はしない。アレは今は『ヒナタに祝いの言葉を言いに来た使者』なのだから……。

同盟の式典で騒がしい街へ出掛ける訳でもなく、今日はずっとこんな具合で日が落ちていった。夕食も日向一族の人間は大広間でお食事会だったので、私は女中たちと共に夕食を食べることになっていて、女中達は喜んでいた。

夕食を終えて部屋で休んでいると、ヒナタがヒヨリ様に連れられてようやく部屋に戻って来た。私はヒヨリ様と「お休みなさい」を交わした後、ヒナタを部屋に進めさせ、襖を閉める。

「お疲れ様、ヒナタ。それと誕生日おめでとう!」

「ねえさま……ありがとうございます!」

ヒナタは、それはもう疲れ切つたという顔をしていたが、今日ずつと言う機会の無かつた祝福の言葉を掛けてやると、満面の笑みで答えてくれた。

今日一日で聞き飽きた言葉の筈だろうに、うーん、可愛い奴め!

「今日はゆつくり休みな」

「はい。おやすみなさいねえさま」

「おやすみ、ヒナタ」

ヒナタは布団に入るとすぐに寝息を立て始めた。やはり、余程疲

れていたのだろう。誕生日だったのに、可哀相な……。

さて、明日からは私が頑張る番だ。

そう考え、恐らく暫くは出来ないであろう安眠を貪るのだった。

次の日からはヒアシ様との組手にヒナタも加わった。ヒナタは始めは戸惑っていたが、私と共にしていた鍛錬の成果もあり、暫くするとそれなりに形になっていた。鍛錬の時のヒアシ様は厳しく、時折飛ばされる怒声にヒナタはビクビクしているが……。

それからヒナタは私とも試合形式の組手を行う事となった。対日向流に組み上げられた私の体術は同年代ならば通用する筈。

悔しいことに、ヒナタは私よりも身長は高いが、所詮同年代。ヒアシ様とは比べるまでもなくリーチが短いので、私の想定通り、一度も攻勢を譲ることなく勝敗は決した。

夜になればヒナタは鍛錬の疲れをとるためにグッスリと眠りについていた。

私はその横で【影分身の術】の印を結ぶ。今日から影分身を見張りに残して、眠りに就くことにしたのだ。結果として、次の日に術を解くと、その疲労が本体に戻ることになるのだが、背に腹は代えられない。私はこの日から寝不足を抱えて過ごすことになった。

三日後、今日はヒザシ様達との合同鍛錬が行われることになっている。ネジも付いて来ていて、呪印が刻まれた額にはまだ、包帯が巻かれている。恐らく今日起こるのは、漫画にあったあの場面だろうな。

鍛錬中に殺気を放ったヒザシ様が、ヒアシ様によって呪印の恐怖を知らしめられるという場面が脳裏を過り、あまり乗り気はしない中、鍛錬が始まった。そして私はネジの組手の相手をする事となった。

意外な展開となったが、さて、日向始まって以来の天才と称されるネジを相手にどこまでやれるか……。内心では少しワクワクしている自分に気付く。

「始めい!!」

ヒアシ様が響く声で開始の合図を言う。

そのの合図と共に私はネジへ一直線に突進する。それに対し身構えたネジを見やり、ネジと衝突するその直前で腰を落とす。

「ハッ!」

掛け声と共に放った足払いは、後ろへ飛び退かれたことで躲される。間髪入れず、軸足にしていた左脚で床を踏み貫き、飛び退いたネジに被せる様に、体重を乗せた掌底を突き出した。

「セアッ!!」

鍛錬場に掌底が打ち付けられる音が響いた。開始三秒の出来事。

しかし、掌底は腕を十字にしたネジに防がれていた。しかし精神的には十分な衝撃を与えたようで、ネジは驚きを隠せないといった表情を腕の間から覗かせている。私は一旦その位置から遠ざかる。

「速い! 驚いたな……」

声はヒザ様のものだった。ヒザ様も吃驚したようで、なんだから嬉しくなり私は笑みを零す。

「油断は禁物、ということですね」

そう言うと、今度はネジの方から仕掛けてきた。

私はそれを蹴りの連打で牽制する。

日向流は相手の懐に入つての連続拳が基本である。対する私の体術は中距離からの一撃離脱。近づかれれば分が悪い。暫くは私の蹴りを、ネジが避けたり防御したりという状況が続く。

しかし、ネジは徐々に蹴りの速さに慣れ始め、蹴りを腕で往なしながら距離を詰め、私の身体を射程圏内に捉えた。そして右手の指突が私を襲う。

「つく!」

蹴りでは捌けない!!

私は左手で指突を弾く。が、次の瞬間にはネジの左の指突が既に私の左肩に食い込んでいた。

「ツツウ！」

痛みに眉を顰めるが、それだけではネジの攻撃は止まらず、次々と放たれる攻撃を私は捌く。

数発、私は被弾するも、連撃に堪え、反撃の糸口を探す。

そしてネジに疲れが見え始め、速度が落ちたその瞬間を見逃さない。

ここだっ！

私は右足の蹴りで、ネジが指突で突き出していた右腕を大きく弾き、その勢いのまま左に腰を捻り、回転を付けて飛び上がる。

二段回し蹴り。

今まで軸足になっていた左脚に腰から伝わった回転力が加わり、右腕を大きく跳ね上げられて体制を崩しているネジの左側頭部へと踵から吸い込まれた。

鍛錬場に鈍い音が響き、ネジの身体が数メートル吹き飛ぶ。

一瞬時が止まったかのように辺りが静けさに包まれる。

ネジはしっかりと二本足で立ったままだ。

攻撃が当たる寸前に、左腕を滑り込ませ、回し蹴りを防いでいたのだ。

ジロリと私を睨んでいる。……怖えよ。

私はバランスを崩し腕から着地する羽目になっていたが、すぐに立ち上がり構えなおす。

そしてネジが走り出した瞬間、

「そこまでだっ！！」

ヒアシ様が私たち二人の間に入り、叫んだ。

静かな鍛錬場に響いた大音響に私達は吃驚する。そして、ネジの方が一足早く気を取り直したようで、

「なぜですかっ!?!」

とヒアシ様に尋ねた。

「……やり過ぎだ！怪我をするために組手をしているんじゃない」
ネジの左腕は誰が見ても解る位に真っ赤に腫れ上がっていた。
「つても！」

今度は私の抗議の声だ。決着が付かないのはとても気持ちが悪い。
「チャクラを禁じている組手だから、お前は立っていられるのではないか？」

その通りだった。

私の身体の数か所にはネジの指突で痣が出来ている。もし、チャクラを使用していたならば私の身体は内部から破壊されて、既に動けなくなっていたかもしれない。

私は「つうう……」と呻き、何も反論できなくなった。

「ともかく……だ。集中するのはいいが、周りが見えなくなり、怪我をすることも、怪我をさせることも許さん！お前達には一週間の鍛錬禁止を命ずる。さっさと治療室へ行け！」
コウ！

呼ばれたコウは私達を日向の屋敷にある簡易的な治療室へ連れていくため私達を鍛錬場の外へ促した。

私達の組手は開始数分で終わってしまった。

治療室で私達は薬草の成分を染み込ませた湿布薬や包帯を巻きながら雑談をしている。

「はあ、ヒアシ様、滅茶苦茶怒ってたよ。後で謝らないと」

「私も、あんな剣幕のヒアシ様は久方ぶりにお目にかかりますね。
まあ、確かにアレは組手と言うよりも、果たし合いの様なものでしたからね。やり過ぎです」

「私もネジもまだ本気出してないのになあ」

私の言葉に、それまで黙っていたネジが口を開いた。

「……あれほどの体術の他に、まだ何か隠しているのですか？」

「まあね、日向の【白眼】みたいに、私も奥の手を残していてもおかしくはないだろ？」

「そうですね。正直、驚きました。年下の、しかも女の子にここま

でやられるなんて……」

「『人は見掛けによらぬ』ってね」

そう言くと、ネジは笑いだした。

「あははっ！三歳児に諭されるなんて、僕もまだまだですね。今日の鍛錬は楽しかったです。今度また相手してくれますか？次は怒られない程度にしなければいけませんけど」

笑われたことに辟易しつつ、私は答える。

「うう、一歳しか変わらないのに……。まあ、いい。次こそ勝つてやるから」

「ふふっ、ありがとうございます。では、そろそろ戻りましょう」

「……そうですね」

笑いながら私の頭を撫でたネジへ、コウが睨む様な視線を送りながら答えた。

私は、その視線を気のせいだろうと思うことにし、二人と共に鍛錬場へと戻り、ヒザシ様とネジはそのまま帰ることとなった。

……あれ？　そう言えば、あの場面、無かったなあ。

08 招かれざる客と覚悟の欠落（前書き）

| | |
|--------------|------|
| 2010 | 2010 |
| ・10 | ・10 |
| ・26 | ・26 |
| 改稿（縦書きPDF対策） | |
| 若干修正 | |

08 招かれざる客と覚悟の欠落

新月の夜、月明かりを失った空は暗く、しかし犇めく星達は「我こそは」と普段よりも一層自己主張を強めている。

この世界にも星座という概念はあるのだろうか？ 少し落ち着いたら調べてみようか。

私は今、屋敷の屋根の上に居る。

正確には私は影分身であり、本体は私の真下の部屋で就寝中だ。私が寒さと眠気と疲れに辟易しながら見張りをしているというのに、何とも羨ましい限りだ。

影分身は、維持するにもチャクラは使う。まだ三歳児ではあるが、人よりもチャクラを多く持つ私であっても、夜間に影分身をずっと維持していると、朝方にはかなりへばってしまう。

この術を使ってみて初めて、原作でのナルトの無限スタミナっぷりがわかる。影分身二千体とか、もう、馬鹿かと……。

まあ、朝になればこの眠気と疲れは本体に戻るんだけど。

見張りをするだけでは暇なので、私はこの時間で鍛錬も行っている。といっても、それも見張りの一環なのだけ。

気配消しの術 【空漠の術】は、大分思い通りに扱えるようになった。ネジとの会話にあった奥の手とはこの術のことである。ただ、実際に使ってみて解るのだが、気を抜くとすぐに術が解けてしまう。そのため、使用中は集中力を擦り減らし、今のところ連続使用が調子のいい時で二時間程度。その間ならば、私は『存在しない者』の様になれる。

更には、この術の副次的効果らしいのだが、この術で自分の気配を消すと、相対的に周囲の気配に敏感になる。

厳密に言えば、気配そのものに敏感になるというよりも、空気の流れが読めるようになり、その変化で気配を掴むことが出来る、と言った具合だ。

空漠の術自体が空気に溶け込むというイメージのため、自然と身に付いてしまった。

副次的効果にしては使い勝手の良い能力だし、もっと鍛錬すれば応用が利くかもしれないな。

そんな風に見張りをしていると、この間、丁度術の集中力を切らした時、偶々女中に見られてしまうという失敗をしてしまった。

夜の暗がりのお蔭で「何かが屋根で動いた」程度にしか確認出来なかったらしく、幸い私だとは気付かなかったみたいだ。しかし、その目撃者となった女中が、翌日に結婚が決まるという偶然が重なり、今、日向家の女中達の間で幸せを呼ぶ『座敷童子ブーム』が起きてしまっている。

時折、三十間近の女中の一人が、深夜に一人でコソコソ廊下を歩いているのは、秘密にしておいてあげよう。

私がこんな生活をするようになって二週間が経つ。

本当に誘拐なんて起こるのか？

そんな考えさえ、頭を過る今日この頃である。

しかし、今日はなんだか胸騒ぎが収まらない。そして新月である。雲がこの日を待っていたのならは大いに納得できる。隠密が地を駆けるには絶好の日だろう。

見張りを続け、子の刻、そろそろ日を跨ぐ頃かな？ と思ったその時、気配を感じ取った。こちらに近づいている、日向の屋敷の間ではない気配。

ようやく来なさったか……。

私は腕に巻きつけていた糸にチャクラを伝わせる。それが作戦開始の合図だ。この糸のもう一端は本体の腕に巻き付けられており、

チャクラを流すことで本体に気付かせる。言わば『有人目覚まし装置』である。何故こんなことをしたかと言うと、単に下に降りることが面倒だったただけなのだが……。

さてと、チャクラは多めに流さないとな。

「!?っひあ!」

ビクンツと体を震わせ私は布団から飛び起きた。隣ではヒナタがスヤスヤと寝息を立てている。私はホツと息を吐き、すぐに悪態をつく。

我が分身よ、いくら私が寝起き弱いからって少し流すチャクラが多すぎではないだろうか? まあ、でも、お陰様で頭は冴えているんだけど。

私はすぐに【空漠の術】を発動し、そして、待ち伏せをするために、影分身のいる屋根の上へ移動する。

まず、これからすることを確認しよう。

第一に、ヒナタの無事である。指一本触れさせてやるものか。

第二に、相手の意識を断つこと。殺しては元も子もないのだ。

第三に、ヒアシ様達への説明。うまい具合に話せば何とかなるだろう、たぶん……。

木の葉は結界で里全体を包み込んでいて、侵入者が居ればすぐ分かるって漫画で見たような気がするのだが……どうやって突破したのだろうか?

屋敷の裏手にある林から塀を越えたらしい侵入者は、広い屋敷の中、迷わず私達の部屋へと向かっていることが、気配によって感じ取れる。この屋敷の見取り図は頭に入っているみたいだ。ヒナタの誕生日の時に来た使者が探知系の忍者だったのかもしれない。

見えた。

全身を黒衣で包んだ身長の高い人間、顔まで布で覆われているため表情までは判らない。辺りの様子を窺いながら近づいて来るが、私に気付く様子はない。【空漠の術】が上手く働いているようだ。侵入者は物影を伝うように近づいてくる。そして屋内に侵入するため、私の足元にある、廊下に面する木製の引き戸に手を掛けた瞬間。

手刀一閃。

私の影分身が屋根から飛び降りざまに首へと放った一撃は、面白いように綺麗に決まり、侵入者の意識を刈り取った。

侵入者の身体は糸を失った操り人形のように力無く前のめりに倒れ、うつ伏せに転がった。

……思った以上に上手くいったな。あまりにもあっさりと片が付いたことに、若干の肩透かしを食らった気分になりつつ、喉けた影分身の横に屋根より降り立つ。

まあ、無事に済んで良かった。後はこの侵入者を簀巻きにでもして、ヒアシ様に突き出し、説明をするだけだ。そう考え、【影分身】を消し、【空漠の術】も解いた。

低く唸るような声がしたのはその時だった。

「【雷遁・地走り】」

急激に空気が殺気に染まり、私は本能的に危機を感じ、侵入者から離れようとしたが、既に遅かった。

！？

私の身体に地面を這わせて伝わった電撃が襲う。身体中が悲鳴を上げ、筋肉が引き攣り痙攣を起こす。

続いて侵入者は、うつ伏せの状態からゆらりと立ち上がった。そして流れるような動きで、感電して動けない私の喉の辺りに人差し指と中指を翳した。すると「バチッ！」と光が弾け、喉に焼けつくような痛みを感じた。

「　　っ！！」

声が！出ない！！

不味い！　頭の中で警鐘が打ち鳴らされるも、電撃で痙攣する身体は言うことを聞いてくれない。

「妙な術を使うようだが、まさかこんなガキとはなあ。……日向の人間ではないようだな。叫ぼうとしても無駄だ、声帯を麻痺させたからなあ」

なんで！？　確かに気絶させた筈だ。気が付くにしても早すぎる！
私の顔に疑問の色が浮かんでいたのを感じ取ったのか、侵入者が続けて話す。

「ククツ、俺は幻術対策に一定周期で脳に電気信号を送っていてなあ、そのおかげで気絶もしないんだよ。俺を止めるならば、殺すか、四肢の骨でも折るんだったな！」

うつ伏せで倒れていた時に既に意識が戻っていたのだろう。私が気を緩めたところを見計らい、うつ伏せの状態を利用して気付かれずに印を結んだということか。　完全に私の油断の招いた事態だ。

考えてみれば初めての実戦なのだ。慎重に慎重を重ね行動するべきだった。それに加え、漫画でのこの侵入者は、ヒアシ様に簡単に仕留められていたイメージしかなかった。だから、「私でもやれる」と、心のどこかで相手を嘗めて掛かっていたことも否定できない。

……甘かった、相手は腐っても忍頭。

私には、命のやり取りをする覚悟が足りなかった。術も技も不明な相手に中途半端なその覚悟で挑んでしまったのだ。

この世界では死が身近に存在する。判っていたはずなのに、私はまだ、前世での平和ボケを引きずっていたのかもしれない。　そうなれば、これは当然の報いだろう。

前世では、殺意に対し、恐怖を感じる間もなく私は撃たれ、命を落とした。しかもあの時は、強盗犯の衝動的な感情での犯行だったため、殺意があったかどうか怪しいものだ。だが今、私に向けら

れているのは、明確な殺意。突き刺さる様な、どす黒い意思。

……怖い。

状況を理解し、疑問の消えた私に、恐怖が残された。そしてそれは私を支配する。前世でも今世でも経験の無い、今始めて感じる恐怖。

身体の痺れはまだ取れていない。それに輪をかける様に、電気の痺れではない、新たな震えが私を襲う。頬にはいつの間にか涙が伝っていた。

それでも、唇を噛み、その恐怖をグツと抑え込む。そしてヒナタを守ることを考えた。

滲む景色の中に侵入者の姿をしつかり捉え、睨む。

今の私は、足が痺れで立てず、尻餅をついた状態だ。

手は背中の後ろで地面についた状態にあり、幸い、正面に居る侵入者には見えない。電撃を喰らった際に一番距離があった部位だったからか、痺れながらもわずかに動かせる。私は気力を振り絞り、背に隠れた震える手、その精一杯の速さで印を結ぶ。

間に合えっ！

「残念だが日向のガキ以外には用が無いのでなあ。貴様には消えてもらう」

【火遁・豪火球の術】

侵入者が手を伸ばしかけた時、私は印を結び終わり、術を発動した。

私の口から炎が吹き出される。それは一気に膨れ上がり、新月の闇をまるで夕方の様に橙に染め上げ、空気の爆ぜる音が辺りに響く。

「……！ チェッ！」

触れる物を燃やし尽くさんとばかりに侵入者へと襲いかかる火球。しかし、至近距離にも拘らず、侵入者の反応の方が一瞬早く、肩を掠めるも、間一髪で直撃を避けられた。

「……大した胆力だよ、全く。とても餓鬼とは思えん。だが、もう

終わりだよ」

術を避ける為に離れた距離を歩きながら侵入者が言った。

そこに第三者の声が響いた。

「何者だ！？」

突然の誰何の声に、侵入者の足が止まる。

「チイツ！ 今の音で気付かれたか！」

私は思惑通りに事が成ったことに安堵した。先の術は、今、私が使える中で一番派手な術だ。目的は侵入者に命中させるためではなく、周囲へ危機を知らせるため。もちろん命中すれば良かったことには変わらないが……。

侵入者は、私に止めを刺すことを辞め、逃走しようとする。その瞬間、突風の様な風を感じた。

「ぐあっ！」

気付けば、侵入者の身体に、【瞬身の術】を使って現れたヒアシ様の指突が突き刺さっていた。それは更に続き、侵入者の身体は指突の連撃によって宙に浮いている。

「【八卦百二十八掌】！」

ああ、結局こうなってしまった……。

侵入者が命を落とせば、原作通りの展開が待っているだろう。

私はヒアシ様の姿に安堵をおぼえると同時に後悔の念を深めた。何も変えることは出来なかった……。

そして、極度の緊張から解放された私は、次第に意識が朦朧とし、ヒアシ様が侵入者を倒した様子が見えたのを最後に、視界が閉じた。

09 何時かの目覚めと意外な結末（前書き）

2010・10・26 改稿（縦書きPDF対策）
2010・12・05 若干修正

09 何時かの目覚めと意外な結末

どのくらい気を失っていたんだろう……視線の先には四角いタイル張りの天井が映っている。

「……。ハッ!？」

私はデジャヴを感じ、勢いよく身体を起こす。
「きゃっ!」

すぐ横で声が聞こえ、視線を向けると、そこには私の手を握りながら、椅子から落ちそうになっているヒナタがいた。

「え? ヒナタ?」

「ねえさま……。ねえ……。さま……。ひっく、ふあ、ねえ、ひっく、さま……。ああああん!」

ヒナタは椅子に座りなおし、一瞬、安堵の表情を浮かべたかと思ったら、今度は大声で泣き出した。

うん、この世界で初めて目覚めた時の事が頭を過って、一瞬嫌な予感がしたけど、杞憂だったようだ。私は死んでないし、二度目の人生のままだ。

……良かった。また赤ん坊になっていたらどうしようかと思った。ヒナタの泣き声の響く中、自分の手と足の指をワキワキと動かし、手足が動くことを確認する。そして他にも異常が無いか確かめる。

……喉が痛いな。それ以外は大丈夫みたいだ。

自分の状況を確認し終え、漸く目の前の事態に対処することにした私は、ゆっくりとヒナタの頭を撫でてやる。

「私は大丈夫だよ、ヒナタ。心配してくれて、ありがとう」

「ひっく、ひっく、ほん、とう、ひっく、につ?」

「うん、本当に。もう大丈夫。だから、な、ヒナタも泣き止んで?」

「ひっく、……。うん。ひっく」

ヒナタが落ち着くまでと思い、頭を撫で続けていると、病室の出入り口から、三人の人間が入って来た。

「おやおや、眠り姫のお目覚めのようだな」

「ミソラ……無事でよかったわ」

相変わらずボサボサ髪の医者、イクモと、安堵した表情のヒヨリ様がそれぞれ言葉を発する。一步引いた位置に居るミナはにこやかに手を振っている。

「御心配お掛けしました。ヒヨリ様」

「ええ、本当に、皆、心配してたのよ？ ヒナタはあなたの傍から離れなくなるし。……コウ、あの人にミソラが目を覚ましたことを伝えに行ってもらえるかしら？」

「……わかりました」

部屋の外に立っていたらしいコウが姿を見せた。ヒヨリ様の言葉を了承した後、私を複雑な表情で一瞥してから、再び姿を消す。

んー、コウのことだから、どうせ自分を責めているんだろうな……

……。後でフォローしとかなないと。

「で、具合はどうだ？」

イクモが聞いてきたので、さつき確認したそのままに伝える。

「喉が痛い事を除いては、特に問題は無いです」

「ふむ、喉の痛みは火傷のせいだろう。見えんところの傷までは俺じゃ治せんからな。まあ、薬飲んで、食事は暫く柔らかいもん食つとけばその内治るだろうさ」

「そんな！病人みたいな……」

「ミソラ、あなたは病人なのよ？」

ヒヨリ様に突っ込まれ、

「あ、そうか」

と納得すると、

「はあ、全く、あなたと言う子は……」

溜息を吐かれた。

「ククッ、その調子なら問題無さそうだな。目を覚ましたら、火影

様んところに向かわせるように言われている。俺は事情を聞かされていないからな、そのうちヒアシの奴が迎えに来るだろうよ」

その言葉に気を失う前の出来事を思い出す。そして、居心地の良い空気に、半ばその出来事を忘れかけていた自分を叱咤したい気持ちに駆られる。

「ヒザシ様は！？」

突然顔を青くし、声を張り上げた私に一同は驚く。

泣き止んでいたヒナタは、また泣きそうになっているし、火傷の喉が痛んだが、気にしてなんかいらなかった。

「ヒザシ様は無事なのか！？」

語調を荒め、もう一度問いかけた私に、イクモとヒヨリ様が答える。

「ヒザシ？ 木の葉病院に運ばれたのはミソラちゃんだけだが？
なんでヒザシなんだ？」

「ヒザシ様ならあの人と一緒に火影様の所に居るはずよ？」
取り敢えず、まだ生きていることは判ったが、それだけではまだ安心できなかった。

「ミソラ、落ち着きなさい。詳しい話はあの人に来てからよ。あなたはそれまでもう少し休みなさい」

「……はい」

ヒヨリ様に窘められ、自分を取り乱していることに気づき、少し落ち着く。それに、二人にこれ以上聞いても何も分からないみたいだ。

私を一撫でしてから、ヒヨリ様はヒナタを連れて病室を出ていった。

「そんじゃ、何かあったら呼ぶように。あんまり親に心配かけるなよ？」

と言った後、イクモとミナも部屋を出ていった。

……休めと言われたものの気分は落ち着かず、かといって、現状、何も出来ない私は、じつと窓から見える空を見つめる。

空にはまばらに綿雲が広がり、太陽の光が陰ったり、また差し込んだりを繰り返していた。

どのくらい時間が流れたか分からない。いつの間にか興奮状態は治まっていた。今、私は先程の自分に対して反省している。

いきなりヒザシ様のことを聞いたって、不思議がられるのは当然だ。ヒザシ様はあの場に居なかったのだから怪我をする要素など無いし、もちろん、ヒヨリ様もイクモも事の顛末など知る由も無いのだから。……もっと冷静にならないと。

不意に「入るぞ」という声がし、その方向を見た。そこにはヒアシ様とコウが立っていた。それに対し「どうぞ」と答えると、ヒアシ様が病室に入ってきて来て、コウはそのまま部屋の入り口で見張りに就いた。

私の状態を確かめる様に見てからヒアシ様は口を開く。

「喉は大丈夫か？」

「はい、食事に気を付ければ自然に治るそうですし、言葉を喋る分には影響はありませんので」

「そうか、先ずは無事を祝おう」

「御心配をお掛けしました」

「うむ、この後のことは聞いているな？」

「火影様の所へと、聞いています」

「ああ、病み上がりの所悪いが、念のため、お前の証言も必要だ」

「はい。……あの」

会話の終わりがけたところで、私は聞くことにした。

「なんだ？」

「あの侵入者は……どうなりましたか？」

私は一番気になっていたことを聞いた。

「アレは今は……聴取を受けている」

「生きているのですか!？」

忌々しげにヒアシ様が答えると、私はその言葉に驚きの声を上げてしまった。……また喉が痛んだ。

「ああ」

ヒアシ様が肯定する。

……諦めていた。しかし、その思いがけない言葉は、私の予想を良い方向に裏切ってくれた。

「……良かったあ」

気付けば、安堵した私は、息を吐くと共に、声を漏らしていた。まるで侵入者の身を心配しているかのような私の言動に、ヒアシ様は訝しげな表情をしているが、構わず私はあの時最後に見た光景を確認する。

「でも、あの時確かにヒアシ様が侵入者を……」

「無力化したに過ぎん。あれ以上お前に危害を加えるようならば容赦はしなかったがな……」

侵入者が生きている。その事実はおのにとって何よりもの吉報だった。

漫画では侵入者はヒナタを確保し、脇に抱えながら逃走中の所をヒアシ様に殺された。

ヒナタを確保されている以上、それは人質の様なものである。何かあってからでは遅いため、ヒアシ様は不意打ちの手加減なしの一撃で仕留めるしか無かったのだらう。

だが今回は、発見された時に、侵入者は何も抱えてはいなかった。私がすぐ傍にいたが、私が目的のものでは無かった侵入者は、逃走を優先させた。そのため、ヒアシ様は侵入者の無力化に成功した。

その手にヒナタが居たか居なかったかの違いで、侵入者の命の有無が決まったのだ。戦闘には負けたが、勝負には勝った。そんなところだろうか。

私が関わることで、私が意図しない所で未来が変わった。世の中

何がどう転ぶかわからないものだ……。

今回は運良く、望んだ未来に近いものになったが、一步間違えれば最悪の事態になっていたかもしれない。考えたくもないことだが、もしあの時、私が殺されていたらどうなっていただろうか……？ 手を出したのがあちらが先となれば、漫画のように痛み分けという風にはならず、戦争になっていた可能性さえある。

改めて、自分という存在が如何にこの世界にとって異端であるかを思い知る。私が居なければ、それはもう予定調和の如く、この世界は漫画通りの展開を向かえるのだろう。

本来、私のこの命は『九尾事件』で失われるはずだったのだと思う。語られることの無い物語はあの場で終わるはずだったのだ。だけど、この命は私が憑依したことによって、確かに生きている。そのことがこの世界にどういった影響を与えるのかは、自分自身想像がつかない。

先程の考えのように、私の行動如何が、大きな流れになることさえあるのだ。

思案しているところへ、ヒアシ様が聞く。

「なぜ、お前が侵入者の心配など？」

どう答えたものかと考える。ヒアシ様からすれば、私が侵入者の正体を知っているのはおかしい。罪悪感を覚えつつ、誤魔化すことにする。

「私のせいで、ヒアシ様の御手が汚れるのは哀しいのです」

ヒアシ様はその答えに表情を緩める。そして私の頭を撫でながら言う。

「フツ……。お前が気にするような事ではない。子を守るのは親として当然だ」

その表情に、嘘を吐いた私は、一層の罪悪感に見舞われた。

ああ、もし、私の中身が元男だと知ったら彼はどんな顔をするのだろうか？ この秘密は墓場まで持って行こうと誓う。

「時間を取り過ぎた、そろそろ火影様の所へ向かうぞ」
「はい」

私は今、木の葉の里の大通りにいる。この大通りは、里の入り口である『阿吽の門』から火影邸へと真っ直ぐに繋がっており、里のメインストリートでもある。私達は木の葉病院の通りからこの大通りへを出て火影邸へと歩いていった。

火影の執務室へ向かう道程にはコウも付いて来た。

木の葉病院と火影邸とはそんなに離れてはいない。私の足でも二十分もせずに到着した。

『火影邸』とは言っても、それは火影様の住まいも含む、木の葉の里の役所の様なものだ。五階建ての建物で、一階は婚姻や出生などの戸籍管理や里人の相談所。二階は忍者にとつての職業安定所の様な役割を担っており、依頼の仲介をしているようだ。三、四階は行政や教育に関する公務機関と要職の執務室などが詰まっている。そして五階が火影の執務室兼居住区間となっていた。

ヒアシ様は一階の職員に断りを入れ、私を引き連れて五階へと階段を上がっていく。コウは一階の待合室で待つようだ。

コンコンと二度、執務室のドアをノックし「ヒアシです」と言う。と、中から「おお、来たか、入っていいぞ」と少ししわがれた声が出たので、私達はドアを開き、中に入る。

火影と里の相談役と思われる男が一人、並んで座っており、左右の端には暗部の面を付けた忍者が直立不動で立っている。それに向かいあうように日向家の人間、ヒアシ様の父親になる人物を中心にヒザ様を含む数人が並んで立っていた。

ヒアシ様と私もそれに倣って列に加わる。

「ふむ、漸く役者が揃ったようじゃな。……お主がクウヤの忘れ形見か。成程、白髪に碧眼、確かに面影があるのう。なに、緊張する

必要は無い。お主は質問に答えるだけで良いのじゃ」

「はい、私に分かることでしたら」

それから私は事件のことについて色々聞かれた。事件の起きた時間から、侵入者の目的など……。それは取り調べと言うよりも裏付けや確認作業に近いものだったのは、既に侵入者が色々喋ったからだろう。拷問でも受けたんだろうなあ……。

粗方の質問に答えると、私はすぐに解放されることとなった。

「聞けばあの侵入者に一撃を喰らわせたらしいではないか、これからの成長を楽しみにしておるぞ。御苦労じゃった。今日はゆっくり休むがよい」

私は一礼し、火影の執務室から退出した。事の成り行きを最後まで聞きたかったが、私にその権利は与えられなかった。まあ、三歳児だしな、仕方が無い。

取り敢えず、木の葉からは被害者は出ないようだから良しとしよう。雲隠れや雷影がどうなるのかは知らないけど……。

予想されることとしては賠償金や術の提供ぐらいだろうか？ 漫画と違い一方的にあちらが悪いため、大手を振って要求できるというものだ。

ともかく、これで日向の平和が護られたと考えていいだろう。

私は機嫌良く一階に戻り、コウと合流し、屋敷に帰ることにする。ヒアシ様はまだ掛かるようだし。

コウは未だに浮かない顔をしていた。丁度いい、コウを励ましておこう。

私は肩を落とすコウに話しかけた。

「落ち込んでいるのか？」

私が聞くとコウは答えた。

「私の今の御役目はヒナタ様とミソラ様を護ることです。今回は敵の企てに気付かず、あまつさえ、ミソラ様にお怪我を負わせてしまいました」

「深夜だつたんだから仕方ないだろ？」

「それにしても、ミソラ様の危機にすぐに駆け付けるべきでした。私が現場に着いた時にはもう……」

より一層落ち込むコウに、ちよつと苛々してしまう。前世の時から、こういつた後ろ向きに考える奴が好きじゃない。

「あー、もう。今、私がこうやって無事にピンピンしてるんだからもういいだろ？ そんなウジウジしていて私やヒナタを守るのか？ 済んでしまったことは仕様が無いだろ！ 今は今回の経験を生かして、また何かあった時のために考えるのが大事なんじゃないのか！？」

私が捲し立てると、その剣幕に、コウは目を点にして私を見ていた。励ますつもりがつい怒ってしまい、私は反省する。

考えてみれば、私が危機に陥ったのは、私が勝手に事件に首を突っ込んだせいだし、相手を嘗めて掛かったからだ。私がコウを怒る権利など無いし、理不尽極まりないのだが……。

コウは暫くした後、ハツとして意識を戻した。

「ははっ、ミソラ様には敵いませんね……。仰る通りです。過去に拘っても現在は変わらない。護れなかったことを考えるより、これから護ることを考えなければなりませんね。私は自分の使命を見失いかけていたようです。有難う御座いました」

「どういたしまして」

適当に思ったことを言っただけだったが、その言葉はコウに感銘を与えたようで、私に感謝の言葉を言った。

三歳児の言葉に感銘を受ける十八の青年。

世間的にはどう映るのだろう……？

コウは情けなくは無いのだろうか……？

ロリコンでMだったなら救いようがないぞ……？

そんなくだらないことを考えながら、ヒヨリ様とヒナタが待つ屋敷への帰路についた。

ああ、帰ったら久しぶりにグッスリ眠れそうだ。

10 はにかみ笑顔と妹二人

ヒナタ誘拐未遂事件より二年の時が経ち、弥生の月。

私は今、コウとヒナタと共に木の葉病院へと向かっている。

あの日以来、日向は至って平和である。日向に限らず、木の葉の里全体で見ても、目立った事件は無い。そのためか、里の忍たちもどこか気の抜けたような顔で通りのあちこちで屯していた。

この緩んだ里の空気、平和ボケしていないと言えば嘘になるだろう。これならば侵入するのも容易いだろうな……と、平和であることが悪い訳ではないが、侵入者の被害者としては、この緊張感の無さを憂慮する。

この世界でいうところの忍者とは、その文字の意味する『しのぶもの』からは程遠く、国の雇っている傭兵集団という側面が強い。そして傭兵である以上、その力を奮う場所がなければ、哀しいかな、彼らはただの穀潰しに過ぎない。

上忍や、優秀な中忍は偵察任務や警戒任務、分野に長けた中忍以上は医療や教育分野などで、里からの要請があるが、能力の劣る下忍となると、戦時中でもない限り、仲介所で依頼でも請けなければ仕事が無い。

そんなこともあり、忍者という職業だけでは身を立てられない者もあり、日々の生活のため、兼業している人は少なくはないらしい。

兼業と言えば、作中の人物の一人、『山中いの』の家は花屋だったような？ うろ覚えではあるが、そんな描写があった気がして、私は興味本位で提案してみる。

「手ぶらも何だし、花でも買って行かない？」

「いいですね、ヒヨリ様も数日御入院なさる筈ですし」

「姉様、私も賛成です」

どうやら全員一致の様で、私達は花屋を探すこととなった。

暫く歩くこと十数分。

「ありました！ 姉様！」

花屋を探しに私より先に歩いていたヒナタが、自分の横にある建物指差して私を呼んでいる。

すぐに追い付き、ヒナタの指差す先をみると、そこには『花』とでかでかと書かれ、脇の方に控え目に『やまなか』と書かれた看板を掲げた店があった。

おお、本当にあつたよ。私の記憶力もなかなか棄てたものじゃないな。

早速、店内へと入る。中はテニスコート四分の一くらいの広さで、その面積の中に所狭しと色とりどりの花が並んでいる。

「いらつしやいませー！」

元気の良い声が聞こえ、そちらを見ると、薄い金色の髪をポニテールで縛った、私と同じ年くらいの女の子と、その女の子の母親らしい、茶色の髪を肩の辺りまで垂らした女性がいた。

私はその女の子が一目で『いの』だと気付いた。ふむ、かわいいな、それに母親も美人だ。

そもそも、この世界に来てから常々思うのだが、この世界には顔の整った人が多い。元が漫画の世界だからだろうか？ もし私が男のままだったならば、ここは桃源郷なのではないだろうか？ ああ、何で私は女になってしまったのだらう……。

「これなんて、どうでしょう？」

頭の中ですくらないことを考えていると、コウが指差して聞いて来た。コウの指の先にあるのは 鉢植えのサボテン。小さな鉢にちよこんと生えている あ、可愛い。

いや待て、危つく額きそうだった。しかも気付かずに顔が綻んでしまっていた。……可愛いけども、これはちよつと違つたらう。コウのセンスを疑う。

「コウって、そんなんだからその年で女の子の一人も引つ掛けられないんだよ。だいたい、鉢植えなんてのは入院している人には贈っちゃダメだろ」

もつとも、前世ではこのセリフを、友人にそのまんま言われた経験のある私が言うのもどうかとは思っただが……。

友人が言っていたが、鉢植えの花というものには「根付く」という意味があるらしく、これを入院している人に贈ると「病院に根付く」や「寝付く」といったような意味になってしまうという。

私の言葉に、コウは物凄く落ち込んでいる。

……どうやらコウと私にはこういったもののセンスが無いようだ。そう思い、ヒナタを見ると、ヒナタはヒナタで店内に姿が無く、外のタンポポをボウツと見ている。うん、私達は実に個性的な面々らしい。

「今日はどのような花をお探しですか？」

私達の迷う姿を見ていた、いのの母親がコウに話しかけてきた。

コウのことを私達の保護者だと思ったのだろう。

「えーと、出産祝いに花を贈りたいのですが」

「あらまあ、おめでたいですね。私達でよろしければ、見繕いましょうか？」

「はい、お願いします」

コウは少しホッとした表情になり、いのの母親に頼んだ。母親はすぐにいのへと幾つか指示を出し、支持を受けたいのはちよこまかと店内を動き回って花を母親に渡した。

えらいな、この年でしっかり母親の手伝いが出来るなんて。日向の屋敷では女中が居る為、私達は手伝いをするには無い。寧ろ、手伝うと女中の仕事を奪うことになってしまうので。いい顔をされない。

花を受け取った母親は手慣れた手つきで包装し、花束が仕上がった。白を基調に黄と桃色を交えた可愛い感じの花束だ。

「助かりました。有難う御座います」

コウは花束を受け取り、料金を払う。

「いいえ、お客様ですから。あ、そうだ！」

突然いのの母親が声を上げ、店内の花の中から二本の切り花を持って来た。それぞれ白と桃の、シンブルだが気品のある花だ。

「これは可愛いお嬢様たちへのサービスよ」

その花を丁度良い長さに切り直し、簪の様に、桃色の花の方を私の白い髪に挿した。

「ミスミソウ……雪割草っていった方が解るかしら。もう時期も終わりですし。丁度良かったわ。あの子には貴女が渡してくれるかしら？」

店の外のヒナタを見ながら、もう一本の雪割草を私に渡す。

「ありがとう、お姉さん！」

私が笑顔で礼をすると、

「あらあら、お上手ね！ふふっ」

満更でもない顔で手の平を頬にやり、微笑んでいる。私とコウは、もう一度お礼をして店を出た。

「ヒナタ！おいで！」

タンポポを見ていたヒナタを呼び、雪割草を見せる。

「……キレイ」

「私みたいにしてあげるから、近付いて」

その言葉にそつと私に近づいたヒナタの髪に、雪割草を挿してやる。

「似合いますか？」

「うん、可愛い。すごく似合ってるよ」

「ヒナタ様もミソラ様も、とてもお似合いですよ。」

「うふふ、……お揃い」

私とコウの高評価にヒナタは少し俯いて恥ずかしそうに紅くなっているが、嬉しさは隠せずに、顔は笑んでいる。

ヒヨリ様と同じ艶のある瑠璃色の髪に、白い雪割草が控え目だが、

逆にそれが程良いアクセントとなっている。更に、はにかんだ笑顔が加わり、もう抱きしめたいくらいに可愛い……。

「ありがとうございます、姉様！」

私はその衝動を何とか自戒し、話を切り出す。

「じゃあ、花も買ったし、木の葉病院に行こう！」

「そうですね」

「はい、姉様」

病院に着き、待合所でヒアシ様がコウと交代する様に、私達を案内する。ヒアシ様は火影邸で用事があったため、ここでの合流となったのだ。案内された部屋にはヒヨリ様と

「わぁ！小さい！」

ヒナタがヒヨリ様の元へ駆け寄り、抱えている赤ん坊を見て、驚きの声を上げる。そう、今日はハナビとの対面の日だったのだ。

生まれて間もない私を、一人屋敷に置いておけなかった前回とは違い、今回は「ヒヨリ様が落ち着いてから」ということだったため、今日はハナビが生まれてからは二日目となる。

「ふふっ、貴女もこんな小さかったのよ？」

と柔らかな笑顔で話すヒヨリ様。ヒナタは興味津々といった様子でハナビを見ている。

「ヒヨリ様、おめでとう御座います」

私は抱えていた花を渡そうとするも、ヒヨリ様は両手が塞がっている状態なので、脇に控えていた看護師に「お願いします」と手渡した。

「あら、気を使ってくれたのね、ありがとうございます、ミソラ」

「いえ、三人で決めましたので」

「そう、ヒナタもありがとうございます」

ヒナタは笑顔で応えている。続けてヒヨリ様が私達の髪を見て言

う。

「その可愛いお花はどうしたの？」

「花屋の店員に頂きました。雪割草という花です」

「ふふっ、とっても似合ってるわ、貴女もヒナタも」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます、母上」

そこで一旦話が途切れたので、私もハナビへと興味を移す。今はヒヨリ様の腕の中でスヤスヤと眠っている。

この少しだけ未来が変わってしまった日向家で、彼女はこれからどんな育ち方をするのだろうか？ 少なくとも私のいる限り、漫画の中より幸せにしてやろうと、目の前の幸せそうな寝顔に心の中で誓う。

「そうそう、この子の名前はハナビ。あなた達、お姉ちゃんになるんだからしつかりね！ 特にヒナタは甘えてばかりではいけないですからね？」

「はい、ヒヨリ様」

「……はい、母上」

私は普通に答えたが、ヒナタは教育ママの不意討ちに若干尻込みして答えた。ヒアシ様はそんな様子を静かに眺めている。

五歳年下の義妹が、そういえば、前世での私と従妹もそんな感じだったな。家も近所で、昔から家族ぐるみの付き合いだった。私は幼い頃から彼女の面倒をみて、まるで兄妹のように育ったのだ。……いかにいかに、少し昔のことを思い出してしまったが、このおめでたい時にしんみりした顔をするのは好くないと思い、考えを打ち切った。

前世では家族とは哀しい別れをしてしまったが、私にはこの世界にも家族が出来た。血は繋がっていなくても、ほんとの家族のように接してくれる人達の前で、前世のことを考えるのは失礼だ。

その後、少し雑談していると、ハナビがぐずりだしたので、私達

はそれで帰ることにした。ヒアシ様もこの後は任務も入っていないかったので一緒に帰ることとなった。

ヒナタは皆に褒められてすっかり頭の花が気に入り、時々花弁や茎を指で撫でている。

「ヒアシ様はこの花、どう思います？」

ちよつとした悪戯心で聞いてみることにした。ヒアシ様は面と向かって人を褒めることが苦手だから。

「……ああ」

「「ああ」じゃ分からないです……」

そして私は少し残念そうに俯いてやる。すると、

「……似合っている」

ボソツと独り言のように呟いたのが聞こえた。

「有難う御座います！ ヒナタにも言ってきました！」

「おいっ！」

ヒアシ様が少し慌てるが気にしない。

「ヒナター！ ヒアシ様も似合ってるってさ」

「あ、ありがとうございます、父上！」

それから完全に無言になったヒアシ様と共に、私達は帰路についた。

11 成長経過とアカデミー（前書き）

2010・12・05 若干修正

11 成長経過とアカデミー

「はあっ！」

私が放った右上段蹴りはネジの左腕に防がれる。

防がれた際の反力を利用し、一旦距離を置こうと飛び退くも、息継ぐ間も無くネジは距離を詰めてきた。一瞬早く着地した私はすぐさま蹴りと伴った背面宙返りをする。

サマーソルトキック。前世での格闘ゲームのキャラクターが使用していたものを真似た技だが、やってみると意外と出来るものだ。もつとも、この世界での身体能力をもってこそそのものだが……。回避とカウンターを両立させた優秀な蹴技だ。

蹴りは、私に向かっていった勢いを殺しきれなかったネジの身体を射線上に捉えるが、ネジが左へと身を捩ったことで、皮一枚のところで躲された。しかし、命中せずとも体勢を崩せたことを確認し、宙返りの着地から頭部狙いの回し蹴りへと移行する。だが、ネジの立て直しが予想よりも早く、カウンター気味に掌底が私の顔へと向けられる。

風がフワリと起こり、私の鼻の頭から頬へと流れ、髪が揺れたことを感じた。眼前にはネジの手の平があり、ピタリと静止している。そして私の足の踵もネジの側頭部に同じように存在していた。まるで私達二人だけが時に取り残されたかのように感じる。しかし、その時間は長くは続かずに、私達は「はああー」と空気の抜ける様な息の音と共に、鍛錬場の床に崩れ落ち、仰向けに転がった。

「はあ、また……引き分け……か……」

「また引き分け……だねえ。でも……最後のはカウンター……気味に合わせた……ネジの方が優位……かも？」

「【桜花衝】で……攻撃……されてたら……あの蹴りを避けずに防いだ時点で……ボクの負けだっただろう」

「それを言ったら……私はその前に何発か突きを受けてるから……
チャクラが練れなくなってるよ」

息も切れ切れに、チャクラを使用していた場合の不毛な言い争い
をしていると、鍛錬場の隅で組手を見ていたヒナタがタオルを持っ
て近寄ってきた。

「御二人とも、お疲れ様です」

「ありがと、ヒナタ」

礼を言っ受取り、汗の滴った顔を拭う。横ではネジもタオル
を受け取り、頭に被っている。

今日はヒアシ様は屋敷を留守にしているため、立ち会いにはコウ
を立たせており、そのコウは、何故か機嫌が悪そうな顔をしている。

ヒナタ誘拐事件が未遂で終わったことによって、本家と分家との
関係は原作ほど拗れることにはなっていない。

寧ろ、ネジとは良好な関係を築いており、こうして私達と共に鍛
錬する程だ。ネジも「対等な力量の相手との組手は学べるものがあ
る」「他流相手とも鍛錬をしたい」などと満更でもない様子で、毎
週のように屋敷に通っている。

たまに屋敷に訪れるヒザシ様は、どことなく複雑そうな顔をして
いるが……。

言葉遣いも、初めは宗家を氣遣った敬語だったが、私が普通に
して欲しいと言っからは、かなりフランクなものになってきてい
る。

ネジは本当に才能があり、天才と呼ばれるのも頷ける。私の
様に、転生によって、子供の吸収力に大人の理解力を得ているわけ
でもないのに、私との組手では互角であり、既に【白眼】も開眼し
ている。

さすがに忍術においては、私が上回っている自信があるが……。

「ふう、そういえば、二人は入学の準備は済ませた？」

息を整え、落ち着いたらしいネジが口を開いた。その内容は明日からの忍者養成アカデミーについて。

「んー、後は入学するだけって感じかな」

「私も……準備は済んでます」

「それは良かった。……アカデミーは、ミソラとヒナタ様には、レベルが低くてつまらないかもしれないな。」

「私も……ですか？」

ヒナタが不思議そうに聞く。

ヒナタも私たちと同じく鍛錬に参加している。逆を言えば、私達としか戦ったことが無い。そのせいか、ヒナタの強さの基準は随分と高い位置にあるようだ。確実に原作よりも実力を付けていると私は思うが、一度も勝ったことの無いヒナタは、劣等感を感じているのかもしれない。

「ヒナタ様も、同年代からみれば随分実力がある。自信を持つといいよ」

その言葉に苦笑しそうになるのを堪える。原作ではあれほど「才能才能」と言っていたネジの口からまさかこんな言葉が発せられるとは……。

とはいえ、ネジの言う通りである。鍛錬を楽しんで行っているヒナタは、向上心も高く、私とネジの二人のアドバイスもあり、覚えも早かった。

【白眼】はまだ開眼してないものの、同年代ならば、そうそう敵う相手はいないだろう。

「そうそう、ヒナタは十分強いよ」

「でも、私は姉様達に一度も……」

「私達に勝ちたいか？」

「え？そ、そういう訳では……」

「じゃあ、このままでもいい？」

「……勝ちたいです」

「うん、それでいい！その気持ちがあればヒナタはもっと強くなれ

るよ」

「ふふっ、ボクも負けてはいられないな」

私とネジが仰向けで、ヒナタがしゃがむ様にして話し合っていると「ゴホンッ」と咳払いが聞こえ、私はそこへ顔を向けた。

その方向からはコウが近付いて来た。一人蚊帳の外で寂しかったのか、さつきよりも機嫌が悪そうだった。

「えー、そろそろよろしいでしょうか？」

「あ、うん。じゃあ、次はネジとヒナタだな。私は休憩」

鍛錬は日が傾くまで行われる。実際、組手ばかりをしているわけではなく、チャクラコントロール、手裏剣術、忍術といったものの鍛錬を満遍なくこなした後に締めとして行われる。六歳の子供としては、どうかと思う様な生活だが、私にとっては鍛錬が遊びの様なものになっていた。特に、忍術を覚えるのは楽しい。

私には三つのチャクラが備わっている。一つは私自身のチャクラであるのは確かだ。もう一つは予測でしかないが、この身体の本来の魂のチャクラだと思う。そして最後の一つの正体は判らないのだが、ヒアシ様に【白眼】で見てもらったところ、どうやら先の二つのチャクラを繋ぎ合せる様に存在しているようだ。

自分の性質を確かめる為、チャクラ感応紙で調べてみたことがある。チャクラ感応紙とは、チャクラの潜在的な性質を調べるものであり、この紙に自分のチャクラを流すことで得られた紙の変化で、自分に向いている性質変化を知ることが出来る。

火ならば燃え、風ならば切れ、雷ならばシワが入り、土ならば崩れ、水ならば濡れる。

それによると、私自身のチャクラの性質は火。他の二つのチャクラについては、はっきりとは判らなかった。というのも、私自身のチャクラだけを練るのは問題は無いのだが、後の二種類は個別に練ることが難しく、どうしても三つくっついた状態で練られてしまい、感応紙は一番量の多い私自身のチャクラに反応してしまつたため、判

別が出来ないのだ。

ただ、風遁と雷遁が問題無く使えたため、そのどちらかだと思う。今は残りの性質である、水遁と土遁を覚えようと思い、術の勉強している。

性質変化以外の術や技も充実してきており、最近では【桜花衝】も使える様になった。

医療忍術の応用であるこの技は、緻密なチャクラコントロールを必要とし、原作では綱手やサクラが使っていた。赤ちゃんのころからチャクラの鍛錬をしている私でも、習得するには時間が掛かった。簡単に言えば、攻撃のインパクトの瞬間に溜めていたチャクラを一気に放出して爆発的な破壊力を生み出す技だが、その際のチャクラの移動や放出のタイミングを掴むのに苦労させられた。

ヒアシ様やネジの前でこの技を披露した時、二人が、砕けた岩を見て引き攣った顔をしていたのは記憶に新しい。

「明日は入学式です。疲れを残さないよう、今日はこのぐらいにしておきましょう」

ヒナタとネジが組手を終えたところで、コウが今日の鍛錬を締めた。

いよいよ今日からアカデミーでの学校生活が始まる。

式が行われている校舎正面の広場では、ちらほらとどこかで見たことのある顔が窺えた。いのにシカマル、チョウジ、あの根暗っぽく前髪が伸びた桜色の髪はサクラか……。シノはこの頃から既にサングラスを掛けている。キバは態度がでかく、ガキ大将といった雰囲気だ。そしてサスケにナルト、主役の二人は、この時はまだ純朴そうな顔をした普通の少年だった。

漫画で見ていたその少年少女達に、どこか懐かしいような気分に

なる。

「皆さん！ おめでとう。これからは忍の道を目指す者として、大いに励んで下さい。」

私が辺りを見渡している内に、些かすぎる気がする火影の挨拶の後、入学式は終わりを告げた。

参列していたヒアシ様を含む里の上忍数名が、火影へと挨拶している。その様子を横目に、私達は教室へと案内されることとなった。クラスは三十人一クラスで、男子二クラス、女子一クラスの計三クラスに分けられていた。女子のクラスは、『くノ一クラス』と呼ばび、カリキュラムが男子とは若干異なるらしい。というのは去年からここに通うネジの入れ知恵だ。

今日は入学初日と言うこともあり、教室では自己紹介が行われることになった。

教室は大学の講堂を彷彿とさせる作りで、教卓を一番低くし、階段状に机が並んでいる。特に席順などは決まっていならしく、生徒達は思い思いの位置に座っていた。

原作では、このくノ一クラスの中から順調に下忍になれたのは三人か……。結構狭き門なんだな、忍者つてのは。まあ、私も試験に落ちるつもりはないから、その場合は四人になるのかな？

「……姉様！ 姉様！」

ぼうつと思考に耽っていると、横でヒナタが私の服を引っ張り小声で呼んでいた。私は「ん？」と言う顔でヒナタを見る。

「姉様の番です……」

周りを見ると、全員の視線が私に向けられている。いつの間にか自己紹介の番が回って来ていたのだ。

「へあつ！ えーと、『枕ミソラ』。趣味は自宅での鍛錬。よろしく」慌てて立ち上がり、自己紹介した私に笑い声が向けられる。その中に「ふふっ、あの子ちっちゃーい」という声が聞こえた。……身長のこと、ほっというて欲しかった。気にしないようにしていたが、

私は全クラスで一番小さいみたいだ。

三歳のころからヒナタと身長差がつきだして、それでも「アカデミーに行けばきっと私よりも小さい人が！」という希望があった。しかし、その希望は見事に打ち砕かれていたのだ……。

私にも前世では小さい友人を弄って遊んでいた記憶があるが、今、会うことが出来たなら、全力で謝りたい。

……きつと、これから大きくなるんだ。溜息を吐き、席に座った。次はヒナタの番だ。

「『日向ヒナタ』です。好きなことは姉様との鍛錬です。父上の様に強く、母上の様に優しい立派な忍になりたいです」

私と違い、落ち着いた口調で言ったヒナタだが、拳はギュツと握られており、緊張の色が窺えた。

「頑張ったな、ヒナタ」

「……姉様のおかげで、少し緊張が緩んだから」

成程、私の痴態が報われたのであれば、良しとしよう。

それから残りの自己紹介を聞き、授業内容や担当教員の紹介などを聞いて、アカデミー初日は放課となった。

時間的にはまだ昼も回っていないが、本格的な授業は明日かららしい。解放された新入生たちは友達と話し込む者や、帰宅の準備を整える者など様々だ。

「ねえ、ちよつと」

配布された教科書や巻物を鞆に閉まっていると、不意に声を掛けられた。顔を向けると、そこには山中いのが立っていた。

「アンタ、私の店に来たことあるわよね？」

「去年のことなのに、よく覚えてるな」

「一度来たお客は、忘れないのがプロよ。それにアンタの綺麗な髪は印象的だったから。あの時は年下だと思ってたけど、同じ歳だったなんてね」

「どうせ、小さいよ」

「ふふっ、私はいの。よろしくね！」

「ああ、私はミソラ。こちらこそ」

いのは他にも挨拶したい人が居るからと、すぐにどこかへ歩いて行った。知り合い多いんだな。

取り敢えず原作の登場人物の一人と知り合いになれたことに満足し、屋敷に帰ることにした。

これから彼女も含め、原作の人物達と本格的に関わっていかなくてはならない。なるべく面倒事には関わりたいくないのだが、大丈夫だろうか？

……何事もないことを唯唯祈るだけだ。

12 自尊心と望まぬ遭遇（前書き）

2010・12・05 若干修正

12 自尊心と望まぬ遭遇

「おいっ」

ヒナタとアカデミーから帰ろうとしたところ、不意に誰かから呼び止められる。

……はあ、何でこんなことになるかなあ？

今日は二期制であるアカデミーの上期最後の日。

生徒達は成績表を受け取り、満足そうに喜ぶ者、肩を落とす者など、その表情は様々だ。だが、これからの長期休暇に、思いを巡らせているという点では皆共通のようで、教室内はどこかそわそわとした雰囲気で、落ち着きがなかった。

私も例に漏れず、明日からの予定を考えていた。もともと、私が練るのは今後の修行計画だが……。この世界で身を守るために始めた修行は、もはや趣味の領域になっていた。

電気は通っているものの、パソコンやゲームといったものは無く、娯楽の少ないこの世界では、他にやることがないのだ。また、中身が大人の私が、他の子供たちに混ざって遊ぶというのも抵抗があるというのも理由の一つだった。

忍者アカデミーは前世での学校とは違い、知識よりも、忍者としての資質を磨くことに重点を置いたものだった。学校というよりも訓練所と言った方が相応しいかもしれない。

ネジの言っていた通り、一年目の授業内容は忍者にとっての初歩の初歩であり、チャクラの練り方や、木の葉流体術の型など、私にとっては既に覚えたものばかりだったし、ヒナタにとっても全く問題としない内容だった。

生徒たちは、チャクラというものの存在を初めて知った者や、知っていても上手く練れぬ者、反対に、いのように忍者の家系に生まれた者は、余裕の表情を浮かべていたり、生徒達のレベルはバラバラのようだ。

目立ちたく無いとはいったものの、実力を隠すつもりは無かった。私の実力は既に日向家では周知の事実であり、今更隠した所で、逆に不信に思われるだけだろう。それに、日向家に住む者として、日向に恥をかかせるわけにもいくまい。

そんな私にとって盲点だったのは、くノークラスの課程には家庭科や美術などの課目があったこと。……前世でも私が最も苦手とした教科なのだ。

何でも、くノーとは、女性としての教養を身に付け、敵地での潜入任務を円滑に行わなくてはいけないらしい。また、将来的には家庭に入り、優秀な忍を生み育てる為でもある。

ちなみに、男子生徒の個別課目は、木の葉の地形を覚える為の野外探索だったりする。……かなり羨ましい。

アカデミーの成績は『体術』『忍術』『個人』『チーム』『戦術』の五つに分かれて評価されているが、座学や個別課目はすべて『個人』に含まれていた。

座学だけならば、前世での教育課程を終えている私が負けるはずはないけど、家庭科や美術を含めた私の『個人』の成績は九十一人中、五十五位という悲惨さ。

六歳の少年少女に負けたという現実、私のプライドを根こそぎ崩す結果だった。それ以外の科目はもちろん一位だったのだけど……。

そんな鬱々とした気分で、帰宅しようと教室を出て廊下を歩き始めたの所に掛けられた声。

発声者はうちはの少年、サスケだった。

私にとって、いい事は起きないであろう予感しかない。私はサスケの声を聞こえないふりをし、ヒナタの手を引いて、一旦止まっていた足を再び動かし始めた。

「おいっ、待て！ 枕ミソラ、俺と勝負しろ！」

勝負しろ……か、やっぱりね。悪い予感ってもんは当たるもんだな。

私としてはもちろん、冗談じゃないという気分である。こちららさつさと帰って、今日傷付いたプライドを癒すために、枕を濡らしたい気分なのだ。面倒事は御免だつていうのに……。

私は一つ溜息を吐き、事態に当たることにする。

「ヒナタ、先に帰ってな」

「え、でも……」

「心配無い、私もすぐ帰るから」

ヒナタの背を見送り、声のした方へと向き直る。

「で、何の用？」

「さつきも言っただろ！ 勝負しろ！」

「何で？」

「お前には関係無い！」

……いや、私には関係ないのに、勝負しろとか、意味が分からないのだけど。寧ろ関係ありだろうが。

まあ、察するに、「アカデミーで首席を取れなかったことで、親と合わす顔が無くって、首席だった私に勝つことで面目を保つ」という魂胆といったところか？

漫画でのサスケは確か、全科目一位だった筈。それならば問題は無かったのだが、私がいたことで、それは叶わなくなった。よってサスケのプライドも今日、傷付いてしまったって訳か……。

けれども私を恨むのは筋違いだろうよ、サスケ。

「んー、関係無いんなら帰らせてもらっ」

「待てっ！」

無視して立ち去ろうとすると、サスケは再び静止の声を上げ、今度は私の進路を塞ぐ。

「相手をするまで逃がさないってこと？」

「その通りだ！」

「……わかったよ」

言うが早いか私は印を結び影分身を作る。続いて本体の私は空漠の術を結び、気配を消す。そして私と影分身は同時に走り出した。こういった場合、相手はどういった反応をするかと言えば、気配のある方に無意識に目が向いてしまうといった具合だ。

気配を利用した誘導術である。熟練した忍者ならば、また別の選択肢があるのかもしれない、だが、サスケは所詮、六歳の少年なのだ。

サスケの注意が逸れた本体である私は、そのままサスケを素通りして脱兎の如く駆けて行き、影分身はそのままサスケへと向かわせる。

そしてサスケが影分身へと身構えた瞬間に影分身を消す。

「じゃねっ！」

既にサスケから離れた位置に居た本体の私は、空漠の術を解き、後ろ向きに手を振って走り去る。少し振り返った際に見えたサスケは、呆然とした様子だったが、そんなことは関係ない。

サスケ、延いては『うちは虐殺事件』には関わりたくない。

私とて、より良い未来のためならば、出来ることはしたいと思っている。だけど、今の私にそれを出来る力があるのだろうか？ しかも、虐殺を阻止した場合、うちは一族によるクーデターが起こるかもしれないのだ。もしそうなった場合の犠牲者の数は全く予測がつかない。それに『うちはイタチ』の【万華鏡写輪眼】と対峙した場合に勝てる気がしない。

どちらにせよ、犠牲者が出るのならば、関わらないことが一番だろう。知っていてもどうにも出来ないこともあるだろう。

これが私の考えだった。　　だけど、この胸の辺りに渦巻く暗くもややもやした気持ちは一体何なのだろう？

暫く走ると、ヒナタに追い付いた。

「おまたせ」

「姉様、大丈夫？　……顔色が悪いみたい」

「ん、大丈夫。ちょっと走ったから……心配無い」

さて、子供というものはその未熟さから、時として限度を知らぬものである。

私のアカデミー下期は初日から災難に見舞われた。目を合わせるなり「勝負しろ！」だ。

誰の声かなんて、聞かなくても判る。もちろん、そんなものは相手にしないに限る。……此方の気も知らないで。

しかし、この程度では少年は諦めなかった。来る日も来る日も飽きもせず、放課後に私を待ち伏せして、勝負を挑んで来るようになったのだ。これではヒナタと一緒に帰ることも儘ならない。全く持つて迷惑この上ない。

正直、逃亡しようと思えば、楽に逃亡することが出来る。空漠の術を絡めれば手段など幾通りもあるのだから。

既に毎日の行事となった追いかけっこに辟易しながらも、これに何とか意味を見出すべく、サスケを利用し、こうすればどういう反応をするか？　この作戦の弱点は？　等々、今後の糧とするために逃亡の実験をすることにした。

サスケとて、うちの血統書つきであり、馬鹿ではない。同じ手は通じないだろう。私は隠れ、走り、潜り、飛び……といった風にあらゆる技術を使い、その都度サスケを撒いた。ここまできたら、一回くらい勝負に付き合ってやれば良いのかもしれないが、私も意

固地になっていた。

そんな日々が三週間ほど続いて迎えた今日。私は校舎の前で、いつものようにサスケと対峙している。

「今日こそは捕まえてやる」

いつの間にか、鬼ごっこ宜しくといった具合に、サスケの目的は私を捕まえることへとすり替わってしまったているようだ。

さて、今日はどんな風に撒こうか……。

「サスケ」

突如、対峙する私達の丁度真ん中に男が現れた。

男といっても、私達よりは年上ではあるが、まだ少年と呼ぶに相応しい背格好だ。呼ばれたサスケは口を開けて固まっている。そして男は此方に顔を向けた。その顔を確認して、私もサスケと同様の反応を見せてしまう。

「君が枕ミソラちゃんだね。サスケが迷惑をかけたようだ。すまなかったね」

突然の人物の登場に返す言葉が無く呆然としてみると、先にサスケが気を取り直したようだ。

「兄さん！　なんで！？　任務は！？」

「今日の任務は終わったよ。お前が毎日の様にミソラちゃんの話を話すからね、もしかしたら迷惑を掛けているんじゃないかと思って来てみれば、案の定だ」

「迷惑なんて！　そんなつもり……」

サスケがたどたどしく言い訳を始めるも男はそれを遮る。

「お前は先に家に帰ってなさい」

「……はい」

さすがのサスケも彼には頭が上がらないようだった。すごすごと背を向け、歩いて行く。

サスケの背を見送ってから、男は再び私に向き直る。

「紹介が遅れたね、俺はうちはイタチ。サスケの兄だ。ミソラちゃん、ちよっといいかな？」

「……はい」

ここ最近で一番遭遇したくなかった人物。その人に遭遇してしまったという事態に当惑するも、もはや会ってしまったものはどうしようもないと、諦めて返事をした。

私達は、校舎前広場の脇の方にあつたベンチへと移動し、座る。

「サスケから話は聞いてる。改めて謝るよ。うちのサスケが迷惑を掛けてすまなかった」

「いえ、貴方が謝ることではないです。それに、確かに強引ではありましたが、私も色々と訓練になりましたから」

「ははっ、いいようにあしらわれていた訳だ。どおりで執着する筈だ。アイツはプライドが高いからな」

どうやら私のやったことは逆効果だったみたいだ。サスケの性格を考えてみればすぐ解りそうなことなのに、馬鹿だったな。

「サスケの奴「アカデミー」にいい好きない奴が居て、そいつを倒したいから修業をつけて欲しい」だなんて俺に話していたよ」

「いい好きない奴……ですか」

サスケの奴、私のことをそんな風に見てたのか。……逆恨みも甚だしい。事件の前から、性格はそんなに変わらないんだな。

「形はどうあれ、アイツが俺以外の人間に興味を持つことは珍しい。それだけ君のことを認めているということだ」

「はぁ、それは喜ばしいことですが……それで、私は明日からはまた普通に帰れるんでしょうか？」

「ああ、サスケには俺の方から注意しておく。ただ、出来ればアイツのことは嫌いにならずに、たまには相手をしてやって欲しいんだ。もちろん毎日だなんて言わないし、アイツにも言い聞かせておく……」

「……お願い出来るかな？」

イタチは屈託無い笑顔で私に問いかけてきた。こんな顔をする人があの事件を起こすなんて、とても想像つかない。

「それくらいならば……」

気付けば私は頷き、了承してしまっていた。その弟を思う兄の笑顔は卑怯だよ……。この人は幻術など使わなくとも、人を動かす力があるのかもしれない。

次の日、サスケは私に「すまなかった」と、無愛想ながらも謝って来た。昨日、イタチに注意されたのだろう。

私はそれを了承し、話し合って、「週一回、捕まえることが出来たら相手をする」という奇妙な契約を結ぶ関係となった。

サスケは渋々といった感じだ。私としては、もちろん捕まるつもりなど微塵も無いのだけれど……。

……少し、面倒臭いことになったな。

なし崩し的に、うちはと関わることになってしまい、これからの生活に一抹の不安を覚えた。

13 流れる日々と暗転の時（前書き）

2010・12・05 若干修正

13 流れる日々と暗転の時

アカデミー入学してから二年が経ち。クラス替えの無いくの一クラスはすっかり馴染んでいた。

最初こそ、飛び抜けた成績の私に対し、周囲は腫れ物に触るような扱いだった。そんな中、山中いのとヒナタは普通に接してくれ、自然と周りもそれに釣られるように私と付き合いだした。

正直、いのがここまで良い子とは思ってなかった。彼女が居なければ私は孤立していたかもしれない。何事も実際に付き合ってみなくては分からないものだ。

彼女は非常に面倒見が良く、クラスでも中心的存在だ。入学当初、暗くて孤立気味だった、主要人物の一人『春野サクラ』も既にリボンを巻き彼女とよく遊んでいるのを見かける。……まだこの頃は、サスケを巡っての対立はしてないらしい。

そんな経緯もあり、いのには感謝しているのだが、一つ納得できないことがある。私の扱いだ。

クラスの引き戸を開け、教室に入ると彼女はそれに気付き、近寄って来る。そしていつもの様に、私は彼女の洗礼を受ける。

「おはよう、ミソラ！」

言うなりその手を顔一つ分下にある私の頭の上へ乗せた。

いのの私に対する態度、それは私がヒナタに対するような……つまりは、妹を可愛がるようなものだった。

幾ら成績が良かろうと、彼女の眼に映る私は『小さい女の子』らしい。朝の挨拶では、必ず私の頭を撫でながら「おはよう」と言うのだ。

そのくすぐったさや、暖かさが気持ち良くない訳ではないが、私は彼女よりも遥かに精神年齢が上だ。プライドがそれを許さない。そもそも、それを抜きにしたって同じ年齢なのだから、私はこの

不当な扱いに、断固として異議を唱えた……が、それも昔の話、幾ら「年下扱いするな」と言っても、彼女には全く効果は無かったため、いつまでも不毛な抗議を続ける訳にもいかず、諦めるしかなかった。

「うー」

最近では、唸り、睨みながら手を払いのけることが、唯一の抵抗手段となっていた。私の横にはヒナタが居るが、ヒナタは微笑ましい表情で此方を眺めている……この裏切り者め。

「ヒナタもおはよう！」

「おはよう、いのちゃん」

ヒナタというのが挨拶を交わし終えた所で丁度先生が入って来たので、私達は席に着いた。

アカデミーの授業は相変わらずだ。ヒナタは真面目にやっているが、私にとって、復習にしかならない授業はつまらない。実技や課外授業ならばまだしも、座学の時間は暇で仕方が無い。この時間、私は新術の構想に耽っていた。

この数年で、火遁、風遁、雷遁に加え、土遁と水遁も扱えるようになり、木の葉に伝わる術ならば大分覚えることが出来た。

もちろん門外不出である禁術や秘伝忍術を除いてではあるが……。このことは日向家や三代目火影、後は木ノ葉病院の渡里イクモぐらいしか知らない。

『五遁使い』 その存在は異端であり、血継限界同様に、争いの種になりかねない為である。

そんなこんなで、多くの術を覚えた私は、次のステップに、新術の開発を目指しているという訳である。

しかし、それは簡単なことではない。

一般的にこの世界での忍術とは、巻物などの書物の他に、親子へ、師から弟子へといった具合に代々伝えられていくものであり、

その過程で少しずつ変化を得て、数を増やして来たのだ。

特に秘伝忍術などは、世代を重ねて作り上げてきた一族の歴史そのものと言ってもいい。だからこそ、忍術は忍者にとって財産と同じであり、時には個人の命よりも価値の高いものとして扱われる。

一代で新たな術を創る者 それは総じて天才と呼ばれる者達だ。また、新術開発にはリスクが付き物だ。

たとえ新術を発動できる状態まで持つて行くことが出来ても、それが期待した効果を得られるとは限らないし、術者自身に思わぬ負担が掛かる事がある。

ナルトが仙術を覚える前の【風遁・螺旋手裏剣】などがいい例だ。あれは強力であるが故に発動場所の近くに居る、術者自身の細胞すら破壊する術だった。

更に言えば、術の暴走の危険性。誌面上でNARUTO読んでいた私は、【影分身の術】を覚えた際に、そのまま【多重影分身の術】も使えるんじゃないのかと考えていたが、それは安易な考えだった。もちろん【多重影分身の術】は【影分身の術】の発展形であるが、正しく発動しなければ、術が暴走し思わぬ結果となる可能性がある。例えば、予定よりも多く分身してしまったり、チャクラの分割に失敗し、残ったチャクラが少なすぎて命に係わる危険すらあるのだ。

……結局は巻物で覚えることが一番安全と言う訳だ。

そういったことに注意しつつ、私は新術へと考えを巡らせていった。

そう考えながら、紙にメモを執っていると、隣の教室から「どつ」と笑い声が聞こえた。

壁の向こうから聞こえてくる声からすると、どうやらクラス替えをして早々、ナルトが何かしでかしたらしい……

「イタチさんが暗部の分隊長に？」

「ああ、流石は兄さんだ……」

放課後、対峙した状態で、私はサスケにイタチのことを聞いていた。

サスケとの関係も、変わりなく続いている。初めて勝負を持ちかけてきてから一年半、今は普通に会話をする程度には、打ち解けることが出来ていた。

せっかくなので、サスケにはこうして、うちの近況などを聞くことにしている。

前世でNARUTOは好きな漫画の一つではあったが、何が、何時、どのタイミングで起こるかまで把握している訳ではない。

現に『うちは虐殺』はアカデミーに入っただけの出来事だと思っていたのに、入学してから早二年である。こうやって情報を集めなければ、いざという時に対応できない。

そのサスケから重要な情報をもたらされた。イタチの暗部分隊長への昇格。

「そっか、しかし暗部の情報をそんな簡単に洩らしていいのか？」

「お前が誰かに言わない限り、これ以上広まることは無い。それに、知ったところでどうしようもないだろ」

「まあ、確かに」

私はもう一つ確認する。

「そういえばサスケ、お前、【豪火球の術】を覚えたか？」

「何でそれを!？」

何故私がそれを知っているのか分からない、といった様子で驚いている。どうやら使えるみたいだな。

「いや、聞いてみただけだ。うちは一族は火遁が得意だから、お前なら使えるかと思って」

「フン、この年で豪火球を使えるのは俺ぐらいだろう」

どうだ！　と言わんばかりの自信満々の顔でサスケが答えた。

「はは……」

……私は遙か昔に覚えたということは、言わない方がよさそうだ。
うん、サスケの前で火遁は控えよう。

だけどこれで、そろそろ事件が起きるだろうことが確信できた。
私の記憶によれば、アレはサスケが豪火球を使えるようになった
後に起きたこと。その間には、そこまでの時間経過は無かった筈。

しかし、事件が起きたとして、私がどうするということでも無い。
サスケには悪いが、私には関係ない話だ。

君子危うきに近寄らず。その考えは決して間違っではない。そ
う自分に言い聞かせるように心の中で戒める。そうしなければ、こ
の胸の内の正体不明の暗く渦巻く気持ちに呑み込まれてしまいそう
になるのだ。

「……おい、そろそろ行くぞ！」

苛立ったサスケの声が響いた。思案している内に、少ばかり時
間が経っていたようだ。

「あ、ああ。どこからでもどうぞ」

その言葉を聞いたサスケは一直線に距離を詰めてきた。

そして、今日も鬼ごっこが始まる。ルールは簡単、私とサスケの
帰路の分かれ道までに私を捕まえることが出来ればサスケの勝ちと
なり、今度は正面からの勝負をするという約束だ。

鬼ごっことはいえ、それは一般的なものからは逸脱していて、忍
者の逃走と追跡の訓練と言った方が正しい。未だに私は捕まったこ
とが無いが……。

「じゃ、ばいばい」

「チッ、次こそは」

予定通りサスケから逃げ切って、私達はそれぞれの屋敷へと帰る。

サスケの話から数日、今宵は満月。煌々と闇を照らす青白光の輝

きは、観る者の心を惹き付ける。それは前世でも今世でも変わらない。

ただ、この世界に浮かんでいるあの月の正体が、尾獣の集合体『十尾』であると知れば、あの月に思いを馳せるのは、どうにもぞつとしない話だ。

「姉様、ご飯の準備が出来たみたい」

屋根の上に座ってぼうつとしていると、軒下からヒナタの声が聞こえた。

「わあっ、綺麗な月！　いつもこんなに明るければ、夜も怖くないのになあ……」

ヒナタがぼやいている内に、屋根からヒナタの横へと飛び降りる。

「ヒナタはまだ夜が怖いんだ？　それじゃハナビに笑われるよ？」

「姉様のイジワル……」

まあ、一度誘拐されかけてるから、分からないでもないんだけどね。まあ、私は死にかけたんだけど……。

私も明るい夜は動きやすいし、嫌いじゃない。……そう、動きやすいのだ。

そこまで考えると、脳裏に一つの光景がフラッシュバックの様に浮かんだ。

それは記憶から抜け落ちていた漫画の一コマ。

電柱の上に佇む忍者の姿、その忍者はうちはイタチ。そして背後には……そう、満月だ。

「今日だ……」

気付けば私は、震える声で呟いていた。

小さな声だった筈だが、ヒナタはそれに気付いた様で振り返り、私の顔を窺う。

「え？　姉様？　どうしたの？　すごい青い顔」

それに対し、私は表情を隠すように月明かりで顔を陰らせる。

「ん、大丈夫。気にするな……ヒナタ、先に行つてな。少し休んでから行くから」

「本当に大丈夫？」

「心配性だな。早く行って、ヒヨリ様にもそう言っておいて」
「……分かりました」

ヒナタが家に入るのを見やり、私はこの動揺した気持ちを整えようと深呼吸する。しかし落ち着かず、動悸が激しい。まるで自分の心臓に耳を当てているみたいだ。

何故、私がこんなに動揺する必要がある？

『うちは虐殺事件』には関わらないと決めた筈。私には関係ない話じゃないか。

ならば何故、うちはの情報をサスケから聞き出していた？

何時、事件が起きるか、興味があっただけに過ぎない！

私は、興味本位で人を見殺しにするのか？

違う！ 私は……！

自問自答を繰り返し、今、やっと胸の内にあった暗く渦巻くもやもやの正体が解った。……解ってしまった。

『罪悪感』

気付いた瞬間に、それはたちまち私を支配する。

そして突き上げる様な衝動に、私は考えるより早く、屋敷の塀を越えて駆け出していた。

向かう先はうちは一族の集落のある木の葉の里の一画だ。

陽が落ちてから、まだそんなに時間は経っていない。間に合うかもしれない！

これを見逃せば私は一生、この罪悪感を背負って行かなければならない……。

私は最低だ……。

結局、私の行動基準は自分のため。罪から逃れただけだ。

……私にとって、知っていることが罪。人が死ぬことを知っていて見逃すことが罪となる。

一生その罪を背負って生きるか、命の危機にさらされるか。どちらがいいかなんて、考えられない。

行って何が出来るかもわからない。

今はただ走るだけ。

「お願いだ……間に合え！」

14 運命への抵抗と告白（前書き）

残酷描写あります。苦手な方はご注意ください。

14 運命への抵抗と告白

凄惨。

一言で言い表すならば、そんな言葉が相応しいだろうか。

夜の帳が下りて、まだ間も無いというのに、軒を連ねる家々からは灯りが漏れることは無く、ただ空からの光だけが、私と、私以外を照らすだけだった。

視界に映るのは光と闇、そして赤のコントラスト。それは脳裏に焼き付き、一生忘れることは許されないだろう……。

う……酷い！　こんなことが……！

うちは一族の住む里の一画、そこに辿り着いた私は、その光景に言葉を無くし、数秒の間、茫然と立ち尽くしていた。

不意に風によって運ばれてきた血の臭い。それによって、私は急な嘔吐感に襲われ、地面に跪き、胃の内容物を吐き出す。同時に、飛んでいた意識が舞い戻り、冷水を浴びせられたかのように、急激に身体が冷える感覚に陥る。

気付けば全身から冷や汗が吹き出していた。

ふらつく足取りで血の池へ踏み入り、転がっているモノの一つを確認する。その際に着物や手がヌルリと血で汚れるが、気にする余裕など無い。

そして予想通り、それには生を示す反応は感じられなかった。同じような状態のモノが見える範囲だけで十数、通りの所々に横たわっており、その全てが既に事切れていることが見て取れる。家屋の中のモノも含めればかなりの数となるだろう。

唯一の救いは、その殆どが胸、または首への一太刀によって絶命しているらしく、余分な外傷が少なそうなことか……余程の腕が無ければなし得ない業だろう。

だが、結果は変わらない。

私は間に合わなかったのだ。

見殺したという事実。それが刃のように胸へ突き刺さり、抉られるような痛みとなる。

もつと……もつと早くに手を打っておけば、何とか出来たかもしれないのに！ それなのに私は、イタチとの接触もあったというのに、何もしなかった。

自分の保身の為に、何人もの命を見捨てたんだ！

考えのどこにまだ、『紙上の出来事』という思いがあったことも否定できない。現実感の無いフィクションだと……。

だが、目の前に広がる光景は紛れもない現実、決して紙の上に描かれた物では無い。泣き、笑い、怒り、この世界で確かに生きてきたであろう人間の死。

助けられる可能性があったとするならば、それはこの決められた運命の外に居る、私の存在だけだったのに……。

「ぎゃあああああ！」

静寂に包まれていた集落に、突然、空を切り裂くかのような叫び声が響き渡った。

とてもまともな発声とは思えないが、確かに聞き覚えのある声

この声は、サスケ！？

落ちていたクナイを一つ拾う。そして言うことを聞かない震える足で何とか立ち上がり、声の聞こえた方へと急ぐ。

【空漠の術】を使い、気配を探ると感じ取れたのは二つの気配。

程無くして、私は気配の元へ辿り着く。そこは集落の中でも一際大きい屋敷、うちは族長の家の前だった。

倒れているサスケと、それに背を向け、その場を去ろうとする男。空漠の術を掛けた私には気付いていないようだ。

男の姿が目に入った瞬間に私の中の抑え込んでいた感情が溢れだした。

怒り。

討たれる原因を作り出したうちにはに対する怒り。虐殺の命を下した里に対する怒り。それを実行した男への怒り。そして、何もなかった自分に対する怒り。

それらが胸の内ですらと渦巻いて、私を突き動かした。亡くなつた者たちの仇打ちか、それとも罪の意識への償いか、何故、そうしたのかわからない。

結局は自己保身、こうすることで自分が罪悪感から救われると思つたのかもしれない。

クナイを握り締め、男の死角へと回り込み、不意打ちを仕掛ける。だが、後数歩というところで男は私に気づき、背に挿した忍刀を瞬時に抜き取り応戦してきた。

クナイと忍刀がぶつかり、辺りに甲高い金属音が響き渡る。

空漠の術が破られたことに動揺し、私は一旦距離を置くために後方へ飛び退く。……男からの追い討ちは無い。

五メートル程の距離を置いて相対し、私は相手の名を叫んだ。

「イタチ！」

表情までは月明かりの影になつて見えないが、イタチは此方を確認し、困つたような口調で疑問を投げかけてきた。

「……枕ミソラ、《亡霊》の忘れ形見か……。成程、サスケが敵わない訳だ。しかし、どうして君がここに？」

「アンタを止めに来た……。けれど、間に合わなかった……」

私の声は無意識に震えた小さい声だったが、イタチには届いたようだ。

そして、私が何かを知っていることを悟つたようで、再び私に問う。

「君は何を知つて　！？」

私はイタチの言葉を最後まで聞かぬうちに印を結ぶ。

【火遁・豪火球の術】

放たれた火球は激しく膨張し、そのままイタチを飲み込むかと思

えたが、既のところと同じく豪火球の術を発動され、炎同士が轟音を上げてぶつかった。

先制して相手より余裕のある私は、炎が相殺しきる前、視界が炎に覆われている内に【影分身の術】の印を結び、本体の方は【空漠の術】を続けて発動、足の裏でチャクラを弾き上空へ飛び上がり、影分身は炎が消えると同時に、前方へ突撃する。

写輪眼対策で、イタチの目を見ることが出来ない為、イタチが何処を見ているかはわからない。影分身に気が向いていることを願う。相手の目を見て戦えない。このことが勝負の世界において、かなり難しいことだということを思い知った。

写輪眼を見てしまえば、その瞳術で、あっという間に幻術へと引き摺り込まれてしまう。

ましてや万華鏡写輪眼による【月詠】ともなれば、一瞬を永遠とも思える時間に引き延ばされ、想像を絶する苦痛を受けることとなるだろう。一瞬の幻術など、掛かってしまえば回避など不可能だ。

イタチに迫った影分身は身を屈め、水面蹴りを放つ。

だけど、写輪眼により完全に動作を読まれていたらしく、その攻撃は、後方に飛び退かれて簡単に避けられた。

そこへクナイを投げ、イタチが右手の忍刀でそれを弾いたところで、身体を捻らせながら飛び込み、浴びせ蹴りを繰り出す。

しかし蹴りは左手一本で巧みに受け流され、手から着地した私は、再び距離を取るためチャクラで地面を弾く。

一連の攻撃で、イタチに傷一つ付けることさえ叶わない。だが、これは予想できたこと。作戦の内だ。

【桜花衝】

気配を消していた本体の私は上空からチャクラを腕へと集め、影分身と入れ替わるようにイタチへと襲いかかる。

「!?」

私は驚いた。イタチが此方に顔を向けていたのだ。

何故？ 気配は消していた筈！

予測していなかった私は、思わず彼の目を見ることとなってしまう。

上を向いたことによって月に照らされた顔。私を見るその瞳には中心に小さな瞳孔があり、その周りを等間隔に勾玉の様な模様が三つ、円上に並んでいた。写輪眼だ。

急に身体が強張り、全身の感覚が奪われた。

金縛り！？

チャクラが乱れ、腕に集めたチャクラを留めることが出来ず霧散する。そのままイタチに、力を失った手を掴まれ、体勢を崩された私は、落下の勢いそのまま背中から地面に叩き付けられた。

「っがつはっ！」

背中からの激痛と、肺から空気が抜け、息の出来ない苦しさに顔を歪める。脳からの命令で本能的に潤み、滲む視界の先に、イタチが見下ろしている様子が窺えた。チャクラが乱れたことが、影分身にも影響したようで、術が解ける。

「話を聞かなそうだから、少々手荒になってしまったが、許せ。正直、驚いている。君がこれ程のものだったとは……。術が完璧ならば、やられていたかもしれない……」

傷一つ負わず、万華鏡写輪眼も温存したままでよく言う。

今の私で敵う相手ではないとは思っていなかったが、ここまで差があるとは……。

そして、彼の言葉に疑問を感じ、未だ整わない息で問う。

「術が……完璧じゃ……ない？」

「幾ら気配を消そうと、殺気を向けられれば気付く。もっとも、ある程度近付かなければわからなかったが……」

私の殺気が術の効果を阻害したらしい。……感情に身を任せて、後先考えずに行動した結果がこれだ。

自分の術の不完全さにも気付かず、戦闘をするなんて、愚かにも程がある。自分自身に嫌気がさす。

何とか起き上がるうとするが、身体は完全に硬直していて、意思

の通りに動いてくれない。

どうしようもなく、私は抵抗を諦めた。

「本題に入ろう。……君は何を知っている？」

幸い、身体が動かないことで、感情の昂りは抑えることが出来た。その頭で必死に考える。

感情に任せて動いた結果、私の行動は不自然なものとなってしまう。今更「偶々通りかかっただけ」だなんて言っても、冗談にすらならない。

うちは一族のクーデター、里の命令、その全てを知っていると答えれば、当然、何故知っているのか？ という話になる。その場合、私の正体を話さざる得ない。かといって、イタチ相手に適当なことを言って、上手く誤魔化せるか？

逡巡していると、イタチから、私の心を見透かしたかのような注意が飛ぶ。

「言っておくが、嘘を吐こうが無駄だ。この目はそれすら見抜く」成程、人は嘘を吐くときにはどこかしらに変化が生じるものと聞いたことがある。写輪眼の洞察力はそれを見逃さないという訳だ。訓練を受けた者ならともかく、私の嘘なんてすぐに見透かされるだろう。

いよいよもって為す術なしということか 私は腹を決める。

「……全て。全て知っている。うちは一族のクーデター、里の命令、アンタの万華鏡写輪眼のことも」

そこまで言っていると、流石にイタチも驚いたらしい。

「君は、一体……!？」

「ここから先は信じるか、信じないかはアンタの自由だ。小娘の戯言だと思ってもらって構わない」

「……話せ」

イタチは眉間に皺を作り、続きを促した。

「私は元々、この世界とは違う世界の人間だ。その世界でも戦

争はあつたが、それは遠い国の話であり、私の住む国はいたつて平和だった。それでも犯罪つてのは起きる。ある日私は偶々遭遇してしまった強盗事件に巻き込まれ、彼らの手によって殺された筈だった。けれど次に目を覚ました時、私は『枕ミソラ』として、この世界に居た。どうやら前世で死んだ私の魂が、この世界で瀕死の状態だった『枕ミソラ』の身体に乗り移つたらしい。自分でもよくわからないが、私はそう解釈している」

私は仰向けの状態で話していたが、気付けば金縛りの術は解けている。既に抵抗する意思が無いことをイタチが悟つたみたいだ。そして痛む身体に鞭打って起き上がり、言葉を続ける。

「……つ、何故、アンタ達のことを知っているのか、それはこの世界が、前世で私が読んでいた、『本』の内容と酷似しているからだ。忍者、木ノ葉、九尾、それにうちは虐殺、その全てが『本』に描かれたものと同じ。そしてこれから起こることも恐らくは……」

そこで一旦話を区切る。

イタチは眉を寄せたままで口を開いた。

「……正直、俄かには信じがたいな。しかし嘘を吐いている様子も無い。本当……なのか？」

「言つただろう。信じるか信じないかは自由だつて」

「それが本当ならば、君の言う『本』によつて全て、俺達の運命は決まっているということか？ そんなこと……」

「だけどその中でこの世界に転生した私は、本の中には存在しない異端な存在。私だけが未来を変えられる」

「だから、俺を止めにここへ現れた……か」

信じる、信じないはともかく、理解はしてくれたいらしい。

「初めは関わる気などは無かった。私だつて自分の命は惜しい。……けど、いざ、今日がその日だと知った時、居ても立つても居られなかった。そして結果はアンタが良くわかつてるだろ……間に合わなかった。動くのが遅すぎたんだ。惨状を見た私は頭が真っ白になつて」

イタチはしゃがみ、私と目線を合わせて手を伸ばして来た。

不味い！ 私は反射的に目を瞑り、身体をビクリと震わせる。

が、次の瞬間、私の頭の上には乗せられたのは手。恐る恐る目を開くと、イタチは哀しそうに笑っていた。その瞳は写輪眼が解除されている。

「大丈夫、うちは以外の者には手を出さない。……辛い思いをさせたようだな」

……この人は私が精神的には八歳ではないと、本当にわかっているんだろうか？

「他に、方法は無かったのか？」

そう問うと、イタチは立ち上がり、表情を殺す。

「里のためには、こうするしかなかった。もし、クーデターが起きてしまえば、その犠牲者は、俺が殺した人数の比ではなくなるだろう。それに、三代目は何度もうちはに交渉を持ちかけていた。しかし、うちは側が出した要求が五代目火影を一族から出せというもの。当然、三代目とて、それを認める訳にはいかない。うちはと言われれば必ず出てくるのは、かつて里に反旗を翻した『うちはマダラ』の名だ。そのイメージがある以上、里人が納得する訳が無い。」

「だけど！ クーデターには無関係な人も居た筈だ！」

「いや、クーデターのことはサスケの様な子供以外、皆知っていた。そしてそれに異を唱えるものも居なかった。直接関わらずとも、つまりそれは一族の総意。……写輪眼というものは絶大な力を秘めている。そういった者達を生かしておいたとしても、いずれまた、マダラや俺の父のように、力に溺れ、争いの火種を起こす者が出てくるだろう」

「そんな……」

「仮にだ……仮にクーデターを止めることが出来たとしても、クーデターを起こそうとしたうちには、さらなる制約が掛けられ、それがまた反発を誘う……結局は時間の問題だっただろう」

無表情のまま淡々とイタチは自分の考えを述べていく。それは感

情を捨て、自分自身に言い聞かせる様でもあった。

そして最後に一言付け加える。

「これが、『本』に定められた運命……か」

イタチとて、様々な可能性を模索したのかもしれない……いや、しなかった訳が無い。

彼は友を殺し、そして親を殺した。どれほどの苦渋の選択だったのか、私には想像も出来ない。そしてそれが全て決められていた出来事だなんて知らされた今、何を考えているのかも……。

私にはイタチが平静を保っていること自体、信じられない。

「サスケは」

私が言葉を紡ぐと口を開いた瞬間、イタチの目の写輪眼が発動した。

それと同時に、私の意識が闇に落ちていく。

「イタチ、遅……ぞ。何を……いる？ そい……は……だ？」

「サスケを頼む」

最後にイタチに話しかける誰かの声と、イタチのギリギリ聞き取れる音量の囁きが聞こえ、記憶は途切れた。

15 決意の日と家族会議

どのくらい気を失っていたんだろう……視線の先には四角いタイル張りの天井が映っている。

……流石に三度目ともなると、落ち着いているもんだな。

……外は雨……か。

雨が壁や地を叩き付ける音がノイズのように部屋に響いている。ベットの中で身を振り、顔を向けた先にあった時計は昼過ぎを指している。結構な時間眠っていたみたいだ。

この時間ならヒナタはアカデミーだろうし、ヒアシ様は事件の処理に追われているのかもしれない。ヒヨリ様とハナビはご飯でも食べているんだろうか？

部屋には私しか居ないため、誰かに尋ねることも出来ない。

……まあ、昨日の出来事を整理するには丁度いいな。

昨日、私はうちは一族虐殺を止められなかった。そしてイタチの瞳術によって眠らされて、ここに居る。

最後に聞こえた声の男は恐らく『うちはマダラ』だ。イタチが上手く誤魔化してくれたのだろうか？ もしも会話の内容を聞かれていたらとんでもないことになる……。

うちはの力が争いと呼ぶ イタチの話を聞き、昨日の私の行動は正しいことだったのか、わからなくなってしまった。

今回、虐殺を防ぎ、クーデターも阻止できる手立てがあったとしても、力を渴望するうちは一族と、一族を抑圧する里の政策が無くならない限り、その衝突はいずれ必ず起こる。早いか遅いかの話だった。

だからといって、今回のような解決方法しか無かっただなんて思いたくない。

……自分の考えが甘いことぐらい分かっている。現実味の無い理想論だつて。だけど、認めたくはない。

犠牲の上に平和があるのは前世でだって同じだ。けれどそれはあくまで歴史という知識として知っていた程度であり、対する感情は薄いものだった。

暢気なものだ。何にも考えずに当たり前に平和を享受できると思っていた。今になって考えてみれば、愚かだと思ふ反面、羨ましくもある。

犠牲の上の平和を身近に感じる事となった今回の出来事は、私にとっては衝撃的だった。こんなことがあつて、のうのうと生きていけるほど、非情な人間にはなれない。忍者としては失格……なんだろうな。

だけでもう、こんな思いをするのは二度と御免だ。

幸い私には原作の知識がある。そしてそれを変えることが出来るのは私だけだ。

ならば、変えるしかないだろう……これから先、傷付く者が少しでも減らせるように。

この罪悪感へのせめてもの償いとして、この世界での生き方を改めよう。

私に何が出来るかは分からないけど、出来る限りのことはしたい。力が欲しい、単純な戦闘能力としてだけではなく、運命を変えることのできる賢さや立場が。

そうやって暫くイタチの言葉を反芻するように徐々に思い出しながら、自分自身の身の振り方を考えていき、イタチの最後の言葉に辿り着く。

サスケを頼む……イタチはどういう意図で私にそう言ったのか……。

そもそも、イタチは何で私を殺さなかったのか？

虐殺事件の真実を知る私は、彼にとっても、里にとっても不都合

だろう。

一族以外の者には手を出さない……本当にそれだけの理由で私は生かされたのだろうか？

まさか私に、サスケが万華鏡写輪眼を開眼するための犠牲になるよう仕向けるつもりか？

いや、イタチが私の話を信じたというなら、私が万華鏡写輪眼の開眼条件を知っていることも分かつているはずだ。

その私に、わざわざ『死』と同じ意味を持つ言葉を掛けるとは思えない。

だけど、私がサスケに何もかも喋ってしまったえば、イタチの計画サスケに復讐心を植え付けて、強く生きる目的を与え、いずれ自分を殺す存在へと仕立て上げる、というものも狂ってしまう。

……喋ってしまったえばといったが、この事件の真実を里で流布させるようなことはもちろん、サスケに話すことはするつもりは無い。私が真実を知っていること、延いては過去未来を知っていることが里にバレれば、口止めや、利用するという考えが出ない筈が無い。三代目はともかく、木の葉の裏を仕切る『志村ダンゾウ』などは確実に動くだろう。

それに、サスケは身も心も未熟だ。今は感情的な問題もあるし、まだ話すべきではない。話すならば、もっと成長し、此方の話を理解できるようになってからだ。

私は喋らない……イタチはそこまで分かっていたのか？

まさか、な。

ただ、あの眼にはどこまで見えているのか……私には見当もつかない。

何にせよ、イタチには再び会わなくてはならない。私が最後に伝えようとした言葉を伝えなければ。

あの時『うちはマダラ』の邪魔が入り話せなかったこと　イタチとサスケ、兄弟の結末とサスケのその後の選択についてを。

もっとも、ここまでの話は、イタチが里の上役たちに私のことを

どう報告しているかで変わるが、恐らくイタチは私の正体は報告してないのだろう。

真意はともかく、サスケを託すような事を言った後に、私の身を里に売るとは考えにくい。

ある程度考えがまると、身体を仰向けに向け直し、天井を仰ぎ力を抜く。

グウウ……

雨の音で掻き消されはしたものの、自分の腹の中で間抜けな音が鳴ったのが分かる。

う、そういえば昨日は晩御飯無しかったから、丸一日何も食べてないんだ。それに時間的に昼の院内食も食いつばくれたらしい。しかし、あの惨劇の後だってのに、身体は正直なもんだな。

んー、一旦気にしてしまつと、どんどん腹が減つて来た……。

腹が減つては戦は出来ぬと、意外に図太い自分の身体をベットから起こし、這い出る。

「……何か、食べ物」

力が入らないし、フラフラする。ああやばい、ホント、何か食べないと死にそうだ……。

私は部屋を出て食べ物を探すことにした。

廊下に出ると、院内は俄かに騒がしかった。看護師を見つけたので、聞いてみると、何でも患者の一人が居なくなったらしい。

うーん、たぶんサスケのことかな。確か、うちの区画に行つてる筈。まあ、特に心配は無いだろう。それより……

私が話しかけるより早く、看護師は「忙しいから」と、申し訳なさそうに立ち去ろうとする。

「あ、ちよつと、食べ物……」

張りの無い声は届かなかったのか、看護師はパタパタと去つていった。

くっ、仕方ない、知り合いを探すべきか……。

木ノ葉病院で知り合いと言えば、ミナか、イクモだ。彼の診察室に行けば会えるかもしれない。

そう思い、フラフラと診察室を目指す。さつきから引つ切り無しに腹が鳴っている。

「き、休診日……だと？……ありえん……」

診察室の入り口には札が掛けられていて、そこには無情な言葉が書かれていた。

仕方なく来た道を戻る。

ああ、拙い、意識が朦朧として来た……。

ん？ この匂いは……？

廊下を歩いていると、甘いフルーツの臭いがした。誘われるように病室に入ると、そこには私と同じ白い髪の間が居た。

どこかで見たような気もするが、今はそんなことより、

「……たべ………もの……」

食べ物を見つけたはいいけど、私は病室の入り口の辺りで、力尽き、倒れこんでしまった。

うう、もう、一步も歩けない。

「お、おい、大丈夫か！？」

「ほんと、助かりました。有難う御座います」

「いや、吃驚しちゃったでしょ。ふらりと部屋に入って来たかと思ったら、いきなり倒れちゃって」

「すみません、昨日から何も食べてなくて……」

「ま！ お腹が減ってただけで良かった」

私の前には、さつきまではフルーツの入っていた空のバスケットとリンゴを剥いた皿。最後の一切れを手に取り、さつき自己紹介したばかりの、目の前の人物に頭を下げた。

「しつつかし、噂の《亡霊の忘れ形見》に会えるとはねエ」

「はぐつ……もしかもしや……ふわはの？」

噂の？ と、リングを頬張りながら放った言葉に関わらず彼は意味を理解したようだ。

「《木の葉の亡霊》の『枕クウヤ』は戦時中の勇名の一つだし、その子供である君の話もたまに聞くからな。今回のことも……いや、思ったより元氣そうなのね」

情報はもう流れてるんだな。

元氣……という訳ではない……正直、後悔で一杯だ。

でも、これからのことを決めたんだし、いつまでも落ち込んでいく訳にはいかない。ここで持ち前の切り替えの良さを活かさなければ何処で活かすんだ？

……今は空元氣でもいいから。

私はリングをゴクンと飲み込んでから、笑う。

「助かったこの身を、大事にしないとって思ってた」

「強い子だ」

そう言われて彼にポンツと頭を手を乗せられる。……またこの扱いか。

辟易しつつ、私は聞きたかったことを聞くことにする。

「……子供扱いしないでください。ところで、カカシさんはどうして病院に？」

言つと、マスクで鼻まで覆い、額当てを片目を隠すように付けた露出の少ない顔ではあるが、それがばつの悪そうなものになったことが分かる。

「んー、任務中に少し無茶しちゃってね……チャクラ使い過ぎちゃったというか、ははっ」

この人は、この頃から入院癖があつたのか……。でも、もう動けそうに感じただけ？

「《天才忍者》がこんな時にゆっくり入院してていいんですか？」

「ははっ、君、厳しいね……。ま！ 事件の処理は俺達と違う部隊

「がやつちやったみたいだから大丈夫でしょ」

「へえ、そうなんだ。まあ、暗部も『根』だとか『くの一部隊』とか色々あるみたいだからな。」

「……あ、そういえば『根』が写輪眼の回収をしたのかもしれないな。」

「一瞬、嫌な想像をしてしまうが、すぐに振り払う。」

「そうですか」

「相槌を打ち、ふと時計を見ると、自分の病室を出てから、三時間以上経っていることに気付く……いつの間にこんなに経ったんだろ。勝手に出てきたし、そろそろ戻った方がいいかもしれない。」

「そろそろ、自分の病室に戻ります。食べ物、本当に有難う御座いました」

「ああ、気にしないでいい。お大事に」

「カカシさんも」

「お辞儀してから、カカシの病室から出た。」

「まさか、ここでカカシと会うなんてな……吃驚したけど、良い人だったな。食べ物くれたし。」

「自分の病室に戻り暫くすると、ヒアシ様、ヒヨリ様、ヒナタ、ハナビと日向家総出で見舞いに来た。」

「ヒナタとハナビは私を見るなり駆け寄って来る。ヒナタの目は少し潤んでいたが、涙を流すことは無かった。誘拐事件の時から
の成長を実感するなあ。」

「ハナビはというと、私の服の袖をギュッと掴んでいる。」

「私はそれぞれ撫で、気持ちを引き締めた。」

「そこへヒアシ様とヒヨリ様が近付いてきて、ヒアシ様が問いかけ
てくる。」

「何故あんなところにいた？」

当然の疑問だろう。ヒアシ様の表情は険しく、怒っているのかもしれない……覚悟はしていたけど……。

嘘は付きたくない、誘拐事件の時とは重みが違う。けど、日向を私の事情に巻き込むなんて出来ない。

「……うちはの方の空が暗くて、嫌な空気を感じたから、行ってみたら……」

実際にはうちの集落までの空気の流れを感知することは無理だ……。せいぜい半径で百メートル程度が限界。ヒアシ様は【空漠の術】の効果は知っているが、感知の範囲などは詳しく知らない。

「何故黙って出ていった？」

ヒアシ様の白い双眸は私を睨みつけていて、震えあがりそうになるほど怖い。

「……すぐに帰るつもりでしたので」

張りつめた空気が病室を支配し、誰も口を開こうとはしない。

そんな中、私は一言告げることしかできない。

「ごめんなさい」

心配を掛けて。

嘘を吐いて。

真実を話せなくて。

「……はぁ……助かったから良かったものの……もうよい」

あ……れ？ 気付かず、私の頬に熱いものが流れた。

「あらあら、ミソラも怖かったのよね」

ヒヨリ様が私の頭を胸に沈める。うう……この展開は久しぶりだ。暖かく柔らかい。

この涙が何の涙なのか分からない。怖かったのか、哀しいのか、私なんかを受け入れてくれて嬉しいのか……分からない。でも、今は素直に甘えよう。

私はこの幸せを、暖かさを壊そうとする者を許さない。

……戦争なんて起こさせない。

「そういえば、今日病院内で木ノ葉病院にお化けが出たって聞いたわよ？」

私が落ち着き雑談をしていると、ヒヨリ様がいきなりこんな話題を振って来た。私の横ではヒナタがビクリと震えた。

「お化け？」

ハナビは興味津々みたいだ。

「ええ、それが真つ白な髪で、血走った眼で「たべもの……たべもの……」って呟きながらフラフラと廊下を歩いてたって聞いたわ」「ひっ！」

ヒナタは完全にこの手の話は苦手であり、遂には私のベットへと顔を埋めた。

「き、きつと、人を食べるお化けなのですよ！」

ハナビ……三歳で考えることが過激なのがちよつと心配だ。

「ふふつ、ミソラも白い髪だけど、間違われないように気をつけなさいね」

どこか親近感を感じるお化けだな。なんでだろ？

「ははっ、大丈夫ですよ」

ん？ 黙ってたヒアシ様の顔色が悪いけど……まさか、ね。

16 恋心と嫉妬心

「で、どうなの？ ミソラ！」

「そうよ！ どういう関係なのよ！」

そう問い詰めてくるのは山中いのと春野サクラ。

今日の授業が全て終わり、「少し話があるから」と校舎裏に呼び出され、私に向けられた第一声が先の言葉だ。

既に陽は傾きかけており、照りつける光は朱を帯び始めている。

後数刻もしない内に、その朱色は様々な様式の建築物が並ぶ木ノ葉の里全体を染め上げて、幻想的な風景を創り上げることだろう。

私がその光景を初めて木ノ葉の高台 顔岩の崖の上から眺めた時は言葉を失ったものだ。

「ミソラ？ 聞いているの？」

ちよつと現実逃避してしまっていたようだ。今居るのは朱色から切り取られた校舎の影だ。

この二人が揃っているとなると、何となく察しはつくのだけど、一度はぐらかしてみる。

「『どうなの？』って何が？」

私がそう言うと、いのは少し顔が赤くなり、そして声を大にしながら私に迫って来た。

「『何が？』って、サスケ君のことよ！ サスケ君の！ ミソラがサスケ君と一緒に居るのを皆が目撃してるの！」

ですよねー。

いのの後ろに立つサクラも、そうだそうだと言わんばかりに、首を縦に振っている。

うちは一族虐殺事件より暫く経つが、サスケは必要以上に他人と関わりを持たず、塞ぎ込んでしまっている。……あんな過去を背負ったことを考えれば、仕方が無いのかもしれない。だけどそれは彼の

事情。

無口で陰気……サスケの態度は同じ教室の男子には評判が悪いようだ。逆に、何故か女子にはその様子が、無口でクールなカッコイイー匹狼といった風に見えるらしく、元々の顔立ちの良さや成績も相俟って、最近人気が鰻登りである。

事情を知らない、または他人事だと思っている人間の反応なんて勝手だな。

そんな中で、事件後の私とサスケの関係は、意外にも事件前と大差が無かった。事件に巻き込まれたということになっている私に、少しシンパシーでも感じているのかもしれない。

変わった点と言えば、サスケとの追いかけて修行へと変わったことぐらいか。

この世界に深く係わることを決めたからには、今の内でも出来ることはやらなければならぬ。サスケに強くなつてもらうための選択だ。こんなことで、いずれ接触してくる大蛇丸に敵うとは思えないが、少しでも抵抗出来る程になれば、その時になっての選択肢は増えるはずだ。

それに、サスケには大蛇丸に頼らずとも、純粹に強くなつて欲しいと思う。イタチへの復習の為というのは変わらないのだが……。

周囲を寄せ付けない雰囲気、サスケと、普通に会話を交わす者が居れば嫌でも目立つ。

こういったサスケとの関係が、他の女子には余り面白い物では無いらしい。元男である私にはその気が無くとも、この身体は女なのだから周囲にはそう映ってしまうようだ。

そして今、そういった女子の筆頭である、いのとサクラの二人に詰め寄られているという訳だ。

「……はあ、サスケとは何でも無いよ」

辟易としながら答えると、いのは額と額がくっ付きそうなくらいに顔を近づけてくる。

「本当に？」

近付いた顔に一瞬ドキリとしてしまい、一步後ずさってしまったが、すぐに気を取り直す。

「本当だ。何ならサスケに聞いてみればいいだろ？」

「うっ、それはちよつと……」

今度はいのの方が狼狽えている。

「私はただサスケの修行に付き合ってるだけで、他意は無いから安心しな」

「……そ、そうよね。ミソラにはまだ恋愛なんて早いわ！」

「それって、どういうい　っ」

「分かったわ、ミソラ！ 疑ってごめんね。良かった、アカデミー首席と次席がそんな関係だったら私達には敵わないところだったわ」私の抗議を聞く前にそう言っ、いのは私の頭をクシャクシャツと撫でてサクラに振り返る。

「分かったでしよ、サクラ。ミソラがサスケ君を誑かすなんて、そんなことする訳無いじゃない」

……誑かすて、私は悪女か！

「でもお……まあ、いいわ。ミソラにもいものにも負けない。サスケ君は渡さないから！」

サクラは私の説明に余り納得出来ない様子だ。だからって私にまでライバル宣言されても困るんだが……。それにサスケは誰の物でも無いと思うぞ。

「あらサクラ、オツムしか取り柄の無いアナタが、私に勝てると思って？」

サクラの言葉に対し、いのはニヤリと挑発的な笑みで応えた。

「言っただわねー！　いのブタ！」

サクラはその挑発に簡単に乗って来た。

「本当のことでしょ？　デコデコ！」

「何ですって！」

「何よー！」

互いに睨み合い、二人の間に火花が散っているのを幻視出来る。
私の存在は忘れ去られているようだ。

えっと、これは、私は帰ってもいいんだろうか……？ それとも、
やっぱり止めた方がいいんだろうか？

「えー、まあ、二人とも落ち着いたらどうかな？」

恐る恐る声を発したが

「ミソラは黙ってて！」

「ミソラは黙ってて！」

同時に此方に振り向かれ、同時に怒鳴られた。

「はい……」

何とまあ、様式化された反応というか、お約束な展開なこと。
ただ、される側としては結構ショックだな。やっぱり止めようなん
て思わなければ良かった。私は何も悪いこととして無いのに……。

はあ、既に私とサスケの関係の話から逸脱してるし、もう何を言
っても無駄だろう。

二人はほっというて帰ろう……。

「ヒナタ、待たせてごめん！」

二人の対処の間、校舎脇のベンチに待たせていたヒナタに駆け寄
り、謝るが、ヒナタはある一点を眺めたまま意識此処に在らずとい
った様子で、私の声は届かなかったようだ。すっかり朱に染まった
陽によって薄められているが、その頬が若干上気していることに気
づく。

ヒナタの視線の先を見てみると、そこには案山子の幾つか並んだ
手裏剣術の練習場に居残って、練習しているナルトの姿があった。

……どうやら此方でも春が訪れていたようだ。

今のヒナタは決して落ちこぼれなんかじゃないから、原作での“
同じ落ちこぼれと言われるナルトに共感を覚え、けれど自分とは違

う、彼の挫けない性格に惹かれる”という展開では無いけど、ヒナタの本質的な性格は原作とほとんど同じだからな、やっぱりナルトの性格には惹かれるんだろうか？

んー、義姉としては応援してやりたいんだけど、ちょっと微妙な気分だよな。今まで「姉様、姉様」と私の後ろばかり付いて来た可愛い義妹を取られた喪失感と言えればいいか……。娘を嫁に出す親つて言うのはこんな気分なんだろう……。ヒナタよ、アレはまあ、悪い奴では無いんだけど、どうしようも無いお馬鹿なんだぞ、それにサクラのことが好きだし、それでもいいのか？

そんなことを考えつつ、このままでは埒が明かないのでヒナタの肩を叩く。

「ヒナタ？ 何見てんの？」

「ひっ、ひゃああああっあああ！」

突然方を叩かれて驚愕の奇声を発したヒナタは、鍛錬の時にも見せたことの無い機敏な動きで土煙を上げながら私から後退りで遠ざかり、十メートルほど向こうの木陰に隠れた。

「ね、姉様？ び、びっくりしたあ……」

いや、私も吃驚したし……。

陰からちょこんと見せた顔は沸騰しそうなくらいに真っ赤に染まっている。……ナルトの奴、こんな可愛い義妹を泣かせるような事があればただじゃおかないからな。

私を確認したヒナタは怖ず怖ずと近寄って来た。

「で、何を見ていたんだ？ ヒナタ」

「え……えっと、その……何も……」

「ふーん、そっ、じゃ、帰ろっか」

「え？ ……うん、わかった」

ヒナタは少し名残惜しそうな表情で私と並んで歩きだした。

そんな表情をされてしまうと、何だか悔しくなってしまうのではないか。

私のヒナタが……私のヒナタが……

ナルトオ……

17 演習と実力差

「ナルトオ……」

そう静かに言い放ちながら一歩踏み込み、低い体勢から脚、腰、腕と全身を使って振り上げた拳は、「ミソラ見つけたってばよ！」と言い放ち一直線に突っ込んで来たナルトの顎へと吸い込まれた。

「ぶごつぶべらっしあー！」

ナルトは奇妙な言語を口から漏らしながら、芸術的とも賞せる綺麗な弧を描いた後、真つ逆さまに頭から地面にぶつかる。時間

差で身体がドシャツと嫌な音を立ててうつ伏せに倒れた。

ちよつと、やり過ぎただろうか？ 受身も取れずにかなり痛そうだったけど……。ま、ナルトなら大丈夫だろう。

これは断じて折檻している訳ではない、アカデミーの授業の一環である。

今のはナルトのタフさを懸念しての一撃だ。私怨で手加減を忘れるなんてそんなことある訳無いじゃん、ハハハ。

『スリーマンセルによる実践合同演習』

それが今日の課題内容だ。

アカデミーも最終学年になり、来年になればいよいよ原作本編が始まることとなる。

授業内容も、最初の頃はチャクラのコントロールや体術の型など基礎の基礎ともいえるものだったが、最近は実践色の強いものが増えてきている。今日の様な実際の戦闘を伴うこともある訓練もあり、生徒達には怪我が絶えない。しかし、痛みに耐えることも忍には重要な教育なのだ。いざという時に泣き事を言っている暇は無いのだから。

それでも生死を懸ける忍者の訓練としては甘いものだと思う。死の危険の無い訓練では、実際の任務の際に感じるであろう恐怖心の

克服は出来ない。まあ、それは下忍になってから学ぶ物なのかもしれないが……。

私はナルトを仰向けに転がし、腕に巻かれた腕章を外す。この腕章を集めることが今回の演習の目的だ。

演習は、アカデミー程近くにある四キロ四方をフェンスで覆った、森を想定して作られた演習場で行われており、現在その中に三十組の班が詰め込まれている。開始より二時間後、より多くの腕章を手に入れた班が勝者と言う訳だ。

腕章を手に入れば良い為、打ちのめす必要は実は無いんだけどな……。

「ちよつと、やり過ぎなんじゃないのか……？」

背後の木陰から面倒臭そうに現れた奈良シカマルが話しかけていた。彼はスリーマンセルの仲間だ。

自分でも少しそう思っていたところに更にシカマルに窘められると、流石に罪悪感を覚える。

「いきなり現れて不意打ちかと思いきや、堂々と宣言して一直線に突っ込んで来たナルトが悪い」

事実、カウンター気味に攻撃が当たったから、思いの外威力が増した。ナルトの自業自得でもある……等。

「そりゃ、そうだが……はあ、ま、いいか」

「他に気配が無いからナルトの単独先行だろうな。連携なんてあつたもんじゃない」

「……あちらさんに同情するぜ」

そうやって話していると、ナルトから呻き声が漏れた。

……あんだけまともに食らつといて、もう気が付くなんて本当にこいつはタフだな……。

「うう、痛てててっ」

仰向けの状態から上体を起き上がらせ、キョロキョロ視線を泳がせた後、私の手に握られた腕章を見て、続いて自分の腕を確認して

いる。

そして私の手の腕章を指差して叫んだ。

「あー！ 俺の腕章！ 返せつてばよ！ このちんちくり
っ！？」

木の覆い茂る静かな演習場に、爆弾が爆発でもしたかのような凄まじい轟音が響き渡った。

私の手はナルトの座るすぐ横の地面に突き刺さり、その場所を中心として地面が砕け直径三メートルほどのクレーターが出来ている。「ナニカ イッタ カナ？ …… カナ？」

私の微笑みに、ナルトが何も言わずにダラダラと冷や汗らしいものを流しながらブンブンと首を振っているのを確認し、私は姿勢を正してパンパンツと服を叩き、今し方付いた土埃を払う。

全く、余計なチャクラを使ってしまったな。

「…… お前つて、チョウジの奴と気が合いそうだな」

同じく汗を流すシカマルの冷たい視線とばやきを無視して、私は次の行動を考える。

しかしそれは少し離れた場所から聞こえた声に中断させられた。

「東の方角から二人！」

今まで周囲の様子を窺っていたもう一人の仲間である男子生徒が近寄つて来る敵を察知したみたいだ。

「ナルトの仲間か？」

「それは分からないが、今の音を聞いて来たのは確実だな」

私の問いにシカマルが両の掌を上向きにして肩の辺りで開き、ウンザリだといった様子で答えた。

「ナルト！？」

木に縄で縛り付けられ、布を噛ませられて唸っているナルトを見

つけやって来たのは、一束の前髪を前に垂らし、残りを髪を一本のポニーテールに纏めたブロンドの髪の少女と、少し癖のある髪を逆立たせ、目をサングラスで隠している少年。山中いのと油女シノだった。

「うわ、班全員が原作登場人物なんて濃いメンバーだな。」

「私達は木の上で気配を消しながら様子を窺う。ちなみに【空漠の術】は使用していない。あの術は即席の班での使用には向かないことが最近分かった。仲間が私に気付けなければ連携も取れない。この術に対する理解があればいいが、アカデミー生にそれを求めることは酷だろう。シカマルならば出来そうだけど……。まあ尤も、アカデミーレベルでは遮蔽物に身を潜める【隠れ蓑の術】で十分通用するし、使う必要もないのだが。」

「まったく、馬鹿ね！ 一人で突っ走るからこうなるのよ！」

「早く解いてここから離れた方がいい……なぜなら、敵がまだ近くに潜んでいるかもしれないからだ」

「そうね、シノは縄をお願い」

「そうやっていのはナルトの口に噛まされた布を、シノはグルグルに巻かれた縄を解く。」

「悪かったつてばよ！」

「漸く喋ることのできるようになったナルトは両手を顔の前に合わせて開口一番に謝った。」

「それに対していのは驚いた様で、目を大きく開く。」

「ナルトが謝った？ 頭でもぶつけたのかしら？」

「ナルトラしくない……」

「普段からは考えられないナルトの行動に、シノも訝しんでいるようだ。」

「しかし、二人が疑問を感じた頃には既に遅かった。ナルトの合わせられた手はそのまま印を結び術が発動する。」

【影真似の術】

「なっ！？」

【影真似の術】とは、自らの影を伸縮自在に操作し、相手の影に重ね合わせて行動の自由を奪うもの。それどころか自分の行動を相手に反映させるといって、使い方によっては無類の利便性を誇る術だ。だがもちろん万能と言う訳ではない。影の操作にはチャクラを多く使うし、発動中は術の成功まで印を組んだままとなり、他の攻撃は出来ない。相対する者にとっては、影にさえ気をつけておけば良いということだ。影の早さも術者の力量に比例するだろうが、躲せないという程のものでもない。

頭を使い、戦略に上手く組み込んで使用できる者でないと、幾ら強力な能力でも“豚に真珠”という訳だ。

今、ナルトの影は二人の影に重なっており、術は成功。位置取りも良かったので、影の形を変える必要もなく、チャクラの消費も抑えられているだろう。

相手の虚を突く発言、自然に印へと持っていく行動も含め、流石だな。

まあ、畏の可能性を考えずに近付いた二人も間抜けなだけ……。この頃の実力はまだまだだ。

二人が身体が利かなくなったことに気付いた直後、ボフンツと術を解除した時特有のチャクラの霧散する音と煙を立ててナルト もとい、ナルトだった人物が姿を現した。

「シカマルっ!？」

いのは驚くが、シノは黙りこくったままだ。

「はあ、めんどくせえ……、おい、もういいぞ!」

それじゃあまあ、呼ばれたので行きますか。

「はい、二人ともお疲れさん」

瞬身の術で二人の背後に移動し、すぐに腕章を外す。

シカマルはそれを確認してから影真似を解き、溜息を吐きながら首を捻り、自分の肩を揉み始めた。

もう一人の仲間である男子生徒は、簀巻きにして芋虫の様になったナルトをズルズルと引き摺りながら木陰から姿を現した。

ナルトの頭が地面に線を残し、所々に張り巡らされている木の根っこにぶつかる度に「ぐえっ」「げえっ」と聞こえ、流石に不憫に思う。

「ミソラの班だったのね……」

いのは自由になった身体で私を一瞥した後に肩を落とし、落胆した様子で言った。

そんないのに対してシノは相変わらずの無表情で自分達の状況を確認した。

「班員全滅で失格というルール、俺達は終わったようだな……」

「冷静に言わないでよ、あーあ、ナルトの所為ね」

二人の会話に口を挟むのもどうかと思ったが、散々なナルトがい加減に可哀相になり、少しフォローしておくことにする。

「まあ、確かに一人で特攻したナルトは論外だけど、畏の可能性に気付かずに近付いたいの達も迂闊だったんじゃないのか？」

「ミソラ……そうね、次からは気をつけるわ」

いのは自分にも非があることを認め反省してくれた。悪いことは悪いと認める。彼女のこういったところは好感の持てる要素の一つだ。もし、サクラに同じことを言えば、食って掛かって来るかもな……。

「時間は残り半分くらいね、私達は失格だし、演習場の外に出てるわ。私達の分まで頑張って頂戴」

いの達はそう言い残して演習場の出入り口へと歩いて行った……ナルトを簀巻きのまま引き摺って。

「わかった」

と返し、幾層にもたんこぶを作っているナルトを見て、両手を胸の前で合わせた。

ここから出入り口まで少なくとも一キロはある……御愁傷様。

18 羊と狼

演習終了まで後一時間か……手に入れたのはナルト達の腕章三つだけ。ちよつと寂しいかな。

今の班は私単独ならともかく、班としての機動力はそれ程高くない。それに、使用を控えている【空漠の術】以外は感知系の能力が無いため、移動しながら敵を探すという手段は得策ではないだろう。私達は敢えて気配を消さずに三角を描く様に背を向けて並び、三人がそれぞれの方向に目を注ぐ。向かって来た者を迎え撃つという作戦だ。

しかし先程からたまに気配を感じるものの、此方に攻撃を加えてくる様子は無い。それどころか、私達が追いかけられる程の距離まで近付く者すら皆無だ。これはどういうことだろう？

「なあ、気配消してないってのに、誰もこっちに来ないんだけど？」
視界の先に茂る草や木の揺れを注視しながら他の二人に問いかけると、視線を感じたので其方に顔を向ける。

その視界の中に呆れた顔で私を見るシカマルが映った。

「そりやなあ……」

「僕も、敵だとしたらミソラのいる班には手を出したくないからなあ……」

言いにくそうにしているシカマルに続いてもう一人の男子生徒が言った。

同じくの一クラスの生徒ならともかく、男子生徒の原作登場人物以外の名前はあまり知らない。任務ならばそんなことは在ってはならないのだが、今は演習なので、まあいいだろう。紹介も無く演習が始まり、タイミングを逃したってこともあるんだけど……。向こうは私のことを知っている様で、少し申し訳なく思うが……。

「ええつと、それは私が避けられていると……？」

「誰だつて負け戦は挑まんさ、ナルトみたいな奴は別だが」

シカマルの言葉でやつと誰も襲ってこない理由が分かった。つまり、他の班は私がいる班に対する勝算が無い為、襲ってこないということがある。

ナルトは……恐らく何も考えずに挑んで来たんだろうな。その後の二人に関して言えば、此方の方が早く気付けたこととナルトを捕らえたおかげで、罠を張るというより確実な作戦に切り替えていたから例外だ。

……しかし正直そこまでは考えて無かったな。見ず知らずの人間ならともかく、今まで机を並べた仲だ。此方の実力が周知されているならそういうこともあるか……。

班決めは先生達が演習の都度成績の隔たりが無いように決めているが、それでも私はバランスを崩してしまっているみたいだ。

考えてみれば、確かに今日みたいな演習ならば特に私を狙う必要も無い。陣地戦や殲滅戦なら話は別だが、今回に限って言えば“触らぬ神に祟りなし”だ。私達を無視して勝算の高い他の班を狙えば良い。

無視とか……なんだか、軽くいじめみたいな状況に寂しいやら哀しいやら、微妙な気分。

ん？ ということは、今の今まで取って来た気配を消さないで敵を誘い込む作戦は完全に裏目に出ていて、シカマル達はそれに気付いていたと？

「んー、気付いてたんなら何で黙ってたんだ？」

「俺にとつちやその方が楽だからな」

「僕は演習の最後まで残れば良いかなあって」

こいつ等……。

然も当然そうに答える二人に思わず脱力してしまう。当然の如く首位を狙っていた自分が何だか馬鹿馬鹿しいじゃないか……。

もう一人の男子生徒まで消極的な奴だとは思わなかったが、そうだった、シカマルはそんな奴だった。極度の面倒臭がり。やる時はやる男だから嫌いにはなれないんだけど……。今回はあまり期待で

きないみたいだ。

「はあ……ま、良いんだけど。たぶん、シカマルの言う“ナルトみたいな奴”が手土産を持って来てくれると思うから」

「誰だそりゃ？」

二人は不思議そうな表情をしていたが、答えてもどうせ嫌な顔をするだけだろうし、やる気の無い二人に対する意趣返しのも思ひ込め、無視して話を切り上げることにする。

「取り敢えず、それまではこのままの作戦を維持しよう」

彼らは私が答えなかったことに腑に落ちない様子だったが、私のだんまりを決め込んで周囲の警戒をしていると、やがて諦めて彼らも警戒に戻った。

「避けるっ！」

視界の右端に急に飛び込む様な気配を感じ取った直後、不意に危険を感じ、叫んでその場から飛び退いた。すぐに振り返って見れば、茂みから飛んで来た複数の火弾がさっきまで私達の立っていた場所に着弾し、土煙を巻き上げて弾け飛び、周辺の草を焼いている。

……良かった、他の二人も何とか避けることが出来たみたいだな。
【火遁・鳳仙火の術】、この術を使える奴は私を除くアカデミー生の中には一人しかいない。

「出て来い、ミソラ！」

どうやら“ナルトみたいな奴”　サスケの御到着らしい。

私は飛び伏せた状態で火弾の飛んで来た方向に視線を移すと、サスケが臨戦態勢で構えて辺りを窺っていた。

一人……か？　他の仲間はどうした？

考えてても仕方が無いな。立ち上がり、注意深く周りに気を払いながらサスケの元へ向かうことにする。

「はいはい。つつか、いきなり火遁とか……手加減しろよ、これは

演習だぞ」

まさか火遁を同級生に向けてくるとは思っていなかったため、不意打ちされた感じになってしまった。当たらなければどうということとは無いが……。

サスケの正面までゆっくり歩きながら言い、足を止める。火弾が着弾した周囲の草にはまだ火が燐っており、私がその火に足で土を掛け始めると、サスケが言い返してきた。

「フン、手加減して勝てるとは思ってないし、お前以外には態と外すようにした。分断出来ればいい」

おい……つまり、私には当てるつもりだったと。

まあ、それは置いといて、言われてみればシカマル達が戻って来ない……。

周囲から自然の物ではない木々の葉を揺らす音が聞こえる……そのことでサスケ達の作戦に察しがついた。

成程、最初の素早い特攻の火遁は私達をバラバラに避けさせるためで、私達を取り囲むように待機していたであろうサスケの班の残り二人がそれぞれ、私の班の二人に追撃を加えて分断したという具合らしい。

私達の知覚範囲の外から私達を確認できたということは感知系持ちが居るのかもしれない。

まんまと作戦通りにやられたということか……だけど、

「随分と賭けに出た作戦だな。一対一で勝てる自信でも？」

「さあな……」

サスケは嬉々とした様子で口の端を吊り上げた。

うちの一件以来、時々サスケの修行に付き合う様になって、幾度かの手合わせもしたことはあるが、それは体術のみであり、本気でやり合うことは無い。木の葉では身内忍者同士の本気での手合わせは特例を除き、御法度だからだ。まあ、私達はまだ忍者でもないし、真剣勝負を申し込んでくるサスケをのりくらりと躲わしていただけなんだが……。しかし、そのツケだろうが、サスケは演習の

都度、私に突っ掛かるようになっていた。実戦演習ではそういつたことがある程度黙認されている部分があるからだ。油断しなければ私が負けることはまず無いんだけどな。

しかし何だろう？　今日は何時にも増して自信満々だな。何か秘策でもあるのか？

注意は怠らないに越したことは無いが、残り時間はもう余り無い。闘って確かめるしかないだろう。

きつとこいつのことだ、首位を狙う為にいくつかの班を襲ってから最後にここに来たに違いない。恐らくそれを奪えば私達が首位になれる筈だ。卑怯と言われそうなり方で少し自己嫌悪してしまうけど、周りが寄ってこないんだから仕方が無いだろう。

サスケも大人しく残り時間を過ごせばいいものの、よっぽど私と闘いたいらしい……全く、難儀な性格だことで。

「術の速さと射程とコントロールは随分上達したもんだけど、それだけじゃ勝てないぞ……っ！」

拳を軽く握り、サスケに向かって走り出すと、それに反応したサスケも私に向かって走り出した。

19 写輪眼と亡霊

サスケとの戦闘は予想通り私の攻撃をサスケが何とか捌いているという状態で続き、既に有効打も何発か与えた。

時折反撃の素振りを見せるが如何せん遅い。すぐに気付き、潰す。……さっきから体術ばかり、自信満々の態度の裏に何か秘策があるのかとも思っただけど、考え過ぎだったか。

このままなら、決着まではそう長く掛からないだろう。サスケは既に息が上がり始めている。

まあ、こんなものか……。

サスケはあの事件の後から着実に力を付けて来ている。

私が時々修行に付き合うこともあり、アカデミーでは教えてもらえない木登りや水面歩行などの『業』も習得し綿密なチャクラコントロールが可能になったし、今は他のアカデミー生に比べ、体術、忍術共に群を抜いて高い水準を誇っている。

元々才能に恵まれているということもあるのだろうけど、その成長は目を見張るものがあつた。

しかし、だ。……私とて赤ん坊の頃からチャクラのコントロールを覚え、朝から晩まで鍛錬に明け暮れて来た身だ。その時間と内容はサスケの比ではないと自負できる。

周りは私のことを天才だと言うが、意識が大人という特殊な生い立ちの所為でそう見えるだけで、実際はそうではない。今のこの實力は前世での知識とそのお陰でできた時間を利用し、学ぶことのできたこの世界での新たな知識。子供の吸収力の良い頭のおかげもあるだろうが、毎日の弛まぬ努力で手に入れたものあることは確かだ。だからこそ、その積み上げて来た物には揺るぎ無い自信がある。サスケにはまだまだ負けない。

ましてや私の体術はあの日向で鍛えたものだ。掠るだけで損害を

負う柔拳のような脅威も無く、遅く単調なサスケの体術は私に届くことは無い。

一方的な攻撃の後、私の後ろ回し蹴りを両腕で防いだサスケは、しかしその威力を殺しきれずに後ろへ飛んだ。

「くっ、流石にきついかな……」

空中で受け身を取って着地し、呟いた。そして肩で息をしながらも印を結び始める。

私はその様子を確認した後、続いて印を結ぶ。

サスケが印を結び終わった直後、彼の身長の一・二倍程はあろうかという熱く滾らせた火球が口から吐き出され、猛烈な勢いで私へと迫って来た。サスケ御自慢の【火遁・豪火球の術】だ。しかしその炎が私を飲み込むことは無い。

【水遁・水乱波の術】

サスケが印を完成させたコンマ数秒後、炎が身を焼く直前に私は印を完成させ、喉の辺り一旦溜めていた練ったチャクラを一気に吐き出した。

吐き出されたチャクラは水の性質変化を見せ、大量の水がうねりを上げて炎とぶつかり、たちまち激しい音を立てながら蒸気が噴出して辺りを包む、そして炎の勢いと熱を流水の中へと飲み込んでいき、そのままサスケの姿も覆い隠していく。

「消火完了……ってね!」

水が引いた頃には視界を遮っていた蒸気も晴れ始め、一帯が水浸しになっていることが確認できた。

うえっ……豪火球の熱が残っているのか、空気が湿り、夏の雨上がりのようなムツとした不快感が肌に纏わりつく……。

息をするのも躊躇ってしまう程に空気が重く気持ち悪い。

そして蒸気が完全に晴れ渡った時、予想外の光景を目撃した。

「ハア……ハア……」

びしょ濡れになりながらも両の手を膝に突き、肩は大きく上下に揺らして息をしており、濡れて垂れた髪が俯いた顔を隠していて此方から表情を窺うことは出来ないが、その姿は明らかに満身創痕と言つに相応しい様相。……だが、そこには確かにサスケが二本の足で立っていた。

まさか立っているとはな……今のはまともだった筈だ。これには流石に吃驚だ。

同時に何故か嬉しいという感情も湧いてきて、思わず笑みがこぼれてしまう。

……つて、これじゃ大蛇丸みたいじゃないか！ 私は変態じゃないぞ！

そんな心の葛藤をしていると、私の笑みに釣られたかのようにサスケの髪の間隙からわずかに見える口角もわずかに上がったような気がした。

そしてふらりと倒れそうになりながらもゆっくりと助走を始め、徐々にギアを上げる様に速くなり、最後に足でチャクラを弾いて一直線に飛び込んできた。

「無駄だ！」

私は迎え撃つために正面を向いたまま腰を落として構える。

私の顔を狙って飛んで来た右拳を身体の内軸をずらすことで左に躲かし、カウンターの左掌底で鳩尾を打つ……筈だったが、それをサスケに左手で横へ弾かれた。

！ 私の速さについて来た！？

サスケは弾いた反動で身を翻して裏拳を放ってくる、私はすぐに身を引いたが、それは頬を掠めた。

つつ！ 熱っ！

仕切り直す為に一旦飛び退いて距離を離す。同時に印を結ぶ。

飛び退いた際に頬から伝うものを感じ、印を終えてから手で拭いてみれば、やはり血が出ていた。

女の子の顔に傷を付けるなんて！ とも思ってたが避け切れなかつ

た私が悪いと自重する。

「写輪眼……まさかもう開眼してるとはね。洞察眼一つでここまで動きが見違えるんなんで、ほんと、恐ろしい眼だな……」

乱れた髪の間に見えるサスケの瞳の色は赤く、勾玉の文様が一つ浮かび上がっている。それはまだ未熟ではあるけど、サスケがうちは一族の血継限界【写輪眼】の使い手として開眼したということを示している。

……漫画よりも成長が早いから、もしかしたらという予測は出来ていたことだが……。

「長くは持たん……。次で決める」

「成程ね。まだ制御しきれてないみたいだな。だから勿体ぶっていた訳か。……まあ、写輪眼を開眼できたことは褒めてあげよう。だから一つ、私も面白い物を見せてやるよ」

というのは建前だ。一対一だし、【空漠の術】を駆使しても倒す自信はあるんだが、写輪眼相手にここ数年がかりで開発したこの新術が通用するのか試したかった。

試したい術とは先程サスケから離れた時に発動させた術だ。効果があるかは次に交錯した時に分かる。

それと試したい術はもう一つ。

掌を上に向けて真っ直ぐ腕を突き出し、揃えた指を二回ほど曲げて挑発。

それを合図にサスケは再び私に向かって走り出す。その間に私はまた印を組む。

サスケは最後の力を振り絞るように地面を踏み貫き勢い良く私に殴りかかり、その拳は私の顔面を捕らえた……かに見えたが、拳は空を切った。サスケの見るそこには私の姿は無い。

「なっ!？」

印を組み終わった私は集中力を高め、もう一つの新術を発動した。サスケは何かに気付き仰け反る様に身を引くと、その直後に頭の動きについてこれずに残った髪の毛が何かに因って不自然に舞い上

がる。

躲わしたサスケが少しだけ安堵の表情を見せたかと思った瞬間に、側頭部を殴られたかのように横に吹っ飛んだ。

「はい、王手」

サスケの飛んで来た位置、そこは本当の私が居る足下。クナイを額に突き付けながら見たサスケの目は既に普段の黒い瞳に戻っており、もはや余力が無いことが知れた。

「くそっ！ 分身でも幻術でも無い……今のはなんだ？ それに急にチャクラの収束を感じたと思ったら……」

「ふふっ、企業秘密だ。ありがと、良い実験結果が取れた」

「おーい、もういいかー？」

突然背後から間の抜けた声が聞こえた。振り向くとシカマルが木の影からちょこんと顔だけを出してビクビクと此方を窺っている。

……可愛い女の子がその仕草をしていたならば歓迎するが、男がそれをやるのはちょっと厳しいものがあるんじゃないだろうか……
…キモチワルイ。

「シカマル……そっち片付いてたんなら手伝いに来いよ」

「わりい、負けちまったわ……っつーか、俺みたいのがお前らの戦いに交じったら命が幾つあっても足らんだろ」

余り汚れている様には見えないが、負けたらしい。シカマルの術は一對一には余り向かないからな、早々に降参したのかもしれない。シカマルが木の影から姿を現して歩いて来ると、その後ろからワラワラと更に四人が姿を見せる。

どうも勝負の付いた後、全員が見学してたらしい。まったく、何というか、薄情な子たちだ……。

演習時間は既に残り僅かとなっていてこれ以上の戦闘も無く、私達は怪我の応急処置をしてから演習場の外へと向かうこととなった。サスケは軟膏をらしい物を所々に塗り歩きだしていった。フラフ

ラではあるが、何とか一人で歩けるようだ。

私は頬の傷をシカマルに『奈良印の傷薬』を塗ってもらいその上からテープを貼ってもらった。私は傷なんてほっとけば治ると思っていたが、シカマルは傷が残るかもしれないじゃないかと、意外にもそこは引かなかったので仕方無く治療してもらうことにしたのだ。女が男にこういった治療をやらせるのはどうかとは思うが、奈良家は製薬にも精通している一族であり、シカマルも処方を知っているようだし細々とした作業も得意らしいので任せた。

勝利の証拠となる腕章はサスケとサスケ達が奪ってきた分を受け取ってある。私達の前に三つの班に遭遇したらしく、計十本の腕章を獲得することとなった。

私の班の二人は共に相手に負けてしまい奪われていたのでそれも取り返すことも考えたが、残り二人と戦ってない私がそこまでしたら、余りにも横暴な気がしてしまったので止めておこう。

サスケ達の班には四本、私の班には十一本の腕章が手元に残ることとなった。

20 演習結果とこれから

演習場の外に出れば既に演習を終えた生徒達が何人も集まっており、私達も合流してまだ戻って来ていない残りの生徒を待つ。

その間、暇を持て余し、集団の端の方から顔を確認しつつ辺りを見回してみる。

サスケは集団の隅で座り込み、満身創痍の状態で演習場を覆うフエンスに背を預けているし、ナルトは集団より少し離れた草の茂っている場所で仰向けに転がりコブだらけであろう頭を押さえている。ナルトの横には、犬塚キバと彼の忍犬である赤丸が横たえていた。彼もナルトと同じように辛そうな表情をしているが、どうしたんだろうか？

ナルトとキバの丁度真ん中に赤丸が伸びており、真ん中の線が短い川の字になっている。

そうやって見回していくうちにヒナタの姿を見つけた。

良かった。多少の土汚れはあるけど、ヒナタには目立つ怪我もなく、無事に演習を終えられたみたいだ。

暫く確認するようにヒナタを見てみると、彼女もその視線に気付いたらしく、手を振りながら嬉しそうに小走りで近づいて来た。

「姉様！」

私の顔を確認するなり、急に強張った表情に変わる。

「……姉様、お怪我を？」

ああ、そうか、そういうえば怪我したんだっけ。シカマルの薬の御陰か痛みも無くて忘れかけていた。

ヒナタにとってはアカデミーの演習で私が怪我をしたことが余程珍しいらしく、心配そうに見つめてくる。

「大丈夫、問題ないよ」

「……姉様に傷をつけるなんて……一体誰が？」

「サスケとやり合ってちょっとね。私でも怪我ぐらいするよ?」

「そう……サスケ君が」

本当に大した傷でも無く、気にすることも無いのだけど、ヒナタには違ったらしく、徐に【白眼】を発動させた。

まさかと思い、サスケに目を向けてみると、サスケは突然「ビクッ」と身を震わせてキョロキョロと周囲を窺い始めた。

……どうやらヒナタが【白眼】で睨んでいるらしい。サスケとしては殺気立った視線を感じるけど、それがどこから向けられているもののか分からないといった状態だろう。

顔を向けずに睨むなんて……【白眼】で、そんなことも出来るんだな。

普段は原作と性格が余り変わらないヒナタだが、それでも多少は遅く育ってしまったようで、時々、淑やかさの中に強かさが見え隠れする。

私やネジには敵わないヒナタではあるが、アカデミーの中では優秀な成績であり、そのことが今の性格の要因の一端になっているのだろうか。

しかし、私の怪我が原因とはいえ、これではサスケが気の毒だ。

「そ、それはそうと、ヒナタ、演習はどうだった?」

「うん、キバ君、頑張ってくれたから……でもキバ君、ちょっと怖かった」

私が話題の転換を図ると、ヒナタは【白眼】解いて答えてくれた。どうやらヒナタはキバと班が同じだったらしい。話を進めて行くうちに、先程のキバの状態が大体予想することが出来た。

“気になる女の子の前で自分を良く見せたくて張り切ったが、気合が空回りで怖がられた揚句、チャクラ切れでダウン”ということらしい。しかもチャクラ切れで行動不能になった後は、年代でも体格の良いキバは二人掛かりで担がれてここまで戻って来たという。

まあ、演習の成果としてはまずまずだったようだから、彼の頑張りは無駄ではなかった訳だが。キバ……残念な子……。

程無くして全員が揃い、成績発表となった。

演習の結果を言えば、三十の班の内、最後まで残ったのは十二班と意外に多く、私の班が首位、ヒナタの班が二位だった。

「あー、今回成績の良くなかったものは次の演習では今より成長した姿で臨めるように！ 成績の良かったものも今の状況に慢心せずさらなる精進をして心技体を磨け！ お前たちは若く、まだまだ成長過程だ。油断していれば今の実力などすぐに引っ繰り返るぞ！

今日の演習は以上だ！ 解散！」

イルカ先生がそう締めて今日の演習は終わりを告げ、集合していた生徒たちはバラバラと散会し始めた。

首位を取ることは出来たものの、内容は私にとって満足していないものでは無かった。

サスケ達との戦闘で私の班は二人の腕章を奪われたのだ。

演習だから簡単に「奪った」「奪われた」と言っていられるが、

二人の腕章を奪われた それは戦場ならば二人の命が奪われていたということになる。

……あの時の私は目の前のサスケのことしか考えて無く、二人の救出は頭の外へと追いやられていた。今になって考えてみれば、影分身を向かわせるなど色々対処は出来ていただろうに……。

どうも最近の私は、相手が多少骨のある相手だと楽しくて夢中になっってしまう癖があるみたいだ。

今回も、サスケが私に対抗する秘策を持っているかもしれないということ、それを確かめるべく勝負を無駄に長引かせてしまった感が否めない。

何故こんな癖がついてしまったのだろうか？

そう考えてみると、最近の自分が置かれている環境に起因しているのかもしれないと思う。

自分の力を試したいという欲求は以前からある。しかし最近、私

の鍛錬の相手になれる人間はただでさえ少ないというのに、一足先に忍者になったネジは任務で、ヒアシ様は日向家の仕事で忙しく、なかなか私の相手をしてくれない。

もしかしたらその辺のストレスの所為かもな……。

ストレスの発散は大いに結構だが、周りが見えなくなるのは直した方がよい……これじゃただの戦闘狂じゃないか。

それに班での作戦行動ももっと学ばないといけない。

幾ら個人の武力が優秀だったとしても、それを集団で活かせるようにならなければ味方に被害が及ぶ可能性だってある。

このまま順調にアカデミーを卒業して忍者になることが出来れば、それから幾つもの任務をこなすこととなるだろう。当分は難易度の低い任務だろうけど油断は出来ない。

そしてその先に控える中忍試験に木ノ葉崩し……最早遠い未来の話では無いのだ。

漫画の知識のみで、大蛇丸が実際にどれ程の者かは分からないが、化け物染みた奴だってことは確かだろう。

今まで必死で鍛え、新術まで開発してきたが、正直、それでもまだ敵う気がしない。

しかし逃げる訳にもいかない。もし木の葉崩しが起これば、里を護るために多くの命と共に三代目も失い、木の葉にとっては大きな損失を受けることとなる。

それを指を銜えて見ているなんて、私にはもう出来ない。

忍者になってからどう動くか、そろそろ考え始めないと……。

21 アカデミー卒業と活動計画

「皆さん、卒業おめでとう！ 忍になる者、またはそれ以外の道を選ぶ者も多いと思いますが、アカデミーで教わったことを忘れず、これからの人生に活かしてください！」

卒業式は入学式と同様に火影の簡単な言葉で締められた。

火影の言う通り、アカデミーを卒業したからといって、その全員が忍者になるということでは無い。

忍者アカデミーの門戸は意外に広く、忍者の家系では無い一般家庭の子どもも多く通う。もちろんその中で忍者になる者もいるが、中には卒業後、商家など家業のある家の子どもならばその家業を継いだり、全く別の道に進む者も居たりする。

未だ争いの絶えないこの世の中、護身術を身に付ける為にアカデミーで学ぶ者も多いのだ。国にとっても武術に心得のあるものが増えれば有事の際、多少の戦力に出来る。

ただ、他国への忍術の流出を防ぐため、アカデミーで習う忍術は初歩の初歩である限定的なものであり、多くの術は卒業後に覚えることとなる。

卒業と言っても私達はまだ十二歳だ。忍術を覚えるには、まだそれを理解できるだけの頭が無いというのもあるが。

アカデミーで教わったこと……勉強という点では私にとって為になるようなことは余り無かったんだが、アカデミー生活で原作の主要人物と比較的良好な関係を築けたのは良かった。

式を終えた校庭前の広場は卒業生と保護者たちが入り乱れ、共に喜びを分かち合っていて、私とヒナタも同じようにヒヨリ様と卒業という、このめでたき日を祝福していた。

そう言えば……。

ふと気になったことがあり校庭の隅にあるブランコを見てみると、ブランコの上に一人、此方を羨望の眼差しで見つめているナルトの姿があった。

ああ、やっぱり居たか。まあナルトに関しては余り干渉していないからな……そりゃ卒業試験も落ちるよな。

原作の通りならば、ナルトはアカデミーの教師であるミズキに唆されて、火影邸から禁術を記した『封印の書』を盗み出すだろう。そして卒業に至らなかった悔しさを糧にしてボロボロになりながらも【多重影分身】を習得。影分身の訓練でどうやってボロボロになるのかは私には分からないのだが……。

その後イルカ先生に見つかり御縄となるが、ナルトを始末し『封印の書』を奪おうとするミズキの襲撃を受け、ミズキの言葉によって自分が十二年前に里を襲った『九尾の妖狐』だと知らされる。

正確には『人柱力』……九尾を封じる器となっただけで、ナルト自身は歴とした人間。しかも四代目火影の息子という本来なら敬われる立場であるべきなんだけどな……。

だけど九尾に対する恐怖ばかりが先行してしまいその事実を知る者は少なく、大部分の里人のナルトに対する認識は“憎むべき対象”だ。ミズキが事実を知らないのも無理は無い。

可哀相なのはナルトだ。家族を奪われた者にとつて、その憎しみがナルトへと向けられたのは仕方が無かったのかもしれないが……。正直、ナルトが歪んだ成長をしなかったのは奇跡に等しいと思う。

ともかく、襲撃を受けたナルトとイルカ先生。イルカ先生は重傷を負いながらも身を呈してナルトを護り、そしてミズキの言葉を否定。ナルトは『九尾の妖狐』ではなく『うずまきナルト』であると主張。

その言葉で迷いの消えたナルトが、『封印の書』で覚えた【多重影分身】でミズキを撃退する。

さて、今日起きるであろう事件を記憶から引き摺り出してみたが、私はこの事件には関わるつもりは無い。

怪我をするイルカ先生には申し訳無いけど、この事件でイルカ先生とナルトの絆は強固なものとなり、これから先のナルトの人生において大きな心の支えとなる。私が下手に手を出して台無しにしてしまう訳にはいかない。

そのために、偽りの笑顔を貼り付けているミズキをアカデミーで見る度に湧き上がる“殴りたい”という衝動を押し殺して来たのだから……今まで我慢して来た私を褒めて欲しいね。

しかし、不思議だな。

こうやって原作のことを思い浮かべてみると良く分かるが、この世界に転生して十二年経つというのに、その記憶を鮮明に思い出すことが出来る。原作以外の記憶……例えば前世の家族の顔なんてのももう覚えていないっていうのにな……。

それが何故かは分からないが、この世界で生きて行く上ではそれは僥倖であり、あまり気にしないことにする。

「ナルト君……」

私の視線の先を追ったのだろう。ヒナタがナルトの存在に気付いたようだ。

「仕方無いよ、ナルトは三度目の試験も合格出来なかったんだから」「うん……分かってるけど……」

ヒナタがおどおどし始めたから、一応忠告しておこうか。

「気持ちは分かるけど、下手に慰めに行かない方がいいよ。木の葉の額当てを受け取った私達がナルトに何を言っても効果は薄いだろうからね。それに、悔しかったら努力しなくちゃならない。それは

ナルト自身にしか出来ないことだよ」

「わ、私、そんな……」

“大丈夫、心配しなくてもナルトは卒業できるから”と今すぐにも伝えたいが、もちろんそんなことは出来ない……うう、歯痒いな。ヒナタがこんな哀しそうな顔をしているのに。

結局、私達はナルトに話しかけることなく、校舎を後にした。

さて、どうしたものか……。

無事にアカデミーを卒業し、私はこれからの予定を考えている。忍者になった私の取り敢えずの大きな目標は『木ノ葉崩し』の阻止……なのだが、どう考えても私一人で対処するには無理がある。

『木ノ葉崩し』発動前に何とか大蛇丸と闘うことが出来たとして、勝てる自信があるかというと、正直無い。そもそも、自分自身の強さが現在どのくらいの位置なのか自覚が無いし、大蛇丸の強さだつて、実際に対峙してみないと計れない。

漫画を読んで、大蛇丸の術を知っているのだから、大蛇丸の術に對抗出来る術を開発すれば、大蛇丸を無力化できるのではないかと考えたが、如何せん術の開発には時間が掛かり過ぎるし、それで一つ二つ術を潰した所で意味が無いだろう。向こうとて術の研究者の一人だ。私の知らない術も多くある筈だ。

ただ、死者の魂を呼び戻す【穢土転生】の術に対する対抗策だけは立てておこうとは思う。あの術は脅威であるし、倫理的に許せるものではない。

一人では無理……やはり、私の持つ情報を木ノ葉へ渡し、木ノ葉全体で事に当たるべきなのだろう。

しかし普通に「大蛇丸が中忍試験に合わせて木ノ葉崩しを計画し

ています」と言ったところで信用する者が居るだろうか？ 寧ろ私自身が里に混乱を招く者として怪しまれるかもしれない。

相手に情報を信じさせるためには私の持つ情報が信用のおける物だという証拠が必要だが、もちろんそんなものは無い。これは私の頭の中にある記憶でしかないのだから。

現状、一番現実的だと思われるのが信頼できて、権力を持って里を動かせる人物、三代目火影への直談判か……。その際、最悪、私の情報の信憑性を増すために『うちは虐殺事件』の真相を知っていること話し、延いては私の正体を明かすことも覚悟しておいた方がいいかもしれない。

そこまでやつても里を動かせなかった場合はやはり一人で対処するしかない。無理でもやらねばならない……。

はあ、未来を変えろというのも、難しいもんだな……。

いつそ、どこぞの預言者の様に、私の知るこの世界の未来を全ての人に揭示して仕舞えたらどんなに楽だろうか……。

もっとも、そうなれば私は狂人扱いされ、計画を暴露された側には危険視され、命を狙われることになるのは確実だ。未来は予測できないほど大きく変わるだろうが、それが良い未来だとは限らない……。

「ミソラ姉様ー！、そろそろ行きましょー！」

「……ああ、もうそんな時間か。ちよつと待って、今行く！」

日向の屋敷の瓦屋根の上に仰向けになり、空を見つめながら考えるに耽っていると、すぐ下の縁側の方からハナビの声が掛かった。

今日は私とヒナタの忍者登録書に載せる為の写真を撮りに行き、その後忍者として必要になる武器や備品を揃えに行く予定だ。

当初は二人で行く予定だったが、ハナビが「私も行きたいです！」と言つので連れて行くこととなった。まあ、忍者に何が必要となるか、知識として知っておくのは悪いことではないし。

いつの間にか写真屋に向かう予定の時間になっていたらしく、私は考えを打ち切りハナビの居る縁側へ下りることにする。

縁側に下りるとそこにはヒナタも居て、ハナビが付いて来ることが何やら不満らしく、浮かない表情をしている。

そこから視線を下ろしてハナビを見ると、此方は随分嬉しそうだ。

二人の対照的な様子が可笑しくてつい笑ってしまう。

「ふふっ……。じゃあ、行こうか」

……私は、私に出来ることをやるだけだ。

22 好きな姉様と休日のお買い物（前書き）

息抜き回、特に読まなくても問題は無いかも？

初めての他人視点です。原作でのイメージを壊す可能性があるの
でご注意ください。

22 大好きな姉様と休日のお買い物

私達の部屋の屋根の上、何時の頃からかそこは姉様のお気に入り
の場所になっていて、晴れた日はそこで日向ぼっこしながら思いに
耽るのが習慣になってるみたい。

「ミソラ姉様ー！、そろそろ行きましょー！」

「……ああ、もうそんな時間か。ちよつと待って、今行く！」

ハナビと姉様の掛け合いの後、フワリと屋根から私達の居る縁側
へと降りて来てくれた。

結構な高さがあるのに、木の床が軋む音一つ立てずに降り立つそ
の様は流石だと思う。

「ふふっ……。じゃあ、行こうか」

私とハナビの顔を身比べる様に確認して優しく微笑んだ後、先頭
を切って玄関口へと歩き出した。

私は今の自分の表情に気付き、ハッとして取り繕う。

「ハイ！」「……はい」

ハナビの元気良く答え、トトツと姉様に駆け寄り手を繋ぐ。私
はそれに少し遅れて返事し、ハナビを羨ましく思いつつ、二人の後
に続いた。

縁側に降りて来た時、一瞬宙に残された絹糸の様な髪が青空にと
ても良く映えて見えて、私は白雲を連想した。

前髪は眉毛の辺りで切り揃えられ、残りは肩甲骨の少し下ぐらい
までの長さ。今は先っぽの方を髪留めで一つに纏めて乱れないよう
にしている。

姉様は短い方が動きやすいと主張するけど、母上と私が反対して
今の長さに落ち着いた。とっても綺麗な髪だから。

瞳は空の色と同じで透き通るような碧眼。大きく、姉様の意志の強さが見て取れるよう。そして控え目だけど形の良い鼻。若干アヒル口気味の小さい口は愛らしくて、姉様のチャームポイントの一つだと思う。

小さく形の整った輪郭にそれらがバランスよく収まっていて、まるでお人形さんの様に可愛い。

体格が同年代の私やいのちゃんに比べて随分小柄なことも、姉様の可愛らしさに拍車をかけていているんだけど、姉様にそれを言うて怒られるから、私の心の中に留めている。

いつも優しい姉様が怒りだす程、身長のことコンプレックスになつてみたい。……可愛いのになあ。

自称百四十センチの身長は実は百三十八センチしかないのを私は知っている。アカデミーでの健康診断の時に診断書からチラリと見えたから……。……これは私しか知らない姉様の秘密。

一見すると普通の女の子よりも小柄で華奢な姉様。

だけど忍者としての実力は私達の歳じゃ、敵う子はいない。んー、それどころか、もう忍者として活動してる私達の先輩方だって姉様には敵わないんじゃないのかな……？

体術は日向始まって以来の天才って言われてる私の従兄、ネジ兄さんに匹敵するくらいの腕前。ネジ兄さんも姉様のことをライバルとして意識してるみたい。……私も宗家として頑張らなきゃ。

忍術だって凄い。姉様の一族である枕家に伝わる忍術はもちろんだし、余り他の人には話さないでって言われてるけど、五遁って言われてるチャクラを火とか水の性質へと変化させる忍術。姉様はその全部の性質へ変化させることが出来るらしい。普通の人は出来ないみたい。

それに加え、最近、新しい術が完成したと姉様は嬉しそうに話してくれた。

えっと、空気を操作して、圧縮したり密度を変えて風気楼を作り

出したり？ 難しそうなことを一杯言っていたけど、私が覚えてるのそのぐらい。

日向家はその生涯を【白眼】や【柔拳】を高めることに費やす。ある程度の忍術は扱えるように習うんだけど、忍術の分野では秀でた方ではない。私もその例に漏れず、忍術に関しては余り詳しくなくて、姉様の言う半分も理解できなかった……。

……姉様が頭が良過ぎるってこともあると思うんだけど。

可愛くて、強くて、賢くて、そして優しい姉様。

私にとって掛け替えのない、大切であり、誇りであり、大好きな存在。

血が繋がっていなかったって、本当の姉妹の様に……いいえ、それよりも強い絆で繋がっているって私は思ってる。

今日はそんな姉様と二人で忍者登録書に載せる為の写真を撮りに行ってから、お買い物の予定だった。

ハナビがある程度育ってからは何処へ行くにもハナビが付いてきて、最近では二人でどこかへ出かけるという機会は少なくなっているから、私は久しぶりに姉様を一人占め出来ると思って楽しみにしていた。

それなのに、昨日の夕御飯の時にハナビがそれを耳聴く聞き付け、結局連れて行くことに……。ハナビにはこの話題を振らないように気を付け、内緒にしていたのに……。

父上が明日の予定なんて聞いて来るから……父上のバカ。

ハナビが嫌いな訳じゃない、ハナビのことだって可愛いし大切な妹だと思っている。だけど今日ぐらい遠慮して欲しかったのに……七歳のハナビにそれを求めるのは難しいことと分かってはいるんだけど……。

きつと姉様が私の顔を確認したあの時、私は余り浮かない表情を

していた筈。

姉様のことだから、私のこんな気持ちも全てお見通しだったんだと思う。

「任務が始まったら忙しくなるかもしれないけど、今度は二人で買い物しよう」

写真屋に向かう途中、ハナビには聞こえないように、こそつと姉様は私の耳元でそう言ってくれた。

「はいっ！」

思わず大きく返事をしてしまい、姉様は驚き、姉様を挟んで反対側を歩いていたハナビは何事かと此方を訝しげに窺っている。

「ご、ごめんなさいっ……！」

恥ずかしい……。

嬉しい気持ちそのままの勢いで返事してしまったことに羞恥と後悔が込み上げて来て、自分の顔が熱くなるのが分かる。

「……ぷっ、ぷはははは！ うん、ヒナ、約束な！ クククッ」

少し目を点にした様な顔をしていた姉様は、直後に吹き出した。

姉様、酷い！ そんなに笑わなくなったっていいじゃない……。

「い、行きましょう！」

顔を隠すように、今度は私が先頭になって早歩きで進み出した。

「ククッ、まあまあ、流石に写真の顔がそれじゃ拙いから、ゆっくり行こう、ゆっくり。ふふっ」

うう、確かに……。

でも、そう思うなら笑い止んで下さい、姉様……。

嬉しさと恥ずかしさと悔しさが入り混じった感情が一周して、何とか気持ちが落ち着いていた頃に写真屋へと着き、忍者登録書用の写真を撮る。

写真を撮られることも恥ずかしいのだけど、さっきまでそれよりも恥ずかしい思いをしていたおかげかな、平常心で撮ることが出来た。

その後は里の商店街で武具店で手裏剣やクナイの購入、仕立屋で服を見繕ったり、雑貨店で小物を揃えたりなど、忍者の任務に当たる時に必要となって来るものを買っていき。

アカデミーに居た頃はそういったものは全てコウに頼んだり、屋敷の使用人達が揃えてくれたりしたんだけど、忍者としての活動に当たるに際して、こういったことも自分たちで出来るようにしなきゃいけない。

常に身軽に事に当たらなければいけない忍者にとって、余計な荷物は極力持たないようにしなくちゃいけない。その取捨選択は自分の判断に掛かっているから。

ハナビは興味津々で私達のお買い物を見学してる。きっとハナビにとっても勉強になるんだと思う。そういう意味では今日はハナビを連れて来て良かったのかもしれないけど……。

今まで余り実感は無かったんだけど、こうやって買い物をしていく内に、自分は忍者になるんだなって自覚が芽生えてくる。

数年はスリーマンセルに分けられた班に、それぞれ上忍の担当教官が付き、指導を受けながら任務に付くって姉様が言ってた。

スリーマンセル……私は誰と一緒にの班になるのかな？ 出来ることなら姉様と一緒にの班になりたいけど、アカデミーでの成績を見て大体均等になるよう振り分けられるらしいから、それは難しいかもしれない。

「ヒナー！ この外套、どう思う？」

そう言った姉様が手に取っている物を見ると、桃色の……すごく派手で奇抜な模様の外套。

……これはちょっと……。

色々飛び抜けた才能を持つ姉様は、どうやら美術的センスや家庭的センスもある意味飛び抜けているみたいで、唯一姉様の弱点だと私は思ってる。

ただ、それは私にも姉様のフォローが出来る部分があるということとで、嬉しいとも思えるんだけど。

「姉様……こっちの方が、似合うと思う……」

「……そう？」

少しシユンとした表情を見せる姉様だけど、自分でもこういったセンスが無いことを自覚しているらしく、素直に手に持っていた外套を元に戻す。

姉様にも苦手なことはある。逆に、私にもこうやって出来ることがある。

少し不安だけど、一人前の忍者になるのに、いつもいつも姉様に頼ってばかりじゃ駄目だよね……。

私もこれから頑張って、姉様に頼られるくらいにならなきゃ！

23 交渉と約束されていた協力（前書き）

2011・03・08 追記

23 交渉と約束されていた協力

里の庁舎の最上階。その火影の執務室の前で、私はこれからすることに緊張してしまい、何とかその心を落ち着かせようと深呼吸する。

木の葉の里で新規に忍者となる者は、忍者登録書の提出ついでに火影への御目通りも兼ねて挨拶しに来ることとなっている。

三代目との交渉……忍者登録書を提出しに来た今日、それを実行するつもりだ。

一緒に来たヒナタには先に提出させ、「私は少し話があってちょっと時間かかるかもしれないから」と言って帰らせたため、ここに居るのは私一人だけだ。

恐らく、この執務室へ入れば、再びこの扉を通る時、私は普通の忍者としてはいられない。里の内部に深く関わってしまうのだから私は今、この世界で生きて行く上での人生の岐路に立たされているという訳だ。

この世界に転生した当初は平穏に暮らし、面倒事には巻き込まれたくないなんて思っていたのに、今はこうやって自ら物語の流れに首を突っ込むものとしてるなんて……。

だけど迷いは無い。そのために今まで必死に鍛えて来たのだし、うちの一件の時の覚悟は今も変わらないのだから。

「……すうつ」

最後に一際大きく息を吸い込んで留め、意を決して目の前の木の扉をノックする。

「枕ミソラです。忍者登録書を提出しに来ました」

コンコンと硬質な木を叩く音を響かせた後、私は要件を告げ、気を引き締めつつ反応を待つ。

「入りなさい」

中から扉越しに若干しわがれた声が届き、私はその声に従ってノブを捻り中へ入る。

「失礼します」

私がこの執務室に入るのは二回目だ。一回目はヒナタ誘拐事件の時。

あの時は日向の大人達が何人も居たために感じなかったが、アカデミーの教室ぐらいの広さの執務室は余計な装飾品が無く、奥から四分の一といった辺りにポツンと机が置かれている様子に些か寂しい印象を受ける。

私から見て左、部屋の西側一面はベランダに繋がっており、今は部屋とベランダの境界となるべき敷居が全て解放され、吹き抜けとなっている。庁舎の五階に当たるこの執務室に並ぶ高さの建物は少なく、遮られること無くそよぐ風が心地好い。

机には火影の象徴ともいえる『火』の文字が正面に書かれた笠を被った三代目と、執務の補佐役と思われる男が横に並んで席に着いていて、入室してきた私を見ている。

私は一礼をしてから忍者登録書を火影へ渡し、机と向かいあう様に備え置かれている椅子へと座った。

「……………ふむ、特に問題は無さそうじゃな。確かに受け取った」

忍者登録書を確認し終えた三代目は下げていた視線を私に移す。

私の様な生まれつきでは無く、歳を取った為に色素を失った白髪を生やし、顔には深い皺が刻まれ、生きてきた年数を感じさせる。

皺の奥の双眸は歳を取って尚威厳に満ちており、瞳術使いでもないというのに、私は何か見透かされているような気分になった。しかしそれは決して不快なものではなく、どこか暖かみを感じる。

「これでお主は後日行われる説明会を聞けば晴れて忍者となる。この木ノ葉隠れの里の為、力となってくれることを願っておるぞ」

「はい……………微力ながら尽力します」

「くくつ、随分と謙っておるのう。お主の実力ならば即戦力としても期待出来ようものを。まあ良い。退室してよいぞ」

退室を促されたが、ここで去る訳にはいかない。動かない私に正面の二人は怪訝そうな視線を送り始め、私は口を開く。

「……話があります」

「ふむ、話とな？ 申してみよ」

「……四年前の事件について。出来れば人払いをお願いしたいのですが」

言いながら三代目の隣りに座る補佐役の男を一瞥した。男は怪訝そうな顔をするが、黙ったまま判断は三代目に委ねているようだ。

補佐役の男がそんな表情をするのも分かる。

普通に考えて、アカデミーを卒業したばかりの十二歳、そんな子供が仕事を差し置いて火影と二人だけで話さなければならぬ内容の話などあるだろうか？

しかも見た目には実年齢にも届かない様な子供が……だ。……自分で考えておいて少し悲しいが。

しかし逆の立場なら、私も子供の遊戯に付き合っている暇などないと思うだろう。

だけど、第三者のいる状況で話を進める訳にはいかないというのは譲れない。

三代目にとっては何故今更そんな話を……というところか？

三代目は先程の暖かみのある雰囲気か鳴りを潜めた眼で、代わりにじつと私の眼を見据えており、既に三代目へと視線を戻した私もその眼を逸らさないようにする。

四年前の事件 『うちは虐殺事件』のことだ。三代目ならば、事件に巻き込まれたことになっている私が『四年前の事件』と言うだけで、すぐそこに行き着くだろう。

もちろん今日ここで話したいことはそんなことではないのだが、この話題は三代目としても余り第三者に聞かれることは面白くない筈だ。

暫しの沈黙を破ったのは三代目。

「……よからう。このままではそこを動きそうもないしのう。すまぬが席を外してくれ」

「しかし！ 三代目」

「なに、仕事の時間ならばちゃんと都合を付けるから安心せい」

その後も席を外すように言われた男は「そういうことではなく……」と食い下がるが、三代目も譲らず、結局諦めた男が部屋を出て行った。

「……外の方達もお願いします」

修行をする内に体に術が馴染んだせいか数メートルの範囲ならば印を組まずともある程度の気配察知を独立して使えるようになっていた私は、空気の流れを読み、この部屋を静かに窺っている存在に気付いている。

普通の人間ならばまず気付くこと無い程上手く気配を隠しているが、呼吸による空気の流れなどは流石に抑えられない。……恐らくは護衛の暗部だろう。

当然と言えば当然。幾ら本人の実力が優れていようと、火影というのは護られるべき立場なのだから。

「聞いている通りじゃ」

そう言って三代目がハンドサインを送ると気配は音も立てずに消えた。

「して……ここまでして話したい話とはなんじゃ？」

議論の場は整ったとばかりに三代目は再び私を見据え、話を促して来た。

私は意外と簡単にこの状況を作り出せたことに拍子抜けしていた。もう少し手古摺るかと思っていたのだが……。

三代目の物分かりがいいのか、何か思惑があるのか……或いは、私一人どうとでもなると考えているのか。

まあいい、私はそれに応える。

「まず、四年前の真実について」

三代目の視線が鋭くなったのを感じる。

「『うちは虐殺事件』、私はその裏側を知っています。イタチさんの行動は里の命令だったというのは……間違いは無いですか？」

「……ふむ、そういうことか。……既に知っているのならば答える必要もなからう」

四年前のイタチの言動といい、既に確信は得ているが、あくまで漫画での情報の為、確認の意味も込めて聞いてみたが、答えはやはり肯定。

私の思惑として、この話をしたのは、普通では知り得ない情報を持っていることを示して、これからの話の信憑性を増すためなのだが、何だか脅しているみたいになってしまったな……。

こういう交渉の駆け引きなんて前世でもしたこと無いからな……慎重にやらないと。

「えっと、もちろんこの話を他に漏らしたりどうしようという考えは私にありません。ただ、私もそれを知っているということを心に留めておいて欲しいだけです」

「……続けなさい」

「はい、今日話したかったことはもう一つあります。寧ろ本題は此方なのですが………単刀直入に言うと、これから木ノ葉は大きな脅威に晒されることになります。先ずは『木ノ葉崩し』。首謀者は大蛇丸。彼は数年前に田の国で音隠れの里を立ち上げて虎視眈々と木の葉の里を狙っています。そして今年の中忍試験を期に実行に移す。目的はその計画名の通り、木の葉の崩壊。それとうちはサスケへ呪印を刻むこと。木ノ葉は多くの犠牲者が出ることとなります。……私はこれを阻止したいと考えています。しかし、私一人の力では荷が勝ちすぎます……協力を願えないでしょうか？」

予想通りの驚愕の表情を浮かべた三代目。まさに寝耳に水といった状況だろうか。

だがその表情も長くは続かず、一言「失礼する」と私に断ると、

徐に机の上に置いてあつたパイプを手に取り、葉を詰めて口に銜え、火を付けた。一連の所作は慣れたものであり、年季が入っていることを感じさせる。

紫煙を燻らせる姿は洪く、様になっていて、ああ、こんな風に歳を取りたいなど、場にそぐわぬ考えを抱いてしまう自分に気付き、同時に案外自分も図太い神経をしているなとも思う。

そして考えを落ち着けたらしい三代目が口を開いた。

「お主の話を信用できる程の証拠はあるのかのう？」

「……ありません」

これは私の記憶の中の情報。証拠など示せる筈が無い。

やっぱり簡単に信じる訳が無いよな。うちのは事だけでは信用を得るには弱かったか。

もう私の正体から全部話して、普通なら知り得ない話を一つ一つ並べ立てて信憑性を高めるしか無いか……？

「証拠は無しか……まあ良い。協力しよう」

「はうっ？」

洗い浚い話す覚悟を決めようかとしていた所で予想とは別の答えが耳に届き、思わず間拔けな声を出してしまった。

「協力すると言ったんじゃ。元より里を護るのは火影の役割じゃ。

危機が迫っているのならば対策を練るのは当然じゃろつて。……望んでいた答えとは違ったかの？」

「いえ、えつと、何でそんな簡単に？ 私が嘘を吐いていたり、更に言えば、私が里を陥れようとする者の内通者だったりという可能性は考えないのですか？」

ああ、私は何を聞いているんだ！？ 自分で自分のことを何で簡単に信じるのかとか……信じてくれたのならそれでいいじゃないか。「お主は嘘を吐いていたり、里を陥れようとしておるのか？」

ほら見たことか！

余りに簡単に信じてもらえて、逆に混乱してしまい、色々考えていたことも真つ白になってしまった……自分で立場を悪くしてどう

するんだよ。

「え？ 違います！ 誤解です！」

「ほっほっ。分かっておるから、ひとまず落ち着くがよい」

「え？ えっと……はい」

ますます混乱した私は三代目に宥められて何とか気持ちを沈める。

私が落ち着いたのを見計らって三代目は話し始めた。

「証拠は無い、情報源も明らかでない。普通に考えれば、荒唐無稽な話じゃな。まあ、作り話にしては出来過ぎておるし、儂は大蛇丸という男をよく知っておる。彼奴ならばその程度のことは十分に考えられるじゃろうが……。しかしこの程度では儂とて信用はせぬ。先程お主の墓穴を掘って言ったような可能性も十分に考えられる」

「うっ……じゃあ、何故？」

「四年前……事件の後、イタチが里を抜けたのは知っておろう？ その際に儂に頼んでいった事がある」

何でまたその話を？ 確かそれはサスケの保護だった筈だけど。

「ただ一人残されたうちはサスケを里の上層部から守ること……巻き込んでしまった枕ミソラの詮索をしないこと」

「え？」

「何故お主があの時あの場に居たのか、本来なら里が問い質すところをイタチに機先を制された訳じゃ。……そのようなことをすれば、逆に疑いが掛かるというもの。儂は不審に思ったのじゃが、その当時から天才との噂は聞いておったが、しかし所詮八歳の少女一人、考え過ぎじゃと思い、また、それがイタチへの償いの一つになるのならということ、その時はイタチの言う通りにしたのじゃよ。お主に聴取を取らなかったことを訝しみ、一部の者がお主に監視の目を付けたようじゃが不審な点も見つから無かったようじゃし、本人の偶々巻き込まれてしまったと言っていたことに疑う者もおらんかった。次第にそのことは時間と共に薄れて行ったのじゃが」

確かにあの事件の後、里からの接触が無かったことに首を傾げた

ものだが……。

イタチ……あの人が何を考えているのか分からない。そんなことをして一体何になる？

あの場で里に聴取をされようと私は真実を話すつもりは無かつたし、イタチだつてそれは分かっているものだと思つていたんだが……。

いや、それよりもそのことが三代目が私を信じる理由と何の関係があるんだ？

「今日、お主の話を聞いて、わかつたわい。……恐らくあの時イタチがお主の事を詮索するなど言つたのは、やはり暗にお主が重要な何かを握っているということを示しておつたのじやろう。虐殺事件の真相だけではなく、もっと重要な事をのう。……極端な話じやが、事件の真相を知られ、その後、里の脅威になるというのなら殺すか、彼奴の写輪眼で幻術でも掛けて精神を砕くかすれば良かった話じやからのう。じゃがイタチはお主を生かした……それはお主が重要な何かを持っていると知り、それが信じるに値するものであり、また、里の未来に繋がるものとして残す必要であるとイタチが判断したからじゃ。それを“詮索するな”という言葉で上手く隠して、お主に時間を与え、今日の様にお主が儂に話を持ちかけた時に儂がその言葉を思い出して協力するように仕向けた」

「……………嘘だろ？」

私はイタチの用意した時間を越えた途方も無い筋書きに呆然とするしかつた。

つまり、イタチは私の行動するタイミングに合わせて三代目の協力を得られるように四年も前にその種を仕込んでいたということ。

この三代目との話し合いの場はイタチによつて予測され、用意されていた物だつた。

凡そイタチ一人でこんなことが考え付くものなのだろうか？

三代目の考え過ぎなのでは？

話されたことに現実味を感じることの出来ない私の間抜けな表情

を見て三代目は続けて言う。

「……儂とて、自分で話しておいていまいち実感が湧かんのじゃがな……。儂の思い込みである可能性も決してゼロでは無いしの。じやが、お主の話を信じようと思う儂の意思は変わらぬよ。所詮、今の話も理由の一つに過ぎん」

先程の話から未だ立ち直っていない私は、まるで言葉を忘れてしまったかの様に声を発することが出来ず、首を傾げることしかできない。

「儂も無駄に長く生きてきた訳ではないからの。この歳で、しかも『火影』などという大役を担っておるとの、どうしても人間を見る目というものが磨かれるもんじゃ。ミソラよ、お主が協力を求めて話す中、お主が儂に向ける眼は真っ直ぐで嘘の色は無かった。それが一番の理由じゃよ。……お主が何を知り、何を見ているのか、気にはなるがお主が話さぬのなら此方からも聞かぬ。イタチとの約束もあるからの。……ただ、お主がそれをこの里の為に使ってくれんというのなら感謝しよう。……そして此方こそ協力を願いたいと思う。頼めるじやろうか？」

そう三代目は言って席を立ち上がり、私の座る椅子の前に歩いて来た。

表情はいつの間にか好々爺としたものに変わっており、私に向かい右手を差し出して来た。

イタチが何処まで私の行動を見越しているのか分からないが、取り合えずその事は後で考えることにし、今は目の前の事に対処しなければ。

三代目の話を聞く間に何とか復帰した私は差し出された手に応えようと立ち上がる。

「……はい」

そして自分の右手も同じように差し出し、三代目の手を握った。

この日は三代目の仕事が押していることもあり、詳しい話は日を

改めることとなった。

「この話はヒアシ様にも話していません。私がこの話をしたことは出来るならば内密にして頂きたいのですが」

「……承知しておる。この情報が他に漏れることは此方としても都合が悪い。お主も十分注意してくれ。お主は何も知らぬアカデミーを卒業したばかりの下忍、そうじゃろう？」

「ええ、もし私の存在が知れば、この命すら危ういでしょうね」

「若いお主には辛いかもしれぬが、そういうことじゃ。残念なことじゃが、この里に大蛇丸の内通者が居ないとも限らん。後日、連絡を送る。詳しい話はその時じゃ」

「分かりました。では失礼します」

そう言って私は席を立ち、来た時と同じように一礼をして執務室の扉を通った。

木ノ葉崩しまでは約三ヶ月程あるが、ゆっくりしている訳にはいかない。私は下忍として暮らしつつ、対策を練り、準備をして行くこととなる。

忙しくなりそうだ。

24 微妙な班編成と医者の本性

「オエー！」

アカデミーの一室に顔を青くした二人分の嘔吐の音が響いた。

サスケに対して顔面を突き合わせてガンたれていたナルトが背後に居た人間とぶつかり、その拍子に二人の唇同士が丁度重なったのだ。

今日はアカデミーを卒業し、忍者となる道を選んだ者への説明会の為、つい先週末まで毎日通っていた教室に再び集められている。

ここで今後の活動内容や注意事項の説明を受け、今後しばらく共に任務に当たることになる班員の編成も発表される。午後からはそれぞれの班に割り当てられた担当教官の上忍を含めた顔合わせだ。

私の関わらないところではほんと漫画の通りに展開するんだな。目に入れたところで全く嬉しくもない騒動の様子を眺めながら、彼らの些細な日常が、私の頭の中にある記憶を台本としたかのようになぞられていく現実には、私はデジャヴにも似た奇妙な感覚に捉われた。

『運命』だなんてものは前世では全く信じてなんていなかったが、今この世界には確実にそれは存在していることを実感させられる。もちろん彼らの一挙手一投足までを作中で描かれていた訳ではないが、大まかな部分では彼らの行動は私の知るところである。

知らずの彼らと知る私……否が応にもそこに温度差を感じてしまうのは仕方無いことだろう。

この世界にとって私は明らかに異物なのだと、時々私は世界からの疎外感に押し潰されそうになる。

……だけど、アカデミーを卒業し、漫画の中の時間軸としてはここからが本番の筈だ。今後こういった既視感を感じる光景も増えて

くるだろう。その度に今みたいなことを考えていては私の精神が持たない。

何事も割り切ってしまうことが大切だし、私は未来を変えると決めた。その先には私も知らぬ世界があるに違いない。

それはこの記憶がいずれ役に立たなくなっていくということでもあるし、決められた世界を歪ませることに不安が無いと言えば嘘になる。

だけどまだ見ぬ世界への好奇心と、より多くの人を救うという使命感も私の中に確かに存在している。

ぼんやりと考え事をしつつ眺めていた騒動は、サスケに心酔しているサクラが名前の通りのサクラ色の髪の毛を逆立てて怒り、ナルトをタコ殴りにすることで終結した。

隣の席から忙しく揺らぐ気配を感じ、視線を横に向けると、先程までこの場にナルトが居ることに喜色を浮かべていたヒナタがいつの間にか憂色へと変わっていて、あたふたと何をする訳でもなく拳動不審に陥っていた。

ヒナタにとっては気が気じゃなかったらしい。

殴られたことによつて顔を腫らし、ぐったりと机にもたれ掛かっているナルトのことが心配だけど、助けに行く勇氣までは無いといったところか……。

「まあ、ナルトなら大丈夫だろう」

「そ、そうかな……？」

「アイツの回復力は異常だからね」

「……う、うん」

見かねて安心するように言葉を掛けると、納得してくれたらしく、時折チラチラとナルトの方を確認する程度まで落ち着いた。

「ではこれより班編成を発表する！ じゃあまず是一班……」

粗方の説明を終えたイルカ先生は、既に班ごとに割り振られた名簿を手に取り一班から読みあげて行く。

個人的に、この班編成は成績も然ることながら、ある程度目的があつて組まれているように思う。

サスケとナルトを組ませるのも、いずれ写輪眼で九尾をコントロールできるよう、将来を見越してのものであることは漫画の中で少しだけ触れられていた。サクラは班の頭脳担当だろう……些か暴走気味だが。その他でも、いの、シカマル、チョウジならば連携を用いた敵の捕縛や無害化。キバ、シノ、ヒナタならば感知系の能力での広範囲の索敵や奇襲。一つ上の世代になるが、ネジ、リー、テンテンならば近接戦闘特化といった風にそれぞれ得意とする分野がある。

恐らくは三代目の裁量なのだろう。

さて、私の扱いはどうなるんだろう？

考えている内にもイルカ先生による名前の読み上げが続いており、既にそれも終盤となっていたが、私の名前はまだ呼ばれていない。

「……次！ 十班、山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ！」

これで主要メンバーは皆呼ばれたな。その組み合わせは漫画の中と同じだ。

多少、変わってしまったかもしれないという不安があつたので、一先ず胸を撫で下ろす。

「……じゃあ最後、十一班、いさりアミ、鍛冶タタラ、枕ミソラ！」
そして最後に私の名前が呼ばれた。班員を聞いて私は思わず眉を寄せてしまう。

鍛冶タタラは男子であり、私は余り知らない。それは兎も角として、いさりアミとは同じくノークラスだった。この子は昔にサクラをいじめていたリーダー的存在でもあり、性格は高飛車。関わりと面倒そうだと思い、敬遠していた子だ。

幸い向こうから話しかけてくることも無かったので、アカデミーでは関わることも殆ど無かったのだが……。

「先生！　なんで私達だけくノーが二人なんですかー？」

質疑の声を上げたのはいさりアミだった。

まあ、もつともな質問ではある。普通に考えて男の方が力が強く、戦闘要員として向いているのだから。

「ああ、枕ミソラはアカデミー全生徒の中で文句なく首席だ。戦闘能力でも男子に引けを取らないだろうと我々は判断してこの編成となった。わかったか？」

「……はい」

余り納得して無いというそぶりだが、アミはそれ以上は何も言わなかった。

どうもあちらも何か思うところがあるらしい。面倒事にならないことを祈るが……。

全く、何でこんな班編成になったのか……。

「じゃ、皆、午後から上忍の先生達を紹介するからそれまで解散！」

イルカ先生が退室し、それに続いて新米下忍達もゾロゾロと教室を後にする。

「ミソラ、ご愁傷様！」

未だ席に座っていた私の横を通り掛かったいのが私の頭にクシャリと手を乗せてそんな言葉を吐き、その手を今度はヒラヒラと振って教室の扉へと歩いて行った。

チラリと見えた顔は慰めるというよりも、面白くなったとも言いたげににやけているのが確認できた。

「はあ、他人事だと思って……。ヒナタ、私達も行こうか」

「姉様、大丈夫？」

「ああ、問題無いよ」

何だか、いのは漫画よりSな気がする。いいよないのは、昔馴染みと一緒に班なんだから。

昼食を終え、担当上忍に連れられた私達は木ノ葉病院に併設されている公園へと訪れている。

病院を正面に捉え、鍛冶タタラを挟んで私が左、いさりアミが右に芝の上に並んで座っており、鍛冶タタラは居心地が悪そうにそわそわと落ち着かない。

何故か私が座った後にいさりアミが向こう側に座ったのでこの並び方になったのだが、やはり私は彼女に嫌われているのだろうか？先行きに不安を覚えつつ視線を正面に向けると、一メートル強の間を開けて担当上忍が病院をバックに胡坐を掻いて座っている。

私達の担当上忍、それは私の知る人物だった。

「んー、まずは自己紹介からだな。んじゃあ、俺から言うから時計回りでいってくれ」

「はい」「わかった」「はい」

三者三様の返事の後、渡里イクモは自己紹介を始めた。

「知ってる奴もいると思うが、俺の名前は渡里イ」

「知ってるわ！『人妻殺しのイクモ』よね？母さん達が話してたのを聞いたことがある！」

自己紹介を遮って言葉を発したのはアミだった。

渡里イクモ　これからイクモ先生と呼ぶべきか。

イクモ先生には何度も木ノ葉病院でお世話になったが、そんな話は初めて聞いた。

昔私の実父である枕クウヤやヒアシ様とマンセルを組んでたということから同期だと考えると、年齢的にはもう四十代の筈なのだが、野性的な魅力の溢れる風貌は私が赤ん坊だった頃からほとんど変わらない。寧ろ渋みを帯びて味が出てきた気がする程だ。

白衣姿しか見たことが無かったが、今日は里から配給されている、黒装束の上に緑色の忍者用ベストという出で立ち。木ノ葉の模様の入った額当ては腰にぶら下げており、私的には白衣姿より似合っていると思う。

確かに、マンネリ化した結婚生活の中、子供を診てもらいに病院へと訪れた人妻が、彼に甘い言葉を掛けられれば、少しスリルを味わいたい気分になってしまいかもしれない。

……って、何処の昼ドラだよ！ と一人心の中で突っ込みを入れるが、ふと、ヒヨリ様は大丈夫なのだろうかという不安が過り、怪訝な表情を纏ってイクモ先生を見る。

私の視線に気付いたのかどうか分からないが、イクモ先生は目を泳がせながら口を開く。

「……あー、俺はこれでも一応お前らの担当上忍だ。言葉遣いに気を付けるよーに！ それと自分から手を出さない程度には節度は保っているつもりだ」

「それって要は来るもの拒まずってことじゃ」
意識せず私の口からはそんな言葉がこぼれた。

そこは全否定して欲しかったな……。

元男である私としては、『据え膳食わぬは』の精神も分からんでもないが……否、元男だからこそ何だか許せない気分になる。恩のある人ではあるのだが、私の中のイクモ先生株は大暴落だ。

「ゴホンッ！ 話が逸れたな」

私の呟きは聞こえなかったようなそぶりでイクモ先生は態とらしく咳をし、話を自己紹介へと戻す。

「名前はもういいな、趣味は昼寝。好きなものは休日、嫌いなものは休日明けの朝。そんなところだな、質問はあるか？」

何だろっ、この駄目な大人の見本みたいな人間は……病院に居た時は格好良かったのにな。

一度外に出るとこんな人だったとは……。

まあ、取り敢えず気になっていることを聞いてみるか。

「イクモ先生は病院で働いていた筈だけど……何で担当上忍に？」

「……まあ、火影に頼まれてつてところだな。病院の仕事は弟子に任せて来た」

弟子つてのは、恐らくミナのことだろう。

彼女ももういい歳だろうけど、あのドジっ子っぷりを思い出し、大丈夫だろうかと心配になる。

それにしても、イクモ先生が担当上忍となつたのはやはり三代目の仕業か。

私のチャクラが特殊であること、五遁を扱える可能性のあることを知っている数少ない人間の一人であると考えれば、別におかしなことでもない。私としても隠し事が少なくなる方が動きやすくて都合がいいしな。

「他に質問は無いな？　じゃ次！」

時計周り、つまりイクモ先生から見て左のいさりアミは「はい」とやる気の無い、間の抜けた様な声答えた。

印象的なのは気の強そうな切れ長の目、烏羽色の髪はボブカットにされている。それなりに整った顔立ちだとは思う。

オフホワイトの比較的シンプルなチュニックを腰紐で絞り、下は七分の黒のレギンスの様なものを履いており、額当ては首に緩く巻いてある。

「名前はいさりアミ、趣味はショッピング、好きなものは可愛いものの、嫌いなものは気持ち悪いもの。これでいいかしら？」

その自己紹介は、やはり見た目通り高圧的な口調だ。

「ああ、じゃ次」

イクモ先生は首肯しながら次のタタラへと促す。

「鍛冶タタラだ……です。趣味は忍具や刀を眺めること。好きなものは美しい刀。嫌いなものは道具を粗末に扱う者。以上だ……です」

さつきイクモ先生が口のきき方を注意した所為か、所々言い直しつつタタラは自己紹介をした。

人見知り……というよりただ単に元から武骨な感じの喋り方なのだろう。シノとはまた別の無口なタイプっぽいな。

その内「自分、不器用ですから」とか言いだしそう……。

朽葉色の髪は短く刈られ、額にはしつかりと額当てが巻かれている。紹介を終えた唇はもう喋ることは無いという風に一文字に結ばれた。服装は甚平といった簡素なものだが、身にまとった雰囲気は堅苦しく、生真面目さを感じさせる。

「その年からあんまり肩肘張っていると、老けるの速いぞ。じゃ最後」

私の番か。

「名前は枕ミソラ。趣味は鍛錬。好きなものは甘いもの。嫌いなものは見た目で人を判断する人。よろしく」

甘いものが好きだというのは、まだ男としてのプライドが残っていた昔ならば言うのを憚っただろうけど、もう私は十二歳である。毎年ヒアシ様から贈られるぬいぐるみも十二支全て揃った。

まだまだ前世の年齢には届かないものの、十二年もあれば、女の子としても色々経験するものだ。それはもう、ほんとに色々……ね。。

結果、私はもう開き直って女性としての感性を受け入れたという訳だ。

「よし！ 全員紹介を終えたところで、明日の任務の説明をする！」

「任務う？ いきなりなの？」

聞き返したのはアミで、険しい表情をしている。

「ああ。まあ、任務といっても俺対お前ら三人のサバイバル演習だな」

「先生が直接、俺達の実力を見るのか……ですか？」

タタラは生真面目に未だに敬語を使おうと頑張っているようだ。

「それも目的の一つではある。実は……な、ここに居るお前達はただ下忍として正式に認められている訳ではない。明日の演習の結果如何ではアカデミーに戻って学び直してもらうこととなる」

「そんな！ 横暴よ！」

「演習に合格すれば何も問題は無いさ。演習の詳しい内容は明日発表するが、忍び道具はもちろん、演習の準備は怠らないように！ 今言った内容はこのプリントにも書いてある。各自読んでおくように。質問はあるか？」

私以外の二人は少しショックを受けているようだ。やっと下忍になれたと思って喜んでたら、明日の結果によつてはまたアカデミーに戻されるのだ。仕方無いことだろう。

二人とは違い、私としては寧ろ楽しみである。イクモ先生は人間性に問題アリだということは分かった。しかし彼は腐っても上忍なのだ。

ふふつ、久しぶりに全力で戦えるかもしれない。

「……ミソラ？ 気味が悪いぞ……」

窺う様に問われ、思考の海から我に返ると、皆の視線が私に集中している。まるで変なものを見るかのように……。

遅れて自分の口角が上がっていること気付いた。

っ！ しまった！ ニヤケ顔が表に出てしまっていたみたいだ！

「やつ！ そ、それじゃ、今日は早く帰って明日に備えないとなー

！ あははっ！」

咄嗟の誤魔化しにも三人の表情は変わらなかった。

「……まあいい、質問が無いなら今日はこれで解散だ。明日は遅刻しないように！」

……私は私が思うよりもずっと、戦闘狂の気が強いのかもしれないな。

25 演習開始と新術の実用試験

時刻は午前九時五十分、場所は木ノ葉の里に数ある演習場の一つ、第五演習場。

今日は十時からここでサバイバル演習が行われる。

この演習場は過去の地殻変動の為か、はたまた誰かが意図的に土遁で造ったのか、見渡せば幾つもの地表より隆起した台地が点在している。台地の麓には所々雑木や雑草が生い茂ることで複雑な地形を造り出し、姿を隠すには容易な印象を受ける。

今、私を含めた下忍候補三人は既に演習場の中心近く、比較的周囲よりも視界の開けた場所に陣取っている。

タタラもアミも今日はしっかりと武装をして来ている。特にタタラの方は腰に刀を差していて、その佇まいは前世で言うところの侍のようだ。この世界でもサムライはいるが、アレは侍とは何か違うと私は思う。

しかし気まずいな……。

何が気まずいって、会話が無いのだ。

タタラは元から無口なのだろうが、よく喋りそうなアミも今は静かである。

うーん、これから先この班でやって行くだから、やっぱ何とかしないとなあ。

そんなことを考えている内にどうやら時間になったようで、演習場の入口の方からイクモ先生が歩いて来た。

「お、全員集まってるな。おはようさん」

「おはようございます」

「おはようーございまーす」

挨拶をするイクモ先生に対し、私は真面目に、アミは間延びした面倒臭そうな声、タタラは何も言わず頭を下げる、三者三様で挨拶を返す。

「準備もちゃんとしてきたみたいだし、早速今日の演習の説明をする」

そう言つて徐にジャケットのポケットから鈴を取り出し、私達に見せつけるように目の前に差し出す。

親指と人差し指に摘まれ垂れ下げられた鈴の数は二つ。

差し出された時に揺らされぶつかり合ったそれは「チリリン」と綺麗な音を奏でた。

「ここに二つの鈴がある。俺から正午までにこれを奪うことが今日の演習内容だ。鈴は一人一つでいい」

「えっ！？ それってどういうこと？」

アミが鈴が二つしかないことに疑問の声を上げる。その横ではタタラも不安そうにイクモ先生を窺っている。

「昨日も言った様にお前らはまだ下忍候補ではない。この演習で相応しくないと判断された者はアカデミーへ戻される。つまり、鈴を取れなかった奴がどうなるかは……解るな？」

暫く沈黙が通り過ぎるた後、私は興味本位で一つ聞いてみることにした。

「先生！」

「何だミソラ？」

「先生が動けなくなつた場合はどうなるんですか？」

その質問に全員の視線が向いたことを感じる。

「あ、ああ、その場合は……まあ、あくまで鈴を取るという達成目標は変わらん。鈴を取れば任務達成とする」

そりゃそうか。

結局この演習の目的は、利害に惑わされずチームワークを見せるということの筈。そもそも下忍が上忍に対して圧倒することは想定されてないのだろう。

私としてはイクモ先生と一対一で戦いたい。上忍と闘うことで、自分の力が今どの程度通用するのか知っておきたいのだ。だけど、運良くイクモ先生に勝って鈴を奪ったとしても先生の判断によっては個人プレーを理由に「鈴を取りました、でも失格です」なんてことも可能性としては有り得るかもしれない。

自分勝手な理由で二人を巻き込むのも気が引けるけど、適当なところで二人にも協力してもらった方が得策か。

「他に質問は無いな？ 因みに忍具に制限は掛けない、手裏剣だろうと刀だろうと好きに使っていい」

質問に答え、他に質問が無いことを確認したイクモ先生は再びジャケットのポケットの中に手をつ込み、今度は目覚まし時計らしきものを取り出した。そのアラームを正午にセットし、地面に置く。

「じゃあ合図をしたら始めだ。いいな？」

ゴクリと唾を飲み込み、私達は首肯する。そして腰を落とし、何時でも動けるよう構えた。

「始めっ……！」

合図と同時にアミとタタラは草陰に消え、私は隠れずに一旦イクモ先生から距離を取るだけに留まる。

時間は限られている。無駄には出来ない。

しかし、よくよく考えたらこれって漫画のナルトと同じ行為だよな……。

「おいおい、自信が在るのは結構だが、勇気と無謀は違うんじゃないかい？」

隠れなかった私に対してイクモ先生は困惑を含んだような声色で忠告して来るが、表情には変化が無い。

既に戦闘への意識の切り替えが済んでいるのだろう。時に表情は言葉より多くを語る。ここら辺は流石にプロだな……。

「無謀かどうかは先生が判断して下さいよ……っと！」

言いながら私はイクモ先生に向かい、走り出した。

自然と口角が上がってしまうのを感じる。

踵落としを往なされ、印を組みながら距離を取る。一瞬前まで私の居た位置にはイクモ先生の拳が空を裂いた。

もう少し身を引くのが遅ければ、容易くその拳の餌食となるだろう。

私は術の発動と同時に体に捻りを加えながら地面を蹴り、飛び込む。

思惑通り、乾いた破裂音と共に私の不可視の術の衝撃よって体勢を崩したイクモ先生が立て直すより早く、回し蹴りで襲いかかる。

しかしイクモ先生は崩された体勢を無理に立て直そうとはせず、その体勢から更に身を捻り倒し皮一枚で避ける。

私は回転の勢いを殺さず続けて蹴りを放つ。二撃目、三撃目、しかしその攻撃も難なく躲かれた。

私が攻め、イクモ先生が防ぎ、反撃を狙う。しかしどちらも決定打に欠け、先刻から同じような攻防が続いていた。

やはり密度と精度をもっと上げないと、体勢は崩せてもダメージとしては期待できないか……。

私は体術と併用しながら新術の実用試験をしている。この術は空漠の術から発展させた術だ。

空漠の術には空気の流れを読み取る効力がり、それはつまり逆に言えば読み取れる空気は私のチャクラの影響下にあるということだ。以前、ヒアシ様に空漠の術の発動状態を白眼で観察してもらったことがある。

その時のヒアシ様曰く、発動時は私の全身の点穴からチャクラが空気中に滲み出し、空気と溶け合うことでグラデーシヨンの様に私

と周囲の境界を曖昧し、広範囲に四散いるらしく、恐らくそれが認識阻害の効果を与えているのではないかとのこと。

私自身チャクラを見ることは出来ないので詳しく解らないが、感覚的にはチャクラで出来た霧の様なものらしい。

私はこの空気と溶け合ったチャクラを『空気チャクラ』と名付け、それを操作することが出来ないかを考えた。

この世界では砂を操ったり、水に変化したりする連中が居るんだ。やって出来ないことは無いだろう。

空漠の術の原理は理解した。けれど空気と混ざり合い、何倍にも体積の増した空気チャクラの把握は困難を極め、多くの時間を費やした。

結局、アカデミー三年の頃から新術を考え始め、術として形となってきたのはアカデミーの最終学年に入った頃であり、今も完成と言うには未だ課題を残した状態だ。

試行錯誤によってなんとか空気チャクラにある程度の指向性を持たせることは出来たものの、操作性を高める為に周囲のチャクラ濃度を高めた結果、空漠の術の認識阻害の効果が薄れた。

今現在、イクモ先生が私の行動を把握していることがそれを如実に現している。

恐らくグラデーションのようになっていたチャクラ濃度のバランスが偏った結果だろう。

そして現状、私の何とか操れる空気の範囲は三メートル程度。私を中心に遠くに行けば行くほど制御は弱くなる。

目標としてはチャクラの濃度を下げつつより多くの空気を操作できるようになること。

大体コツは掴めてきたのだ。空気チャクラの把握に掛かった時間と比べたらそう難しくは無い目標だろう。

性質的には風遁に近い、だけど性質変化をさせた覚えは無い為、

厳密に言えば違う。

チャクラを風に変える訳ではなく、漂う空気をチャクラで操作する術であり、熟練度を上げることが出来ればその応用範囲は幾らでも考えられ、今からでも顔がニヤけてしまいそうである。

便宜上、空気チャクラを利用した術を【空遁】とし、今体術と合わせて使っている術は【空遁・圧空弾の術】。私が空遁として初めて開発した術である。

効果はそのまま圧縮した空気を対象にぶつける術だ。ネーミングセンスは気にしない。略しただけだ。

この術の、というより空遁の利点としては、普通の目には見えないうこと、操作の範囲内ならば私の任意の場所で発動できること。

威力を上げることが出来れば我ながら凶悪極まりない術だと思う。

まあ、それは将来的な話だ。

現状、この術は相手の体勢を崩す程度の効果しか期待できないし、燃費もなかなか悪い。

サスケに使った時には彼は吹っ飛んでくれたが、イクモ先生とはまず体格も違うし、あの時はサスケはボロボロで踏ん張りも利かなかったからな。

……あれだけ見事に吹き飛んでくれれば術を使った私としても気分が良いものなのだが。

今日、イクモ先生と対峙しこの術で手数を稼いで押し切れるかと思いきや、流石上忍。

経験に裏打ちされた実力と言うべきか、咄嗟の判断一つ一つが私にとっては舌を巻くものがある。

型に嵌まった動作だけでは実戦では役に立たないということか……。まだまだ学ぶべきことは多いな。

そういった点では、上忍の中でも比較的経験の長いイクモ先生に就くことが出来たのは僥倖というべきかもしれない……女性関係は

抜きで考えて。

しかしそろそろ作戦を変更しなければ。

このまま同じことを繰り返していても大したダメージを与えないのにチャクラだけが減って行くし、地味に体格差が厳しい。

イクモ先生は目測一八〇センチ程だろうか？ 大人と子供の体格差なのだ。私の攻撃は飛び込まないと当たらないし、当たってもたかが知れている。対してイクモ先生の長い射程と重い拳は一発でも当たれば形勢が傾く。

そう思ったところで、反撃に来るかと思ったイクモ先生が後ろへ飛び退いた。

向こうも今の状態は余り思わしく無かったらしい。

私は既に発動可能状態だった術を空打ちし、呼吸を整えることにする。

「全く、やってくれる……。俺の平穏を返せよ、ほんと」

私に対して言っているのか、ここにはいない誰かに対して言っているのか、遠い目をしてイクモ先生がそうばやいた。

26 選任理由と後悔

頭上に振り下ろされんとする踵落としを右手で払う様に往なし、お返しにと一步踏み込んで開いている左手で拳を打ち出す。

しかしそこには既に少女の姿は無く、俺の拳は空を切った。
パパンッ！

連続した破裂音が耳に届き、同時に俺の体は弾かれる様な衝撃に襲われる。

くそっ！ またこれだ！

「チッ」

衝撃が襲ったのは右肩と左膝の裏。

身構えることも出来ずに受けた見えない攻撃にバランスを大きく崩してしまい、意識せず舌打ちを鳴らしてしまう。

ダメージが大きくないことが唯一の救いだ。

しかし此方がバランスを崩しているところをあの少女が見逃すことは当然無い。

案の定、一旦俺の射程外に逃れていた少女が再び回し蹴りを伴いながら接近してきた。

俺は今猛烈に後悔している。二日前のあの時、火影から言い渡された異動要請を何でもちゃんと断ろうとしなかったのか。

木製の扉をノックする。

『執務室』と書かれた札を貼られた扉はかなり年季が入っており、里の歴史を感じさせる。

俺は火影に呼び出しを食らい、里の庁舎に来ていた。

この扉をくぐるのも何年ぶりか……。

返事を待っている、扉は内側から開かれた。

「ヒアシ、お前も居たのか」

「火影様が御待ちだ、入れ」

「ああ」

執務室の中から姿を現したヒアシに促されて執務室へと足を踏み入れるが、何の用で呼ばれたのか俺には知らされてないし、予想も出来ない。

数年前に何度か、里の忍者と争いを起こし、その度にこつてりと絞られ、罰を科せられたことがあった。その時は俺のちょっとした火遊びが原因だったが。あの頃は若かったな、懐かしい……。だが歳を重ね、最近では俺も落ち着いたなと自覚する程なんだが……？ 危険は冒してない筈……。それに何か問題があったとしても慰謝料を払う余裕は無いぞ？

態度には出さず、しかし心中では戦々恐々としながら、机を挟んで火影の前に立つ。

「ええと、身に覚えが無いんだが……」

「はああ……」

俺が第一声を発した瞬間に、火影は盛大に溜息を吐いた。

親指と中指で蟀谷を押さえるように顔を覆い首を左右に振り、心底情けないと言った風に。

横合いからはヒアシの白い目を感じる。元々こいつの目は白いんだが、別の意味で。

どうやら俺の言葉の意図するところを見抜いたようだ。だがその様子を見るに、今回はどうやら違う要件らしい。

「今回、お主をここに呼んだのはそんな下らぬ理由では無い。今年のアカデミー卒業生の担当上忍になって欲しいんじゃない」

「担当上忍？ 何でまた俺が？」

「今年の生徒の中にお前に見てもらいたい子がおるんじゃ」

ここまで来て、何となく状況が掴めてきた。この場にヒアシが居るとなれば予想が付く。

しかし、それこそ断れるものなら断りたいってものだ。

「俺は今の生活が気に入っている。ただでさえ戦闘能力が劣る医療忍者である上に、今は病院に掛かりつきりで上忍といっても前線でやっていたのはもう十年以上も前の話だ。他の上忍に任せた方がその子の為になるんじゃないか？」

「《日向宗家》 日向ヒアシ、《木ノ葉の亡霊》 枕クウヤ…… 仮にも此奴らとスリーマンセルを組んで、機能させていたお主ならば十分な実力はあるじゃろうし、体を見るに前線から離れた今でも鍛錬は続けているようじゃ。それに病院のこと心配せずとも、お主もそろそろ助手に席を譲ってもよからう？」

「あの子はっ……！」

「お前があの子に拘るのも分かるが、あの子だってもういい歳だろう？ いい加減に解放してやれ」

「……くっ！」

ヒアシめ、横槍を入れやがって。

俺だってそのぐらい分かっている！

俺が言い淀んでいると、火影が話を戻しにかかる。

「まあ、取り敢えずは資料を見て欲しいんじゃが、よいかな？」

「…… ああ、見るだけならば」

頷いて差し出された資料を見る。

それはいくらか後から書き足された跡のある三人分の忍者登録書だった。

予想通り、枕ミソラのものがそれに含まれていた。後の二人に関しては俺の記憶には無い。もしかしたら病院に来たことがあるのかもしれないが、入院患者以外の人間まで覚えられるほど俺は優秀では無い。

「しかしこれは……随分バランスの悪い班だな」

書き足されている項目にはアカデミーでの成績などの細かい情報が書かれており、枕ミソラ以外の二人はとても優秀と言える成績では無かった。

「枕ミソラが飛び抜けているんじやよ。この子に見合うものとなったらうちはサスケぐらいなもんじや」

「うちはの生き残りか」

「じゃが流石にアカデミーの首席と次席を同じ班にする訳にもいかんじやろ。それにこの班にもちゃんとした意味がある」

「意味？」

「二人には枕ミソラの『枷』になってもらおうと思つての。枕ミソラの過去の行動やアカデミーの情報によれば、正義感が強く、自ら危険に突っ込んでいく傾向にある。うちはの一件が良い例じやろ。じゃがそれはあの娘一人だけの場合。あの娘も愚かでは無かるう、實力の劣る仲間を危険に巻き込む可能性があるならば、慎重に動き、無謀なことはせぬじやろうて」

「随分と大切にするんだな。過去に天才と謳われた奴らは皆、この年の頃にはもう他の實力のある連中と組ませて前線へ送り出しているただらうに」

「今は戦時中では無い。下手に動いて他里に存在を知られるよりも内に隠して育てた方がいずれ里の利益になるう」

優秀な忍を大事にしたいという考えも分からんでもない。だが今は平和でも、この世界、出し惜しみしていればいつか足下を掬われかねん。火影だってそのくらいのは分かっている筈だ。

どうして枕ミソラをそこまで特別扱いするのか……別に理由がある様な気がして、どうにも腑に落ちないが……。

まあ、いい。俺がそれを考える必要は無い。

「あの娘に今足りぬものは経験じや。じゃが先程も言つた通り戦時中でもない今はそれを積ませることは難しい。だからお主に要請しておるのじや。お主の経験をあの娘に成長に役立てて欲しい。上忍

としての実力も問題無い。医療忍者としての技術もある。何より、お主は彼女の異質なチャクラを知っておろう？ それを知っておるのは儂と、日向の一部の者とお主ぐらいじゃ。これ以上他の者に知られても余計なトラブルを招きかねぬし、何かあった時、何も知らぬ者よりは上手く対処出来るじやろう？」

「……おいおい、買い被り過ぎだろう」

苦々しい思いが込み上げ、返答に詰まる。

「俺からも頼む」

暫く横で静観していたヒアシも俺に頼み込んできた。

……ヒアシの奴が俺に頭を下げるなんてな。

日向宗家でプライドの高いこいつは出来ることなら自分で面倒を見たいだろう。だが立場がそれを許さない。

この親馬鹿野郎が……そんな人間の頼み無碍にするには俺には正当な理由が少ない。

「……ったく、これで断ったら俺が悪者みたいじゃないか」

「すまぬの。お主の助手には里から辞令を出しておく。お主の口からも言っておくといいじやろう」

「分かったよ。あーあ、この歳になって平穏な日々から引き摺り出されるとは思わなかったよ！」

少しでも意趣返しをと憎まれ口と叩き、その日は執務室を後にした。

その出際にヒアシが俺に向かって囁いた、

「ミソラには気を付けた方がいい、甘く見ていると痛い目を見る」という言葉がまだ耳に残っている。

今にして思えば、説明会の前日というギリギリに言われたのも、その前に俺がミソラに接触して、万が一にもその性格と実力を知ってしまった俺の心変わりを防ぐためだったのかもしれない。

人って生き物は自分の死期を悟った際に過去のことを走馬灯のように思い出されるという。

俺の側頭部を狙って繰り出されている回し蹴りをスローモーションに感じながら、やけに冷静に働く頭で「そんなことが何かの本に書いてあったな」と思いだす。

！ 冗談じゃないっ！ 俺はまだ死なねえよ？

何とか正気を取り戻し、バランスを崩した俺に振るわれる足を、体勢を無理矢理屈めて避ける。

その際に暫く戦闘から離れていた筋肉達が悲鳴を上げるが、気にしている余裕は無い。

目の前の少女は回し蹴りで得た回転力を緩めずに二段、三段と連続して蹴りを放って来る。

往なし躲し、一連の攻撃を何とか凌ぐ。

次に来るのは恐らくまたあの不可思議な術だろう。何処から狙われたのか分からない攻撃。残りの班員の誰かが術で支援してるのか？

……いや、これだけの術を使える人間は目の前の少女以外にこの班には他に居ない。

少女は上半身を隠すように空色のポンチョを羽織り、下は黒いズボンを八分丈まで裾を折り返している。

ポンチョの下の様子は交錯した時に時折見える程度だ。恐らく布の下で俺に術のタイミングを隠すように印を組んでいるのだろう。

まだそこまでのダメージは負ってないが、このまま無意味に打ち合ってもジリ貧だ。兎も角、このままではまたあの術の餌食になる。今度は反撃をせずに地面を蹴って後ろに飛んだ。

さっきまで俺が居た場所の地面は、パンツという音と共に砂が弾かれている。

少女は俺を追いかけて来る様子は無く、「ふう」と一息ついている。

どうやらあちらも俺と同じ考えで、一旦接近戦を切り上げたいと思っていたようだ。

あれだけ術を連続行使しているんだ。幾ら多くチャクラを持っていたとしてもそれなりに消耗する筈、ジリ貧だと感じていたのは俺だけでは無かったらしいな。

距離が開いたことで俺は気持ちを切り替える。

全く、幾ら天才だからってここまでとは聞いてねえぞ。

しかも、普段の様子からは考えられないほど好戦的だ。

鈴を奪うことが目的の筈のこの演習で鈴には目も暮れず、明らかに俺を倒しにかかって来ている。

だがブランクがあるとはいえ、仮にも俺は上忍だ、やられる訳にはいかない。

俺にだってプライドはあるんだ。

認めるしかない、目の前に居るのは強敵だ。

小手先で実力を確かめようとした俺が甘かったんだ。

「全く、やってくれる……。俺の平穩を返せよ、ほんと」

俺をこんな状況に放り込んだ二人を恨みつつ、目の前のどう見てもまだアカデミー生だろうと思える小さな少女に身構えた。

27 戦いの教訓とトラウマの発生

新術【空遁】は今より練度を上げることが出来れば十分に戦力になると確認できた。後は一撃加えることが出来れば今日の成果としては上々だろう。

そう考え、【空漠の術】と【影分身の術】を使用した所でイクモ先生が話しかけて来た。

「【空漠の術】か、この目でその姿を見ているというのにまるで誰も居ないかのような感覚……懐かしいな。お前の親父が敵国に『木ノ葉の亡霊』と呼ばれていたことは知っているだろう?」

それは当然知っているが、いまいち会話の意図が掴めない。

「それが何か?」

「奴らが戦場で、その『亡霊』と出会った場合どうするか教えてやるよ」

成程ね、【空漠の術】への対応の仕方を実践してもらえらしい。いい機会だ。弱点を知ることが出来れば対策も練れる。

「……それは面白そうです」

「来い」

イクモ先生が構えに入ったことを合図に、私と影分身は左右に分かれ、イクモ先生を挟み込むように走る。気配の無い二つの実像。どちらかに気を取られればもう片方を見失うこととなる。

「【土遁・土流壁】」

私達が辿り着く前にイクモ先生は印を高速で結び地面に手を当て術を発動した。自らを囲むような『コ』の字型の壁が二メートル程の高さまで引き摺り出されるように地面から現れ、私達の視界からイクモ先生の姿を隠す。

医療忍者だと思っていたけど、土遁も使えるのか。しかも壁の形

をあんな風に変えるとは器用なもんだな。……だけど私の進攻がそんな壁で防げるとでも？

私は正面の壁を崩して注意を誘う為に。一方の影分身は現在の軌道より更に回り込み、壁の無いイクモ先生の背後を叩く為に。それぞれの進路を変えた。

【桜花衝】

壁に辿り着いた私は拳にチャクラを溜め、壁に向けて全力で殴りつけて一気に解放させると、辺りに破碎音を響かせながらイクモ先生を護っていた壁は吹き飛び、瓦礫へと変わり果てた。

直後に視界に入ったのは噴き飛んだ瓦礫から身を守るよう姿勢を低くしながら驚愕の表情を浮かべているイクモ先生。恐らく自分の壁が正面から崩されるとは思っていなかったのだろう。その反応は私の望んだ通りのものだ。そして彼の背後から近づく私の影分身。

獲った！

そして影分身が放った飛び蹴りは見事にイクモ先生の背を穿った。
「は……？」

見れば影分身の足は背から腹部に向けて貫通している。

やり過ぎた？ いや、そんな馬鹿な。いくらクリーンヒットしたと言っても、たかが飛び蹴りだ。【桜花衝】の様にチャクラを込めた訳でもない女である私の蹴りだ。こんなことはあり得ない。

一瞬過ぎた最悪の状況を否定した時、まるでその心を読んだかのようにイクモ先生の姿は土塊へと変わった。

成程……土遁系の分身術か。なら本体はどこに？

すぐに周囲に漂う空気に意識を傾けて気配を探るも、イクモ先生らしき気配は感じ取れない。どうやら逃げられたらしい。

戦場で《亡霊》と相対した者が取る行動とは『逃げる』ことだったのだろうか？

追おうにも既に感知の外だ。何処に向かったかも分からない為、地道に探査するしかない。

幸いにもまだ時間はある。今の戦闘で疲労した身体を休ませてからでも遅くは無いだろう。

そう考え、土塊に足が突き刺さったまま抜けない為にうんうん唸っていた影分身を消し、警戒を解いた。

「ぶうおっ！」

そして決して女の子が出していい様なものでは無い叫びと共に

私は地面に埋まった。

「ふー、久しぶりの術の連続使用は流石にしんどいな」

低くなった私の視界の先の地面から現れたのは、やはりイクモ先生だった。「よっこいしょ」と年寄り臭い掛け声で地中から地上へ飛び上がり、近付いて来た。

「土流壁で隠れて分身と入れ替わり、自分は土遁で地中に隠れてたってことですか？」

イクモ先生が土遁を使えた時点で気付くべきことだった。また油断か……『誘拐事件』の時に反省した筈だったのに。

「そいこと。昔お前の親父と班を組んでいたんだ、お前の術の特色くらい把握している。大方【空漠の術】での感知で近くに俺が居ないからと気を抜いたんだろうが、地中までは感知が及ばんよ。術を信用し過ぎた結果がこの状況と言う訳だ。くくっ、土の中はどんな気分だ？ ほれ？」

イクモ先生はそう言っただけで私の前にしゃがみ込み、私の頬を二度、人差し指で突く。野性味あふれる顔のその口元で弧を描きながらだ。

……百歩譲ってもその表情は悪党に見える。

「……ぐうっ」

んのにやろう。

怨嗟の念を込めて呻き睨むが、こいつはその表情を変えようとはしない。実に楽しそうだ。

「木ノ葉の里の周囲は森に囲まれている。俺たちの班は森に潜んでの戦闘と相性が良くてな、主に木ノ葉の守備部隊として任務をこなしていた」

罠に嵌った悔しさと弄られた羞恥は収まらずに睨んだままではあるが、突然語られ始めた私の知らぬ父の關係する話に興味を引かれ、黙って聞きに徹することにする。

「斥候、密偵として放たれた者、或いは前線から突出して来た輩。幾度もの襲撃から里を護る内に、前線で華々しい活躍を修める奴等ほどじゃないにしろ自然と名が売れることとなった。ま、有名なのは白眼や亡霊であつて、俺は殆ど知られることは無かつたがな」
ククツと顔には先刻とは違う笑み、昔を懐かしむかのような。

「名が知られるということは扱う術を知られるということ。敵さんはあらゆる対抗手段で俺達を攻略しようとしたよ、今の俺の様になアカデミーを卒業したばかりにも係わらずお前は十分な実力を備えている。今はまだ良い、忍者になつたばかりだし、里もお前を積極的に前に出したがってない様だしな。だがいずれそうも言つてられない時が来る。力持つ者は嫌でも目につくからな。戦争などしていなくとも命を狙われることが無いとは言切れない。その時にそれを跳ね返す力と知恵がなければ、どんなに強い奴でも案外コロリと逝つちまうもんだ」

自分の実力がそれとなく認められたことは嬉しいが、その通りだと思う。漫画での三代目火影はあつさりとは行かないまでも、大蛇丸の策に嵌り命を落としたのだから。戦闘能力であれ権力であれ、力を得るといふことは、それ故に危険も招くことにもなる。

「忍の戦いは戦闘能力の前に、戦術の読み合いが勝敗を決める。そして自分の術で何が出来て、何が出来ないのか良く知っておかねば思わぬ落とし穴に嵌る。覚えておけ」

最後にグシヤリと私の頭を乱暴に撫でてイクモ先生は立ち上がった。

「んじゃあ俺は他二人の相手もあるからな。ごゆっくり」

イクモ先生が林の方を見渡す様にぐると視線を向けると「ガサッ」と音を立てて演習開始からずっと私達の様子を窺っていた気配が二つ、離れて行く。それに続いてイクモ先生も林の中へと消えた。……音を立てて、あれじゃ追って下さいと言っているようなものだ。

「しかし、困ったな。……この状態から一人で脱出しろと？」

惘然と空を見上げて呟いた言葉はそのまま空に吸い込まれていく。誰も聞く者がいなかった筈のその言葉に反応したかは定かではないが、その時イクモ先生の去った林の中から「カサッ」と葉の揺れる音がして、視線を向けるとそこに居たのは……。

「ハア……ハア……」

埋められてから四半刻程だろうか？ 涙目で見上げた陽は既に中天へと差し迫っている。

埋められた穴を広げる為に我武者羅に体を動かし始めてからの記憶は余り無く、気付けば泣きながら地面に座り込んでいた。今、私の精神は憔悴しきっている。

何故こんなことになったのだろうか？ 少し視線を正面から右方へ移せば何かの死骸が潰れて体液を流している。それが私の身に何があつたかを脳裏にフラッシュバックさせる。

出来る事ならば忘れてしまいたい。

そうだ、忘れてしまえばいい。

……忘れる事が無理でも、記憶の奥底に仕舞い込んで封印を掛けてしまおう。こうなる原因を作った人間と一緒に封印するのだ。そうだ、それがいい。

陽の位置から見て、残り時間は残り僅かで急ぐのは当然だ。しかし時間など関係無く、今の私は一刻も早くイクモ先生を探す理由が出来た。

「ふふっ……ふふふ」

【空漠の術】を発動して無造作に生えた木々の間を進んでいると、気配を掴むより早く人の怒声が聞こえてきた。現在の練度で【空漠の術】の感知範囲は私を中心にして半径二百メートル程度。その範囲の外から声が聞こえるということは結構な大声だ。

兎も角、探す手間が省けたのは僥倖だ。私は術を維持したままその声の中心地へ駆ける。

「ちよつと！ 聞いているの。ねえ！？ いつまでそうしてるのよ！？ いい加減縄を解いてちょうだい！」

そこに居たのはアミとタタラ、そしてイクモ先生の三人。アミとタタラは乱立する木、その中でも少し太めな一本に二人一緒に縄で括りつけられていた。

大声で怒鳴っているのはやはりアミ。イクモ先生はまるでその声が聞こえないかのように胡坐を搔いて欠伸をしている。

木の影に隠れながら死角へと移動し、私は右太腿に括りつけたホルスターからクナイを抜き取って雷遁チャクラを纏わせ、イクモ先生へ放つと同時に飛び出す。チャクラ刀の様にチャクラが伝いやすい素材ではない為、威力は弱いが気休め程度にはなる。

クナイはバチツと音を立てて避ける素振りも見せなかったイクモ先生の胸へ突き刺さった。

【空漠の術】を使った完全なる不意打ち。私としては正面から打ち合う方が好きなのだが、初撃で確実に相手を仕留めるこれが本来の【空漠の術】の使い方であり極意だ。

だが今回の相手は【空漠の術】を良く知る相手、避けられないなら身代わりを立てればいい。クナイの突き刺さったイクモ先生は予

想通りただの土塊へと変わる。やはり本体は私の感知の届かない地中。ならばっ！

私は地面を蹴って飛び上がり、全身を流れるチャクラを右拳へと移動させて溜め込む。今回は影分身もしていない為、真正銘現在の私の出せる最大威力の【桜花衝】だ。チャクラの残量など今は気にしない。

「はああああっ……！」

着地と同時にその全てと地面へ叩き付けた。

けたたましい爆音が大気を震わせ、大地が爆ぜた。

「ちよっ、おまつ」

声の聞こえた方を見れば直径十メートル程の爆心地から少し離れた場所にイクモ先生が立っていた。直前に抜け出されたか。

「……ふふ……ふふふふ……」

私をあんな目に合わせた原因が目の前に居る。あれを倒せば私の心は晴れるだろうか？ そういった期待が私を歓喜させる。

「ど、どうしたんだミソラ？」

イクモ先生は私を見て狼狽えた表情をしている。失礼な。

「どうしたかって？ ふふ、教えてあげますよ……」

正直思いつくことすら苦痛だが、目の前の人物には教えてやらねばならないだろう。

だから私は余計な感情を排して心を凍らせ語る。

「あの後、先生が私の前から去ったあの後、アレが来た。堅くて、長くて、大きいアレが……」

私はもうアレを名前で呼ぶことが出来ない、呼んだ瞬間に私は私を保てなくなる様な気がするからだ。

「私は静かにアレが通り過ぎるのを待った。だというのに、アレはどんどん私の目の前に迫ってっ……！ あ、あろうことに！ わ、わたしのっ、か、かおをっ……！ う、ウネウネと！ カサカサと！ その沢山生えた脚で！ わたしの、かおっ、を、這いずりっ……まわっ……！」

あの時、身動きの取れない私の前に現れたのは『百』の『足』と書く節足動物だった。

感情を殺していたつもりだったのだが、抑えきれず溢れてくる。今も思い出す私の頬を、鼻を、髪を這いずりまわるアレの堅い脚々の感触。声が震え、視界は涙で滲み、私の膝が無意識に折れた。

「……それは……ええと、気の毒、だったな……？」

どうやら自分が悪いとは思っていないらしい。確かにイクモ先生を恨むのはお門違いかもしれない。あの状態で拘束されたのは単に私の力不足だったのだから。

私の奥底に沈んだ理性が一瞬そう思わせるが、すぐに精神の大部分を占める渦巻いた感情に呑み込まれて消えた。それじゃ私の気が収まらないのだ。抵抗すら出来ずにアレに蹂躪される原因を作ったのはやはりイクモ先生なのだから。

その感情を原動力にして立ち上がり、クナイを投擲する。場所はアミとタタラを縛っている縄。

「ひっ！」

「ふふ、ふふふっ……私がこの野郎を何としてもぶん殴るから、二人は鈴を頼むよ」

確実にイクモ先生を沈めるには私一人では心許無いかもしれないならば利用できる者は何だって利用する。二人が鈴を狙えば、当然それを防ぐためにイクモ先生は二人に気を向けなければならない。その隙を突く。

縄が解けて自由の身になった二人は意外にも素直にコクコクと頷いてくれた。少し顔色が悪い様な気もするが、今は気にしている余裕は私には無い。

「お、お前の身に降りかかったことには、き、気の毒に思うが、ただでやられる訳にはいかん、ぞ」

「では話はここまでにして、行きますっ！」

同じ過ちは犯さない、【空漠】と【影分身】の連携は前回の相対

時に破られた。ならば私に出来るのは素早さを生かした速攻。残念だが技術や戦術と言った点では相手の方が上だ。ならば忍術を使う暇を与えない事で戦術の幅を絞ってその差を狭める。幸いイクモ先生が得意であるう土遁には速攻の術は無い。

「っ！」

地面をチャクラを纏った足の裏で踏み貫き、飛び蹴りの体勢で突っ込む。しかしその突撃に反応したイクモ先生は身を翻す様に躲わす。

躲わされる事でイクモ先生の脇を通り過ぎることとなった私は、五メートル程後方へ両足で着地し、そのままバネの様に身を捻って正面を向きながら飛び上がった。

「甘いっ　　って、なっ！」

飛びかかる私に対してカウンターを合わせようとイクモ先生は身構えた　　が、直後の私の動きに動揺した。

空中での加速と軌道変更。私は私自身に【圧空弾の術】を使ったのだ。

「やああああっ！」

カウンターのタイミングをずらされたイクモ先生は体勢を防御にシフトしようとするが、それより早くイクモ先生へと迫った私はすれ違いざまに延髄蹴りを放った。

「ガアッ………！」

「タタラア！　アミ！」

無防備の首へ叩き込んだ一撃は、空中で無理矢理体勢を変えてバランスを崩していた事もあり、意識を刈り取るには至らなかった。しかし一瞬の混濁には十分だったようで、イクモ先生は数歩よろめく様に歩く。

呆然としていたアミとタタラは、私の声に自分達のすべきことを思い出した様でそれぞれ動きだす。その様子を見ながら私は受け身を取ることも出来ずに墜落して地面を数メートル削ることとなった。無理な動きと捨て身の攻撃で体のあちこちが悲鳴を上げているが、

28 新人下忍と担当上忍の憂鬱

「はあ……」

ああ、溜息が止まらねえ。

「どうしたんすか、イクモさん？ そんな暗い顔しちゃって」

声がして隣を見れば、能天気な表情の猿飛アスマの顔があった。

こいつは猿飛ヒルゼンの息子。つまり三代目火影の息子だ。

「なあ、アスマよ…… お前から俺を担当上忍から外してくれるよう火影に掛け合ってくれないか？」

「はあ？ いきなり何を言いだすんすか。幾ら俺が息子だからって親父…… 三代目が下した決定に俺が口を出せる訳無いじゃないですか」

「…… だよなあ。いや、悪かった。…… はあ」

「…… ねえ、一体先生ったらどうしちゃったのよ？ カカシ知らないの？」

ヒソヒソと自分の隣に座るはたけカカシに話しかけているのは夕日紅。この娘とは木ノ葉病院での医者と患者としての付き合いがなく、俺の事を先生と呼んでくる。…… まあ、美人から『先生』と呼ばれるのは悪い気はしないがな。

「ああ、それはたぶ」

カカシは何か分かっているような感じで口を開くが、若輩に見透かされているようで気分が悪く、途中で遮る。

「なあ、紅よ…… 俺の担当とお前の担当、替わってみないか？ き

つと毎日が刺激に満ちているぞ」

「ええ？ い、いえ、新米の私には今の班が合っている気がしますから。犬塚の子がちょっと暴走しがちですけど、他の二人はフオロ

「が上手ですし、皆いい子ですから」

「……そうかあ。それは良かったな。……はあ」

「あ、ああ、イクモさん？ あの一、折角こうして新しく下忍の担当上忍になった皆で飲んでるんだから。元気出しましょうよ？ ね？」

カカシが俺の顔を窺いながら言う。そういうお前は飲んでる時ぐらいその鼻まで覆っている黒いマスクを外したらどうなんだ？ というか、こいつの御猪口の酒は確実に減っているんだが、いつの間にか呑んでいる？

「なあ、カカシよ……いや、やっぱいいわ。……はあ」

「ええっ？ ちよ、そこは俺にも三代目と交渉だの交代しろだの言うところでしょ！ 折角カッコイ返しを考えてたつてのに」

ズルリと椅子から滑り落ちる様な仕草をしながらカカシは抗議して来るが、よくよく考えればこいつの班も爆弾を抱えているようなもんだからな。

「や、お前のそこはお前のところで大変そうだからな」

「カカシのそこっていったら、確かあのナルトとサスケが居たな。

アカデミーの問題児とうちはの末裔、ははっ、確かに大変だな」

「ああ、色々問題はあるけど、根はいい子ら……の筈。ま！ 何とかなるでしょ！」

カカシ班に対する俺とアスマの評価に「何とかなる」の一言で片付ける辺り、こいつらしいが、そんなんで大丈夫か？

「で！ イクモさん、あなたを悩ませている理由は、あの枕ミソラですか？」

酒のお代わりを頼む頃、ズバリと言った風にカカシが聞いて来た。

「……まあ、そんなところだ。お前、ミソラと面識があったか？」

「いやま、あの子が木ノ葉病院に入院してた時に丁度俺も入院してましてね、ははっ。その時にちよっと」

俺が病院で働いていたからだろっ、しょっちゅう運び込まれる力カシは苦笑して答えた。

「お前はベッドの肥やしだからな。まあ、その点で言えばアイツも二代目力カシになれるかもな。今日も病院に寄って来たところだし」「いや、耳が痛い」

「俺はその後一時間に亘って聞かされたヒアシの説教を思い出しちまって、頭が痛くなってきた」

全くあの親馬鹿は……。俺は悪くないっつの。

「枕ミソラって、あのアカデミー首席の枕ミソラよね、彼女が何か問題でも？ 私も見ただことくらいはあるけど、ちっちゃくて大人しい可愛らしい子だった気がするんだけど……」

枕ミソラという名前を聞いて紅は不思議そうな表情だ。確かに遠目で見ると分には年齢よりさらに幼く見える容姿も相俟って可愛らしい子供に見えるだろう。

「ま、話した事が無い人にはそう思われるかもしれないね。実際は見かけとは逆で、とても子供には思えなかったけど」

「ああ、子供らしからぬ言動や行動。それに今日知ったことだが、かなりの戦闘狂だよあれは」

「じゃあ、その実力はどうだったんすか？」

アスマも興味を持ったようで、髭の生えた顎を指でなぞる仕草を見せる。

「実力……か。」

「……俺から、実力で鈴を奪うくらいには。時代が時代なら力カシ、お前と同じような経歴を辿っていてもおかしくないだろうよ」

実際に鈴を手にしたのはミソラではないが、あいつが居なけりゃ奪われることはなかっただろう。

「うわぁ」

「ウソ……」

「……マジかよ」

言葉は違っが皆思うところは同じだろう。俺も同じ気分だよ。

そもそもあの演習は担当上忍がそれとなく誘導して、新人がそれに応えることが出来るかどうかを見るものであり、鈴の奪取が出来るとは想定されていない。それ程に新人と上忍との差は大きい。

鈴は三人の仲間意識を薄める為のブラフであり、それを乗り越えた者だけが下忍となれる。

とはいっても、時折今回みたいな例外が現れることも事実だが。

「つつても、俺も上忍とは言っても底辺だし戦闘タイプでもないからな。まあ奥の手まで使わされた事には驚いたが。ははっ」

思わず乾いた笑みが漏れてしまう。

「でも、上忍と下忍の差つてのは、そう簡単には埋まらないものでしょ」

「何だか、先生が落ち込む理由が分かった気がするわ」

「ああ……」

十以上年下の後輩達に同情される俺……何だか惨めになって来た。一応フォローはしておこう。

「だが、まだまだ経験が浅いおかげで戦い方が荒く、かつ甘い。本当の戦闘となればものの数秒で片が付くさ」

それもいつまで続くかはわからんがな。

そして枕ミソラに関しては他にも頭が痛くなるようなことがある。

「まあ、それだけなら問題はないんだがな。木ノ葉に優秀な忍が増えることには喜ぶべきことだ」

「まだ何かあるんすか？」

「あいつを見ているとな……どこか危ういんだよ」

「あー、それ何となく分かりますよ。……うちのサスケもそうだけど、昔、病院で見た時の彼女の目、とてもその歳の女の子がしている様な目じゃなかったからね、まるで生き急いでるような目」

「ふむ、そこまで分析しているか、流石ベッドの肥やし仲間だな。

だが両親を殺した九尾を憎んでいる訳でもなく、巻き込まれたうちはその一件の犯人である、うちはイタチを恨んでいる訳でもなさそうだ。何かは知らんが腹に一物を抱えていることは間違いないんだろ

うが……」

カカシがいじけ始めたが無視だ。

「兎も角、そういう奴ってのは目的のためなら自分を顧みない上、一度その思いが折れる様な事があれば立ち直れない。俺は医療忍者だが、体は治せても精神については門外漢だっつーに」

一息吐き、御猪口に半分ほど残った酒『トワノハタチ』を煽った。

この酒は水の国から取り寄せられているそうだ。十年程前まで、ほぼ鎖国状態だった水の国だが、『霧隠れの里』の五代目水影の就任を契機に他国との輸出入ルートを切り開き、最近ではこういった嗜好品も多く出回っている。

味はその銘を皮肉ったかの様に辛口だ。現実はその甘くはないということだろうか。だが、引き締まった味わいの後に旨味と爽快感が残るいい酒だ。

「まあ、なるようになるしかないんだろうがな……」

カカシの班と同じような結論に至ったことに自分自身辟易としながら次の酒を注文する。

結局、あいつが何を考えているか分からない以上、何か起きたその時に対処するしかないんだろう。

第一回新人担当上忍懇親会と銘打って開かれたこの飲み会は、それぞれの班のことなどを話しながら続いていた。

同期となる人間達は同じ任務を請け負うことも少なくなき、班としての連携が必要となった時に情報は多いに越したことがない為、こういった会話は意外と重要であり有意義なものだった。……が、それも途中までの話。

まず始めにアスマが、彼の正面に座る、酒の回った紅に注がれは飲まされを繰り返して潰され、次のターゲットにされた俺が「ああ？ 私の酒が飲めないっていいのかしら？」と凄まれて敢え無く撃沈。その後は知らないが、恐らくカカシも彼女の犠牲になったことは火を見るより明らかだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364o/>

異郷の空は青く

2011年10月9日09時38分発行